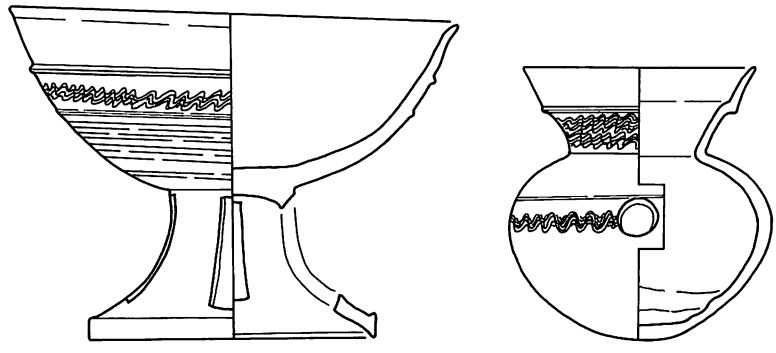
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第182集

山梨県東八代郡中道町

岩清水遺跡

IWASHIMIZU　SITE

―甲斐風土記の丘「曽根丘陵公園」造成にともなう発掘調査報告書―



2000．3

山梨県教育委員会

山梨県東八代郡中道町

岩清水遺跡

IWASHIMIZU　SITE

―甲斐風土記の丘「曽根丘陵公園」造成にともなう発掘調査報告書―

2000. 3

山梨県教育委員会

第１・２号円形低墳墓全景（右上はかんかん塚（茶塚）古墳）

第１号円形低墳墓周溝部出土須恵器

序

本報告書は、1973年に建設が決定されて順次整備の進められてきた甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園の整備事業に関わる1994年に発掘調査された山梨県東八代郡中道町下曽根字山本877番地他に所在する岩清水遺跡などの成果をまとめたものです。

県の南東部の曽根丘陵の一角に位置する岩清水遺跡などを抱える東山一帯は、古くより遺跡の宝庫として知られ、これまでに旧石器時代から弥生時代、それに古墳時代にかけての遺跡が数多く発掘調査され、また保存されてきた地域です。特に弥生時代から古墳時代の重要な遺跡が集中する地域で、上の平遺跡方形周溝墓群、大丸山古墳、銚子塚古墳、丸山塚古墳、かんかん塚古墳、東山北遺跡1号方形周溝墓、東山南B遺跡低墳丘古墳など、県内屈指の墳墓群が見られる地域で、指呼の間にある小平沢古墳、天神山古墳などとともに当時の甲斐国の政治権力を一手に掌握して中枢地を形成した地域であります。

今回報告する岩清水遺跡は、背後の東山にある大丸山古墳、丘陵下の銚子塚古墳、丸山塚古墳、かんかん塚古墳にはさまれた地域にあります。そして調査の結果、弥生時代の住居跡13軒、古墳時代の円形低墳丘墓3基が確認されました。特に円形低墳丘墓は、主体部の検出はありませんでしたが、周溝内から出土した須恵器などから5世紀後半代に造られたものであることが確認されました。5世紀後半代になると中枢地であったこの地域が衰退をみせますが、何故衰退していくかを考える重要な遺跡ということが明らかとなりました。今後、周辺の古墳を含め、そのメカニズムが解明されるものと思っております。　今回の調査によって、このような重要な遺跡が発見され、幸いにも公園内に復元整備され、未来へ受け継がれて行く意義は大きいものと存じます。本書を学習や研究の資料としてご利用下さいますよう念じてやみません。なお、末筆となりましたが本調査にご協力等を賜った関係機関各位、ならびに直接発掘調査、整理作業に当たられた方々に厚くお礼申し上げます。

2000年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所　長　大　塚　初　重

例　　言

1．本報告書は、山梨県東八代郡中道町下曽根字山本877番地他に所在する岩清水遺跡の発掘調査報告書である。

2．本事業は、甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園整備に先立って、1994年度に実施したものである。

3．発掘調査および整理調査は山梨県埋蔵文化財センターが担当した。

4．本書の編集および執筆は第3章第1節中の包含層出土遺物・第4章第1・2節を石神孝子が、それ以外の全てを坂本美夫が担当した。

5．巻頭図版は、航空写真については、㈱技術コンサル、遺物については日本写真家協会会員塚原明生氏によるものである。また、巻末の写真図版の撮影は、遺構については、坂本、石神が、遺物については、塚原明生氏が行った。

6．報告書にかかわる記録図面、出土品、写真などは山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡　　例

1．図版の縮尺は原則として遺構を1／60、遺物を1／3としたが、大きさにより任意の縮尺としたものもある。

2．図版中のスクリーン・トーン及び記号の内容は図版内に示した。

3．図版中、断面図左側の数字は標高を示している。

目　　次

序
例言
凡例

第１章　調査の実施と経過 …… 1
　第１節　調査経過 …… 1

第２章　遺跡の環境 …… 2
　第１節　位置と地理的環境 …… 2
　第２節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 2
　第３節　調査の実施 …… 4

第３章　調査の概要 …… 7
　第１節　竪穴住居跡 …… 7
　第２節　円形低墳墓 …… 35
　第３節　土　　坑 …… 45
　第４節　丸山塚古墳周溝外縁の調査 …… 45

第４章　各　説 …… 48
　第１節　低墳墓出土の古式須恵器について－とくに甕・壺（もしくは大型瓶）を中心に－ …… 48
　第２節　おわりに …… 51

挿　図　目　次

第１図　岩清水遺跡の位置と周辺の遺跡分布図……3
第２図　岩清水遺跡全体図……5～6
第３図　１号住居跡……8
第４図　１号住居跡出土土器（１）……9
第５図　１号住居跡出土土器（２）……10
第６図　３号住居跡……11
第７図　３号住居跡出土遺物……11
第８図　２・４・５号住居跡（１）……12
第９図　２・４・５号住居跡（２）……13
第10図　６号住居跡……14
第11図　２・４・５・６号住居跡出土遺物……15
第12図　７号住居跡……16
第13図　８号住居跡……17
第14図　９・10号住居跡……17
第15図　11・12号住居跡……18
第16図　13号住居跡……19
第17図　９・11・13号住居跡出土遺物……20
第18図　包含層出土土器　台付甕（１）……21
第19図　包含層出土土器　台付甕（２）……22
第20図　包含層出土土器　台付甕（３）……23
第21図　包含層出土土器　台付甕（４）……24
第22図　包含層出土土器　台付甕（５）……25
第23図　包含層出土土器　台付甕（６）……26
第24図　包含層出土土器　壺（１）……27
第25図　包含層出土土器　壺（２）……28
第26図　包含層出土土器　壺（３）……29
第27図　包含層出土土器　壺（４）……30
第28図　包含層出土土器　壺（５）……31
第29図　包含層出土土器　壺（６）……32
第30図　包含層出土土器　壺（７）……33
第31図　包含層出土土器　高杯・鉢・
ミニチュア土器・紡錘車……34
第32図　石器・玉類……34
第33図　第１号墓……36
第34図　第１号墓遺物分布図……37
第35図　第１号墓出土遺物……38
第36図　第２号墓……40
第37図　第２号墓遺物分布図……41
第38図　第２号墓出土遺物（１）……42
第39図　第２号墓出土遺物（２）……43
第40図　第３号墓・１号土坑……44
第41図　１号土坑出土遺物……44
第42図　丸山塚古墳周溝部断面図（１）……46
第43図　丸山塚古墳周溝部断面図（２）……47
第44図　甲府盆地出土須恵器（甕・壺類）編年案……50

図　版　目　次

図版１　１．調査前風景
２．１号住居跡
３．遺物出土状況（平底甕）
４．遺物出土状況
５．作業風景
６．１号住居跡出土遺物
図版２　７～11．１号住居跡出土遺物
12．３号住居跡
13．遺物出土状況
14．３号住居跡出土遺物　壺
15．３号住居跡出土遺物　壺
図版３　16．２号住居跡
17．２・４・５号住居跡
18．６号住居跡
19．６号住居跡遺物出土状況
20．６号住居跡出土遺物
図版４　21．８号住居跡
22．８号住居跡耳栓出土状況
23．８号住居跡耳栓
24．９・10号住居跡
25．11・12号住居跡
図版５　26．13号住居跡
27．紡錘車
28．11号住居跡出土土製品
29．包含層出土磨製石斧
30．土製管玉
31．土製勾玉
32．ミニチュア土器
33．包含層出土遺物
34．包含層出土遺物
図版６　35．１号円形低墳墓
36．作業風景
37．１号円形低墳墓周溝部出土遺物
38．竈出土状況
39．竈
40．高杯
図版７　41．壺
42～46．高杯
47～49．杯
図版８　50．第２号円形低墳墓
51．第２号円形低墳墓周溝部断面
52．遺物出土状況
53．作業風景
54．２号円形低墳墓出土遺物
図版９　55．２号円形低墳墓出土須恵器
56．壺
57．高杯（須恵器）
58～61．高杯
図版10　62～65．杯
66．丸山塚古墳周溝部調査風景遠景
67．第８号トレンチ
68．第７号トレンチ
69．調査風景

第１章　調査の実施と経過

第１節　調査経過

１　発掘調査事務経過

本調査区は、風土記の丘「曽根丘陵公園」内の、大丸山古墳の南西側・かんかん塚（茶塚）古墳の南側に位置する。風土記の丘整備事業計画の中で、平成５年度には東山の傾斜変換点とすでに公園範囲であるかんかん塚（茶塚）古墳の北側に挟まれた畑地が、新たに公園として整備されることになった。このため、平成５年度に遺跡の有無を確認するため、試掘調査を実施したところ、弥生時代に位置づけられる遺構・遺物を広範囲にわたって確認した。そこで翌年の平成６年度に発掘調査が実施されるに至った。

平成６年５月19日　文化庁に発掘通知を提出する。

平成６年６月７日　発掘調査を開始する。

平成７年２月３日　発掘調査終了。

なお、調査終了後に南甲府警察署へ発見通知を提出する。

２　調査組織

調 査 主 体　山梨県教育委員会

調 査 機 関　山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者　山梨県埋蔵文化財センター

副主幹文化財主事　坂本美夫

文 化 財 主 事　石神孝子

山梨県研修生　雨森・サンドラ・奈美（ブラジル国、サンパウロ大学人類学修士卒業）

調　査　員　村松佳幸

作業従事者

相原ツネ子、相川一枝、青柳　清、出月多津子、出月多枝美、飯寄貞子、猪股順子、今沢美代、池谷さち子、宇野和子、宇野文子、梅林はなの、江川勝子、長田くみ子、長田和子、長田奈代子、長田美和子、長田富子、長田純子、長田久江、窪田道太郎、小林五男、小林喜久子、小林としみ、小林　諭、小林弘子、小林美津代、小林敬子、後藤京子、小管春江、斎藤多喜子、斎藤重信、志田美香、志田幸江、塩島冨美子、杉山秀樹、関口愛子、田中文雄、武田きく江、千野富子、土橋園子、富永明、中込志ず江、内藤由紀子、芳賀茂樹、花形正男、古屋茂子、穂坂武徳、村田美由紀、村松重夫、村松　博、森本通久、矢崎悦子、山口義男、渡辺礼子、渡辺𠮷乃女

整理作業

池谷さち子、猪股順子、今沢美代子、伊藤順子、土橋園子、志田幸江、志村君子、斎藤律子、小管春江、村田美由紀、山本有希、北原和江、中込星子、清水真弓、森田良子

協力者・協力機関

林部光（中道町教育委員会）、宮沢公雄・河西学（帝京大学山梨文化財研究所）

第２章　遺跡の環境

第１節　位置と地理的環境

１　位置

岩清水遺跡の所在する東八代郡中道町は、甲府盆地の南東部に位置する。北を笛吹川を挟んで甲府市、石和町、東を境川村、南を滝戸山、日蔭山、右左口峠などによって芦川村、上九一色村、西を豊富村、西八代郡三珠町と接する。Ｌ字状の町域を持ち、笛吹川から僅かに南に下ったあたりに標高350ｍ前後の曽根丘陵が北東から南西に連なり、さらにその背後に御坂山地が控えるなど、山間地的様相の強い町である。岩清水遺跡は、この町域の北端あたりの曽根丘陵上の一支丘である東山の裾に位置している。

ＪＲ甲府駅より直線で南方8,3㎞、中央自動車道甲府南・中道インター料金所より南西600ｍ付近にある。

２　地理的環境

中道町の町域は、先のようにそのほとんどを曽根丘陵上に置いており、山間地的様相が強い。この曽根丘陵の縁は、人手状に幾つもの台地が突き出ており、その台地の間に御坂山地に源を発した中小河川が流れ、前面の笛吹川に流れ込んでいる。

岩清水遺跡は、間門川と滝戸川とに挟まれた台地である東山（標高340,2ｍ）が盆地側へ落ちる山裾に位置している。岩清水遺跡の前面（盆地側）は笛吹川の沖積地へとつながっており、東山との標高差はおおよそ100ｍほどになる。また東山の南西側には、谷を挟んで米倉山（標高340ｍ）の台地が、また北東側にはやはり谷を挟んで旭山（標高380ｍ）の台地がみられる。

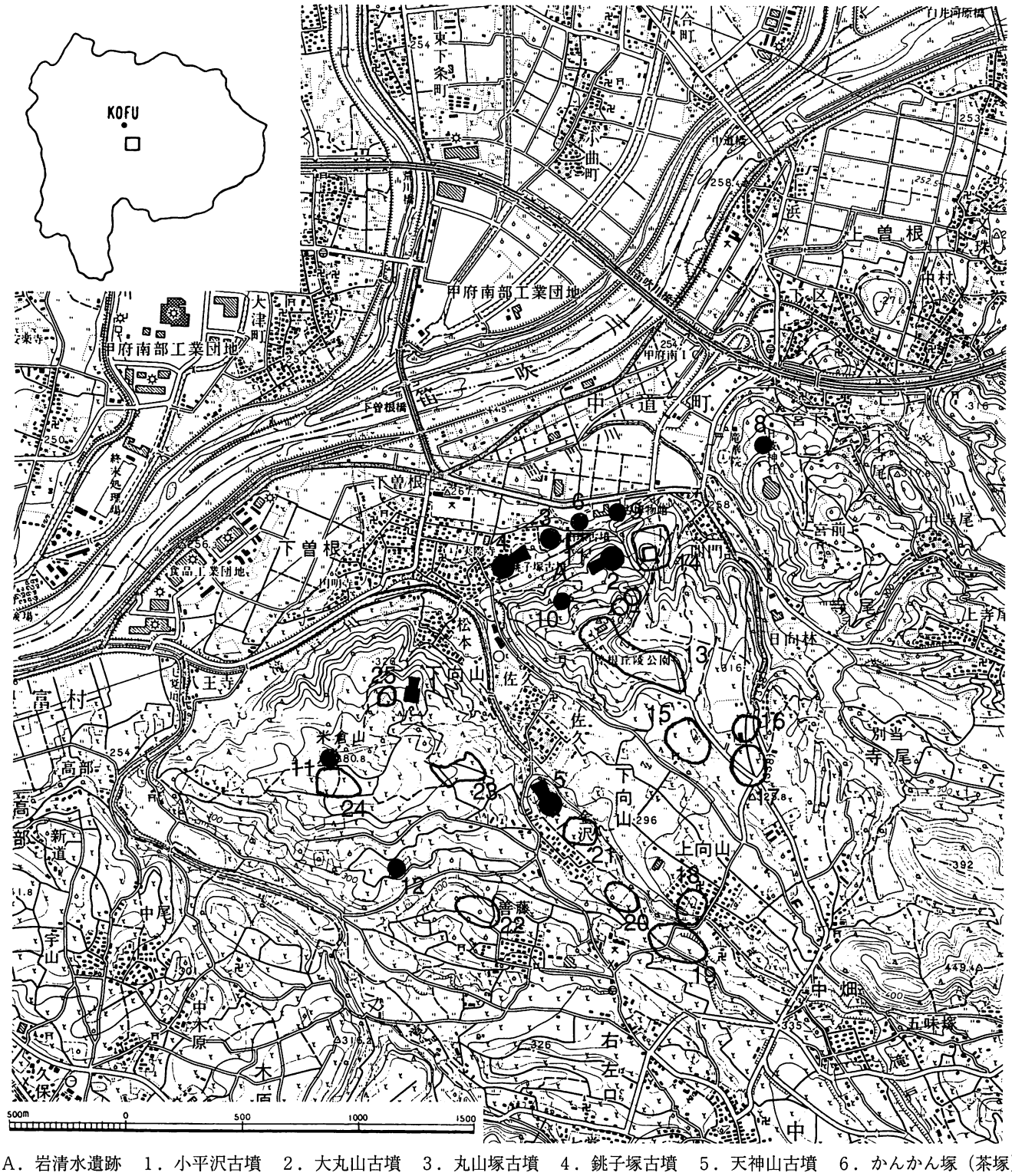
第２節　遺跡周辺の歴史的環境

岩清水遺跡の所在する中道町地域は、旧石器時代より古代に至る間の遺跡が濃密に分布する地域である。また、東山地域に限つても昭和55年（1983）に本センターによって調査された旧石器時代の立石遺跡に始まり、古墳時代へと連綿と続く遺跡を擁する地域である。そしてその中でも弥生時代より古墳時代に隆盛をみせ、特に古墳時代には本県の政治的中枢地となった地域である。

旧石器時代の遺跡としては、本県の中でも古い時期の部類に入る立石遺跡が、本遺跡の背後の東山の台地上南側に位置している。また西側の米倉山地域においても、米倉山遺跡などが知られている。縄文時代では、本遺跡の南西に所在する米倉山地域に清水遺跡、小平沢遺跡が、東山の台地上には立石遺跡、上の平遺跡、南東側において下向山遺跡、上野原遺跡などの存在が知られる。

弥生時代の遺跡としては、本遺跡の南西に所在する米倉山地域に女沢遺跡、菖蒲池遺跡、本遺跡のある東山地域の東側に向山遺跡、熊久保遺跡、宮の上遺跡、弥生時代の終わりころから古墳時代にかけての多数の方形周溝墓で知られる上の平遺跡などが存在している。

弥生時代の終わりころよりこの地域に遺跡が集中し、特に古墳時代前期には米倉山地域、それに金沢地域とあいまって、本県における政治権力を掌握して中枢地を形成する。本遺跡の存在する東山地域には、東山の台地上とその裾部に４世紀中頃から５世紀後半代に築造されたと考えられる大丸山古墳（前方後円墳、全長99ｍないし120ｍ）、銚子塚古墳（前方後円墳、全長167ｍ）、丸山塚古墳（円墳、直径72ｍ）、かんかん塚（茶塚）古墳（円墳、直径26ｍ）などの前期古墳が存在する。これらの古墳は、東山古墳群と呼ばれているもので、本県屈指の古墳群である。さらに、南西に位置する米倉山地域には、本県最古の４世紀前半代の築造と考えられる小平沢古墳（前方後方墳、全長45ｍ）、そしてこの中間の金沢地区にも、天神山古墳（前方後円墳、全長135ｍ）といった前期古墳が存在する。これら３地域は古墳時代後期になっても古墳が造られ続けるが、その隆盛期は弥生時代末から古墳時代前期ころにある。そして５世紀中ころになると、周辺地域にはかんかん塚古墳を遥かに凌ぐ全長60ｍ前後の前方後円墳ないし帆立貝古墳などが造られるようになる。東側には中道町の東端に所在する馬乗山古墳（前方後円墳、全長60ｍ）、表門神社古墳（帆立貝古墳ないし造り出し付円墳、直径40ｍ）、八



A．岩清水遺跡　1．小平沢古墳　2．大丸山古墳　3．丸山塚古墳　4．銚子塚古墳　5．天神山古墳　6．かんかん塚（茶塚）古墳　7．東山南遺跡　8．朝日1号墳　9．博物館構内古墳　10．稲荷塚古墳　11．米倉山無名墳　12．くちゃあ塚古墳　13．上の平遺跡　14．東山北遺跡　15．宮ノ上遺跡　16能久保遺跡　17．立石遺跡　18向山氏館跡　19．向山遺跡　20．下向山遺跡　21．天神遺跡　22．西原遺跡　23．米倉山B遺跡　24．菖蒲池遺跡　25．女沢遺跡

第1図　岩清水遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

代町狐塚古墳（帆立貝古墳、全長45m）などがある。西側には豊富村王塚古墳（前方後円墳、全長60m）、三星院1号墳（造り出し付き円墳、直径35m）、三珠町大塚古墳（帆立貝古墳、全長40～60m）などがそれである。このような古墳の規模からすると、県内の政治権力が一か所に集中していた状況が破壊され、分散された状況が窺えるのである。さらに、東山南遺跡1・2号墳などのような小規模な円形周溝墓ないし低墳丘古墳が、先程の周囲に分散した古墳などの周囲からも、また新たな地域においても同時に確認できる状況が、ちょうどこ

の時期ころ前後にあるといえるのである。この状況は、まさに中道町地域の一か所に集中していた政治権力の分散化と、地域共同体社会の変革とが同時に進行したことを示しているものと捕らえられるのである。今回調査した岩清水遺跡は、これらの動向に深くかかわっており、かつ明確にその姿を示しているものと考えてよいであろう。

第3節　調査の実施

1　調査方法とグリッドの設定

本遺跡は、試掘調査でも遺物、遺構などが確認されているが、土地の表面に土器片などの散布が確認できたことから、遺物散布の認められる2本の農道と丸山塚古墳に挟まれた地域は、全てグリッド方式で調査を行うこととした。さらに、重要な地域のため遺物散布の認められない地域に対しても、トレンチ方式で極力試掘調査をおこない、遺構などの有無を確認した。そして遺構などの確認された場合には、本調査を実施する方針で臨んだ。しかし試掘調査によって確認された遺構などは、わずかに丸山塚古墳の南側の周溝の立ち上がりが確認された以外全くなかった。

グリッドは、調査事務所を置いた地域に基本杭であるＥＤ・０１の杭を設定し、これと東側の農道脇に設置されていた工事用基本杭とを基本線とした。そしてＥＤ・０１の杭を基準として南側に５ｍグリッドを設定した。杭番号は、東西方向についてはＥＤ・０１の杭を出発点として西側に19まで、南北方向は調査範囲が含まれるよう基本杭をＥＤとして、北から南に向かってＡからＱまでを設定した。もちろん基本杭の東側についてもグリッドを設定する予定であったが、南側の調査終了後の調査において遺構は全く確認できず、また確認された遺物も極少量であったため、杭番号は付けなかった。

2　調査の経過と概要

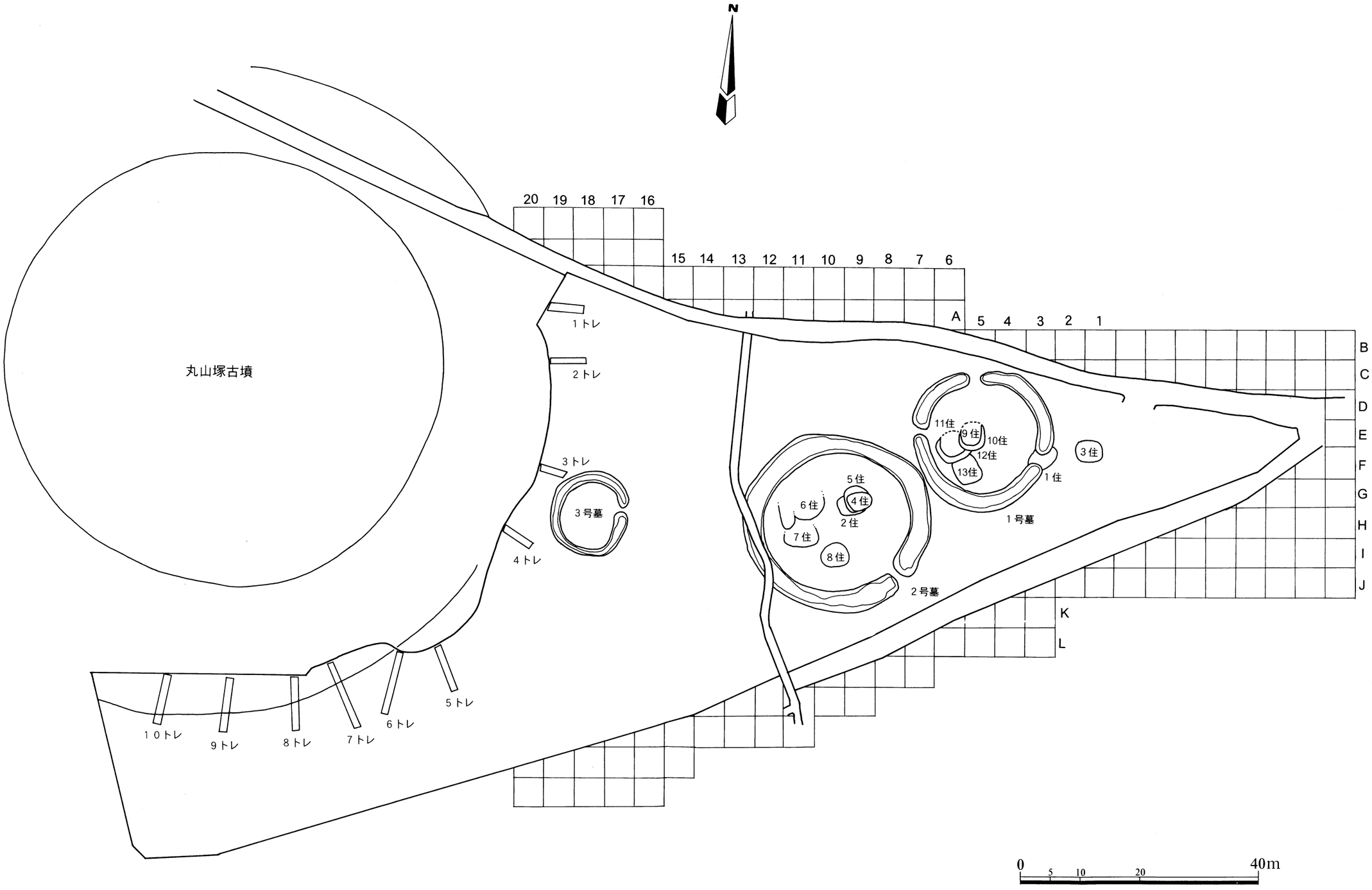
調査当初は、試掘調査結果をもとに比較的密度の薄い、住居跡を主体とする遺跡と把握していた。そして表土除去後は土器などが比較的密に確認されたことから、やや密度の濃い住居跡を主体とする集落跡の存在を予想した。

まず、Ａ～Ｌ・１～６のグリッドの範囲の表土剥ぎを行い、遺構の平面形態の把握に努めた。しかし、この中で住居跡と考えていたものは溝の一部であることが確認され、さらに円形に回ることが明らかとなり円形低墳墓であることが確認された（１号円形低墳墓)。このためさらに西側へ表土剥ぎを広げ、１号円形低墳墓の南東側に同様な低墳墓の存在が接するような状況で確認された（２号円形低墳墓)。また両低墳墓の台状部において行った主体部の確認調査では、主体部を確認することはできなかったものの、代わりに弥生時代末ころの土器片などが多数確認され、竪穴住居跡の多数存在するであろうことが明らかとなった。これは円形低墳墓が弥生時代後期から末期にかけての集落跡に造られたことによるものであるが、住居跡を造った基盤層が山裾に位置していたことなどによるものなのか、住居跡の輪郭を容易に検出できる状況のものでなく、特に１号円形低墳墓の台上部においてはこれ以上調査すると曖昧な恣意的な住居跡を造ってしまう恐れがでてきたため13号住居跡で打ち切り、その回りのものについては調査をせずそのまま埋設することとした。この他１号円形低墳墓の周辺においても、幾つかの竪穴住居跡の存在が併せて確認された。さらに南北に流れる水路の西側においても、小規模なものであるが円形低墳墓が確認された（３号円形低墳墓)。

丸山塚古墳の周溝の南側立ち上りについては、昭和58年度の調査によってさらに南側に広がることが想定されていた。このためトレンチを設定して調査したところ、ほぼ想定していた位置から周溝の立ち上がり部分を確認することができた。

基準杭の東側の三角形に残った土地についても、調査の最終時期に調査を実施したが、これといった遺構などの検出はなかった。

試掘調査については、水路の西側で丸山塚古墳と銚子塚古墳の南側にあたる斜面付近を中心に実施したが、特に山際では現在の土が地山の土で、また下がった地域も30㎝前後で安定した地山となり、全く遺構などは確認されなかった。



第２図　岩清水遺跡全体図

第３章　調査の概要

第１節　竪穴住居跡

１号住居跡

Ｆ２・３グリッドで確認された。１号円形低墳墓の周溝によって北西及び南西部分を切られている。またその間の部分についても、円形低墳墓の陸橋部分となっているため残存状況は非常に悪い。さらに、住居跡の平面形態についても部分的にでも確認できる所が無く、明確な形態、規模、内部施設などを把握するまでには至らず、僅かに炉が検出された程度といえるものであった。

炉は南北に長い地焼炉で、枕石などの設備は確認できなかった。５㎝程の焼土層と、1㎝程の炭化物、焼土粒子を含んだ茶褐色土層がみられ、その上部などから土器類が比較的まとまって確認された。

遺物は、図化できたものに口縁部の内面に櫛による波状文のみられる壺（第４図１）、単純口縁壺（同２）、頸部にボタン状浮文をもつ壺（同６）、単純口縁甕（同８）、口縁部に刻目を施す台付甕（同９・10、第５図11・12)、鉢（第５図13)、高杯（同14）などがある。これらから弥生時代末ころの時期が考えられる。

３号住居跡

Ｅ１・２、Ｆ１・２グリッドで、単独で確認された。しかし、東壁沿いを浅い水路様の溝が南北に走っており、これによって削平されている。

住居跡は、ほぼ東西に主軸をもつ楕円形を呈するもので、規模は長軸で4.6ｍ（現存長)、短軸3.15ｍほどの大きさである。壁は南側と西側で僅かに残った部分が確認されたに過ぎない。床は堅く叩き締められ、多少の凸凹はみられるもののほぼ平らに造られている。周溝はみられない。柱穴は４本主柱穴で、直径40～60㎝、深さ30～70㎝ほどである。炉は、住居跡東側の柱穴列のほぼ中間あたりに造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、直径50㎝ほどの大きさで、厚さ15㎝ほどの焼土が確認できる。住居跡の西側の壁回りを中心にして、量的には少ないが残りの良好な甕などの土器の出土があった。

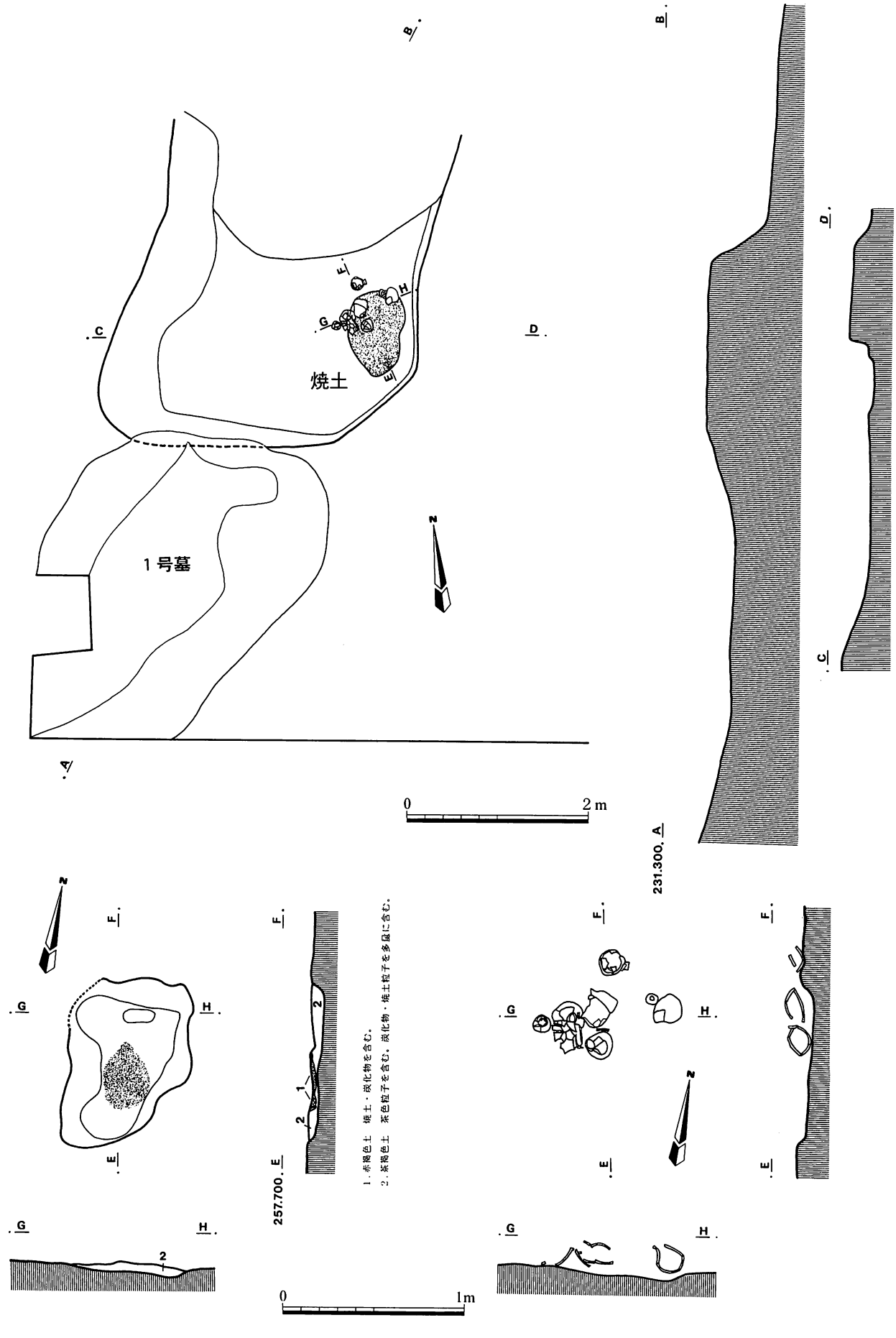
遺物で図化できたものは壺（第７図１)、単純口縁の甕（同２)、鉢（同３)、小型壺（同４）などと少ない。そしてこれらはの土器は、いずれも輪積痕が比較的顕著に認められる造りのものである。住居跡形態や土器などから、弥生時代末ころの時期が考えられるものである。

２号住居跡

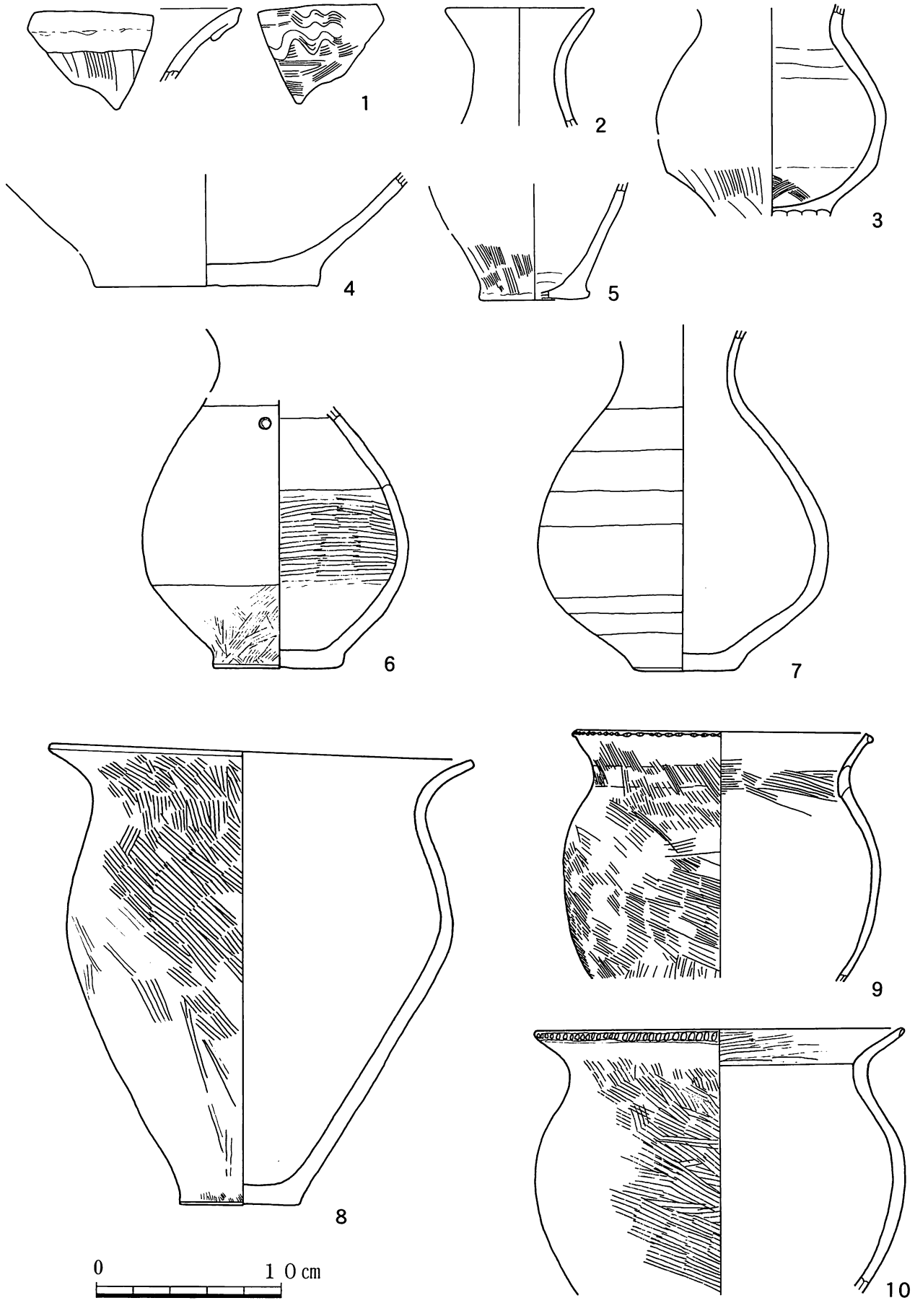
Ｇ９・10、Ｈ９・10グリッドで４・５号住居跡それに溝と重複して確認された。住居跡等の新旧関係は、５号住居跡の炉を４号住居跡が切っており、５号住居跡及び４号住居跡と２号住居跡との関係は、４号住居跡の周溝の一部が２号住居跡の床の下から確認され、また５号住居跡内で２号住居跡の壁の輪郭が確認できたことなどから、２号住居跡が最も新しく、次が４号住居跡、そして５号住居跡が最も古いものととらえられた。住居跡と２号円形低墳墓との関係は、住居跡が２号円形低墳墓に先行するものである。

本住居跡は一部が溝によって切られているが、そのほかはおおよそ壁を確認することができた。本住居跡の平面形態は隅丸方形に近い形態を呈しており、東西1.7ｍ、南北2.3ｍほどの大きさである。床は比較的堅く叩き締められ、ほぼ平らに造られている。周溝はみられない。柱穴は確認できなかった。炉は住居跡の中心からやや北東寄りにみられる焼土が、該当するものと考えられる。このほか南西の壁近くには性格不明の小穴と、それに沿うように焼土化した凸堤がみられる。

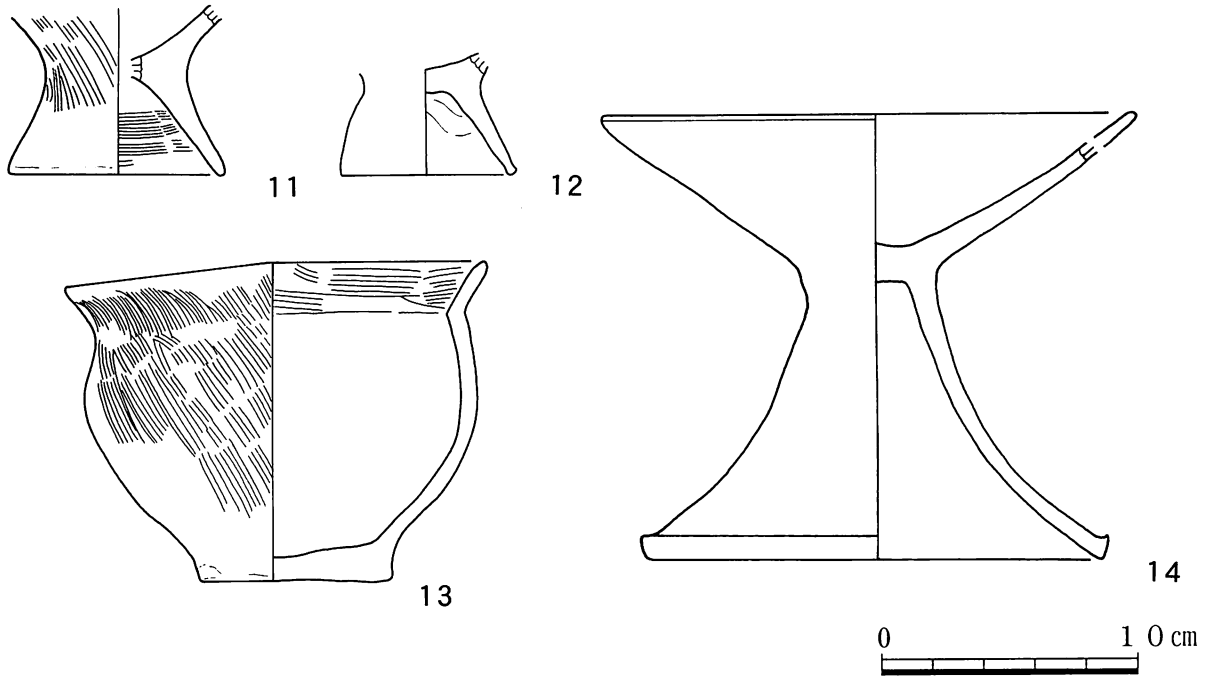
遺物は量的にそれほど多くなく、またそれらの多くが細片であった。このため図化できたものは少なく、棒状浮文をもつ壺（第11図１)、単純口縁甕（同２・３)、台付甕（同４)、高杯（同９)、それにボタン状浮文とより糸文をもった壺（同５～７）などの土器と、砥石（同11)、土製紡錘車（同10）などである。これらから弥


焼土
1号墓
0
2 m
231.300
257.700
1. 赤褐色土　焼土・炭化物を含む。
2. 茶褐色土　茶色粒子を含む。炭化物・焼土粒子を多量に含む。
0
1m

第3図　1号住居跡



第4図　1号住居跡出土土器（1）



第５図　１号住居跡出土土器（２）

生時代後期から末期の時期が考えられる。

４号住居跡

Ｇ９・10、Ｈ９・10グリッドで２・５号住居跡と重複して確認され、また、４号住居跡の遺物出土状況等からすれば溝の方が古いと考えられる溝とも重複している。そして２・５号住居跡と同様に２号円形低墳墓の台上部にある。新旧関係は２号住居跡で述べたとおりである。

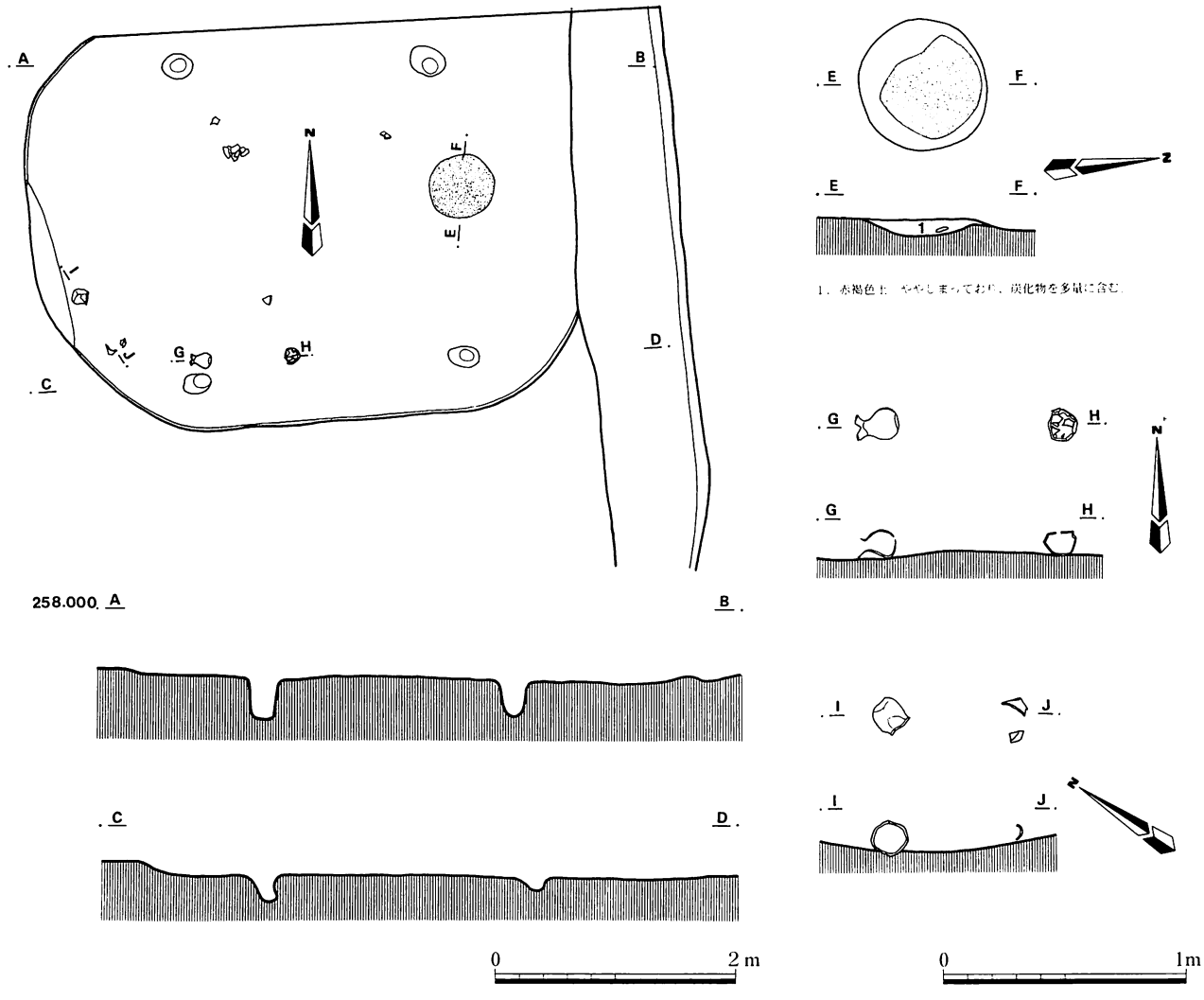
本住居跡は北側と東側とにおいて、残存する壁の一部が確認された。なお南側と西側とにおいては、壁を検出することはできなかったが、周溝の存在が確認された。これらから本住居跡の平面形態は楕円形を呈するもので、長軸4.1ｍ、短軸2.75ｍほどの大きさである。床は良好な状況で確認され、堅く叩き締められている。ほぼ平らであるが、若干南から北に向かって低くなっている。周溝は南西部で途切れているが、その他では幅10㎝、深さ５～10㎝の規模で確認できた。炉は、住居跡の中央やや東寄りに造られており、床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ５㎝ほどの焼土を確認することができた。なお、枕石の設備は確認されなかった。柱穴は、６本主柱穴と考えられるものであるが、南西隅のものを確認することができなかった。また柱穴の位置に複数の穴がみられるが、支柱穴ないし立て直しの柱穴と考えられる。

遺物は、住居跡の中央西側にある溝付近で土器片が比較的まとまって出土した。

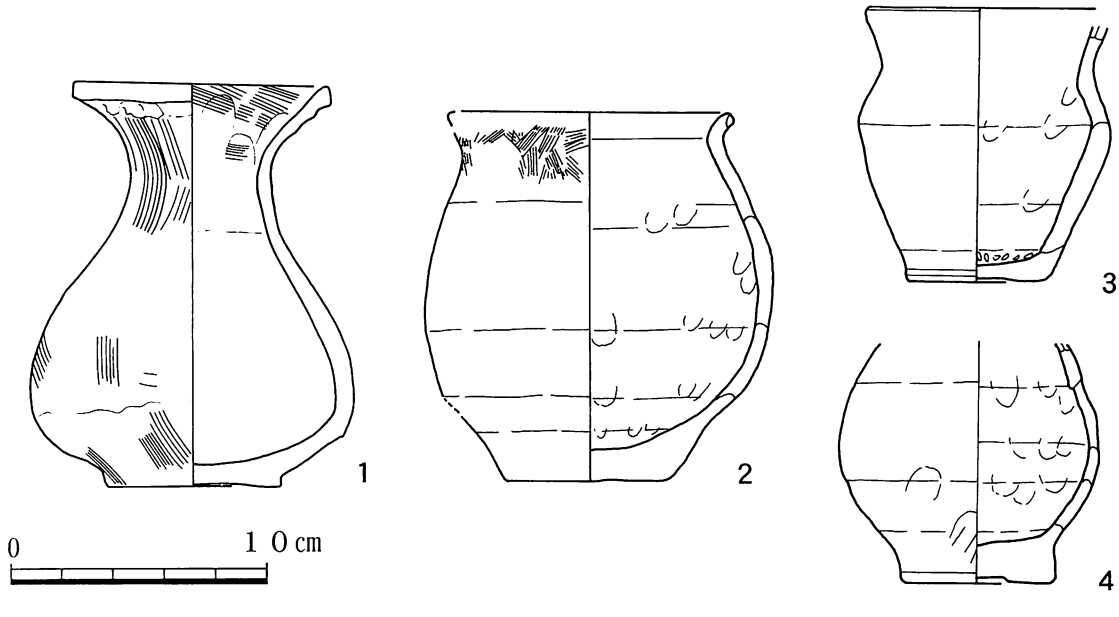
５号住居跡

Ｇ９・10、Ｈ９・10号グリッドで２・４号住居跡と重複して確認され、また２号円形周溝墓の台上部にある。新旧関係は２号住居跡で述べたとおりである。

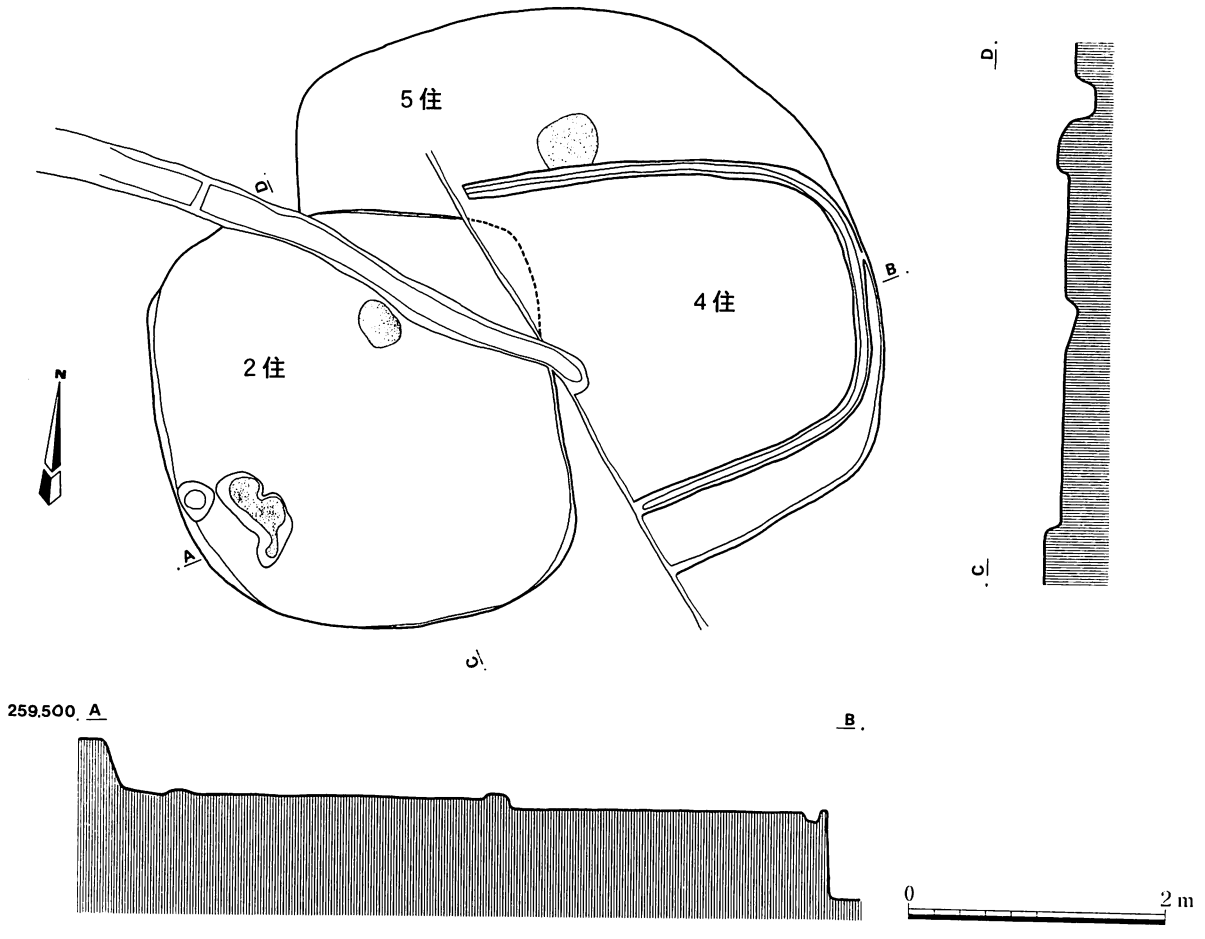
本住居跡は南側を中心にして、残存する壁の一部が確認された。北側では輪郭が確認できた程度で、また西側では周溝が確認されたに過ぎない。これらを基にすると本住居跡の平面形態は円形を呈するもので、直径4.55ｍほどの大きさであることが確認できた。床は、南側と西側において一部確認できた程度であり、北側では炉の付近で若干確認されたに過ぎない。床はそれほど堅く叩き締められたものではないが、ほぼ平らに造られている。周溝は西側で確認されたのみであるが、幅５㎝、深さ７㎝前後のものである。柱穴は確認できなかった。炉は住居跡の中央やや北寄りの位置に造られている。床面を掘り窪めた地焼炉で、厚さ５㎝ほどの焼土を確認することができた。



第６図　３号住居跡



第７図　３号住居跡出土遺物



第8図　2・4・5号住居跡（1）

遺物は、多少確認できた。図化できたものは壺（第11図8）である。これらから弥生時代後期から末期の時期が考えられる。

6号住居跡

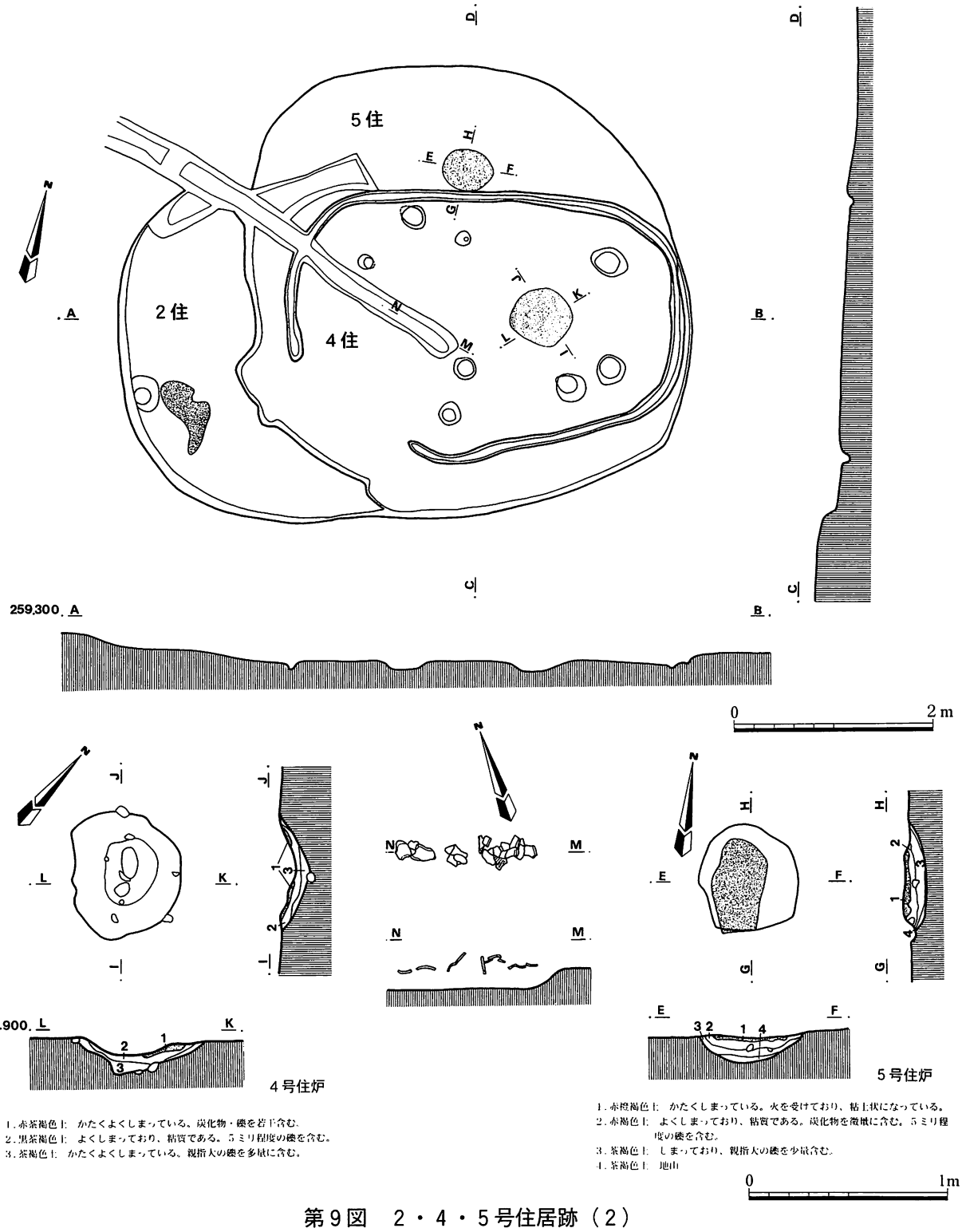
G10・11、H10・11グリッドで単独で確認され、2号円形低墳墓の台上部に造られている。これらの新旧関係は、本住居跡が先行するものである。しかし住居跡の造られた基盤が小礫の混入した土層のため検出状況が悪く、かつ北側部分については削平が著しく確認できなかった。

平面形態は円形ないし楕円形を呈するもので、直径5.5m前後の大きさが考えられる。壁は南側を中心に確認され、10cm前後残っていた。床は比較的堅く叩き締められ、ほぼ平らであるが、南から北に向かって低くなっている。柱穴は、壁回りに確認されたが、壁回りに柱を立てたものか、主柱穴の間に支柱穴ないし副主柱穴を配したのか定かでないが、大きめなP3及びP5を主柱穴みれば、後者の可能性が強いものと考える。周溝はみられない。炉は、住居跡の中央北東寄りにみられる焼土と考えられる。しかし表面が焼土化している程度のものであり、あるいは別な位置にあったことも考えねばならない。

遺物は量的には少なく、また図化できたものも少ない。図化できたものには口縁部内面に櫛歯文、頸部により糸文を施した折り返し口縁壺（第11図1）、口縁部の外面に刻目を施した折り返し口縁壺（同2～3）、それにミニチュアの土器（同4）などがある。これらから弥生時代後期ころの時期が考えられる。

7号住居跡

H10・11、I10・11グリッドで、単独のような形で確認された。すなわち、北側部分で6号住居跡と重複するものと考えられるが、北側部分の平面形態をとらえることができなかったことによる。また、住居跡の造ら



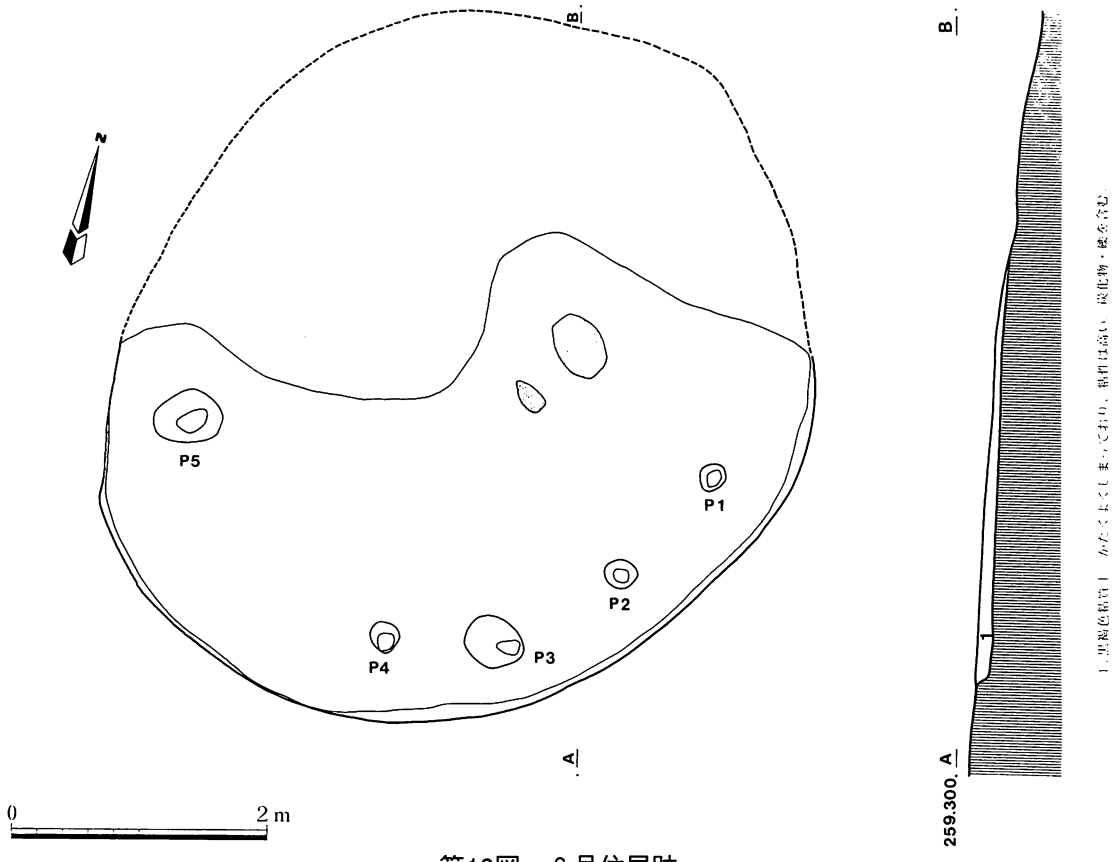
第9図　2・4・5号住居跡（2）

れた基盤が6号住居跡と同じような礫の混入した土層のため、明確な輪郭を確認できなかった。さらに遺物も小破片が僅かに確認されたに過ぎず、炉と考えられる焼土の検出もなく、住居跡とするには躊躇するものである。なお、本住居跡は2号円形低墳墓の台上部につくられており、新旧関係は本住居跡が先行する。

本住居跡は確認された輪郭から、平面形態は矩形ないし不整円形を呈するものと考えられる。時期不明。

8号住居跡

Ｉ９・10グリッドで単独で確認され、2号円形低墳墓の台上部に造られている。新旧関係は本住居跡が先行する。



第10図　6号住居跡

平面形態は片方がやや膨らんだ楕円形を呈し、長軸4.6m、短軸3.8mほどの大きさである。壁は南壁の残りが最も良く、15cm程の残りであった。そのほかは僅かに残っている程度である。床は比較的堅く叩き締められており、ほぼ平らに造られているが、南から北に向かって少しずつ低くなっている。周溝はみられなかった。柱穴は基本的には6本主柱穴と考えられるが、この他近くに幾つかの柱穴と考えられるものがみられる。恐らく支柱穴などと考えられるものである。炉は、住居跡の中心からやや東側に造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ5cmほどの焼土が確認できた。

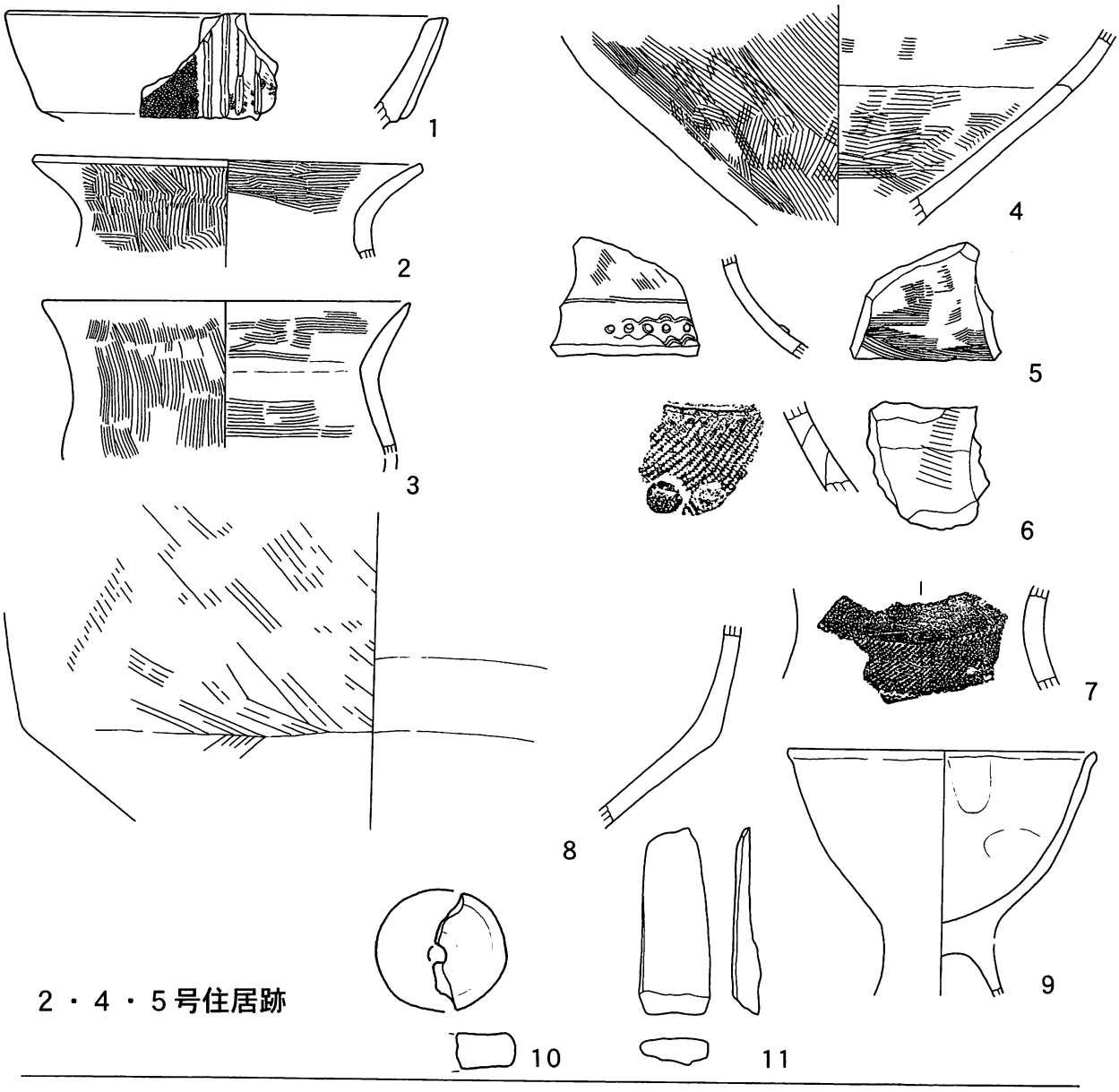
遺物は、細片が僅かに出土したに過ぎず、図化できたものはない。住居跡形態からは弥生時代後期前後の時期が推定される。

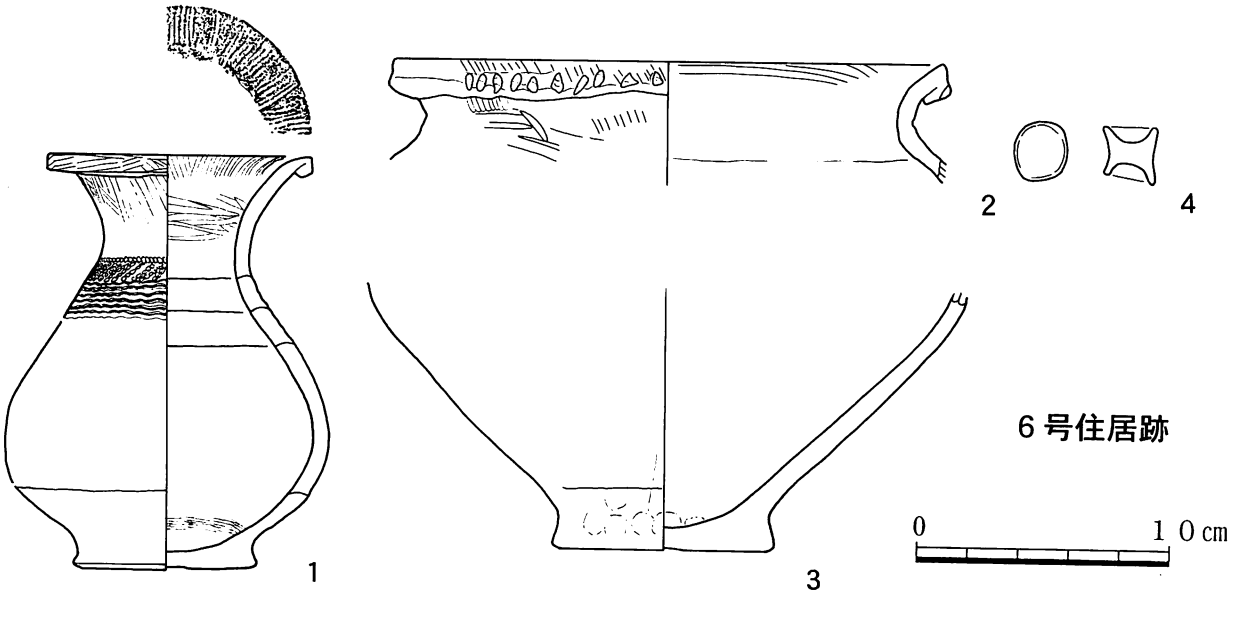
9号住居跡

E5・6グリッドで、10号住居跡と重複して確認された。また、1号円形低墳墓の台上部にある。この地域にある住居跡の検出状況は非常に手間取ったものが多く、その中で本住居跡は周溝の存在から、輪郭が明確に確認されたものである。新旧関係は、いずれの住居跡も1号円形低墳墓よりも古いが、10号住居跡との関係は明確にならない。

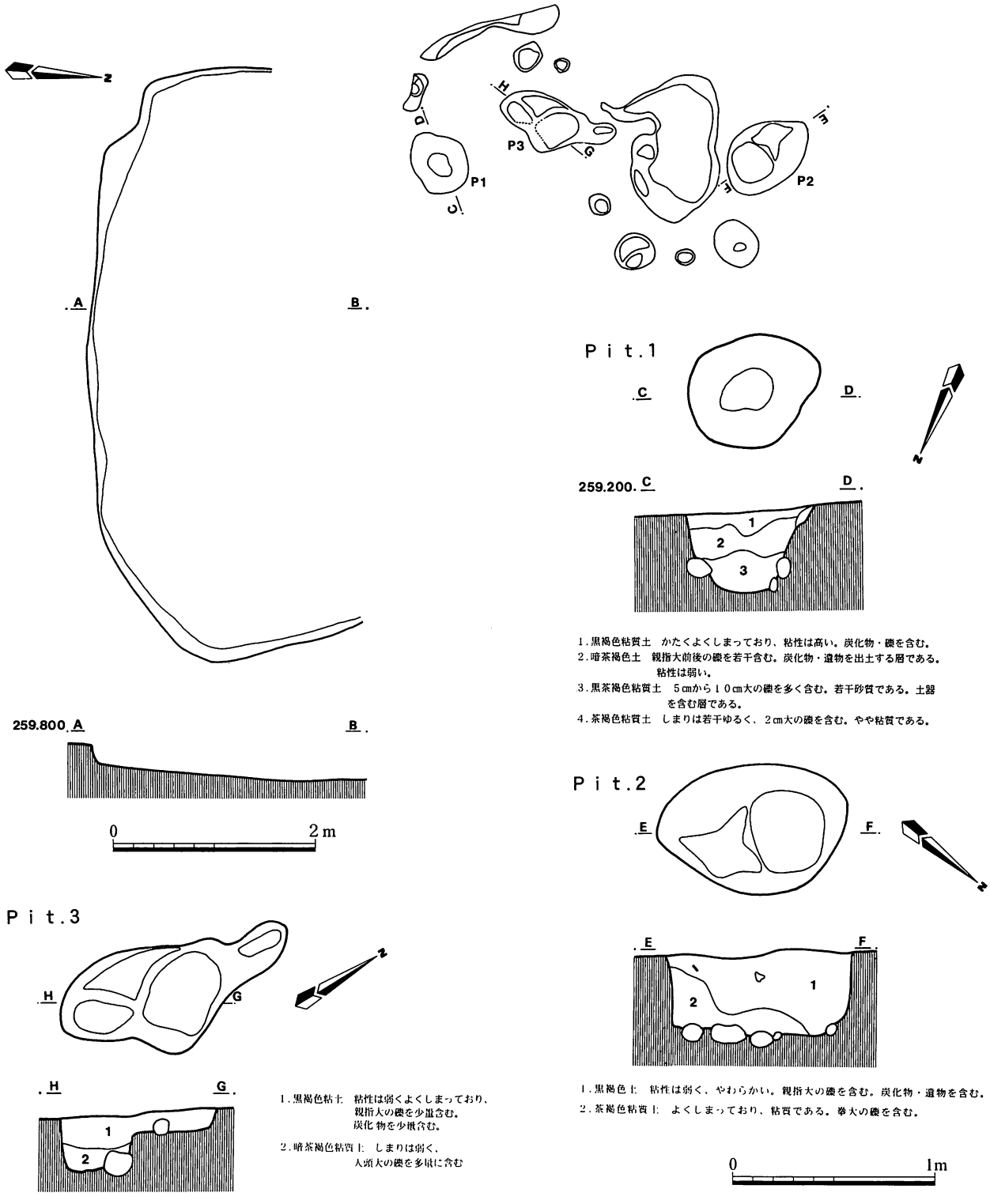
平面形態は、ほぼ南北に主軸をもつ楕円形を呈するもので、規模は長軸4.15m、短軸3.55mほどの大きさである。周溝は幅15cm前後、深さ10cm前後のもので、削平された北側を除き明確に確認でき、残存状況からは全周するものと思われる。床は比較的堅くたたき締められ、ほぼ平らな造りであるが、南から北に向かって多少低くまっている。柱穴は4本主柱穴と考えられるが、北側の列のものを確認できなかった。確認できた柱穴は、直径25cm前後、深さ20cm前後である。炉は住居跡の中央よりやや北側に造られている。床を掘り窪めた地焼炉で、厚さ5cm程の焼土を確認できた。

遺物は細片のものが多く、図化できたものは有段口縁壺（第17図2）、単純口縁甕（同1）、この他に口縁部に指頭痕（同3）や、胴部により糸文（同4）のみられる破片などがある。住居跡形態や遺物から、弥生時代





第11図　2・4・5号、6号住居跡出土遺物



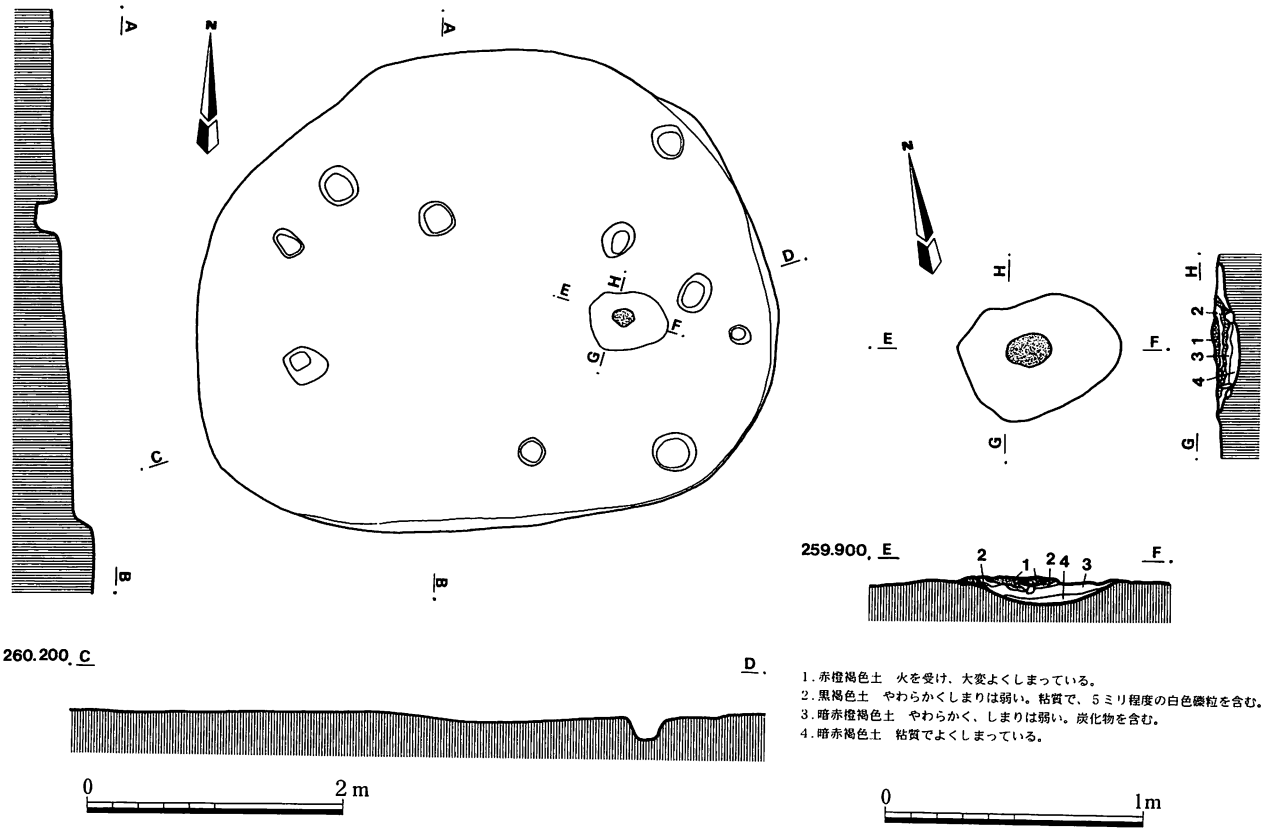
第12図　7号住居跡

末ころの時期が考えられる。

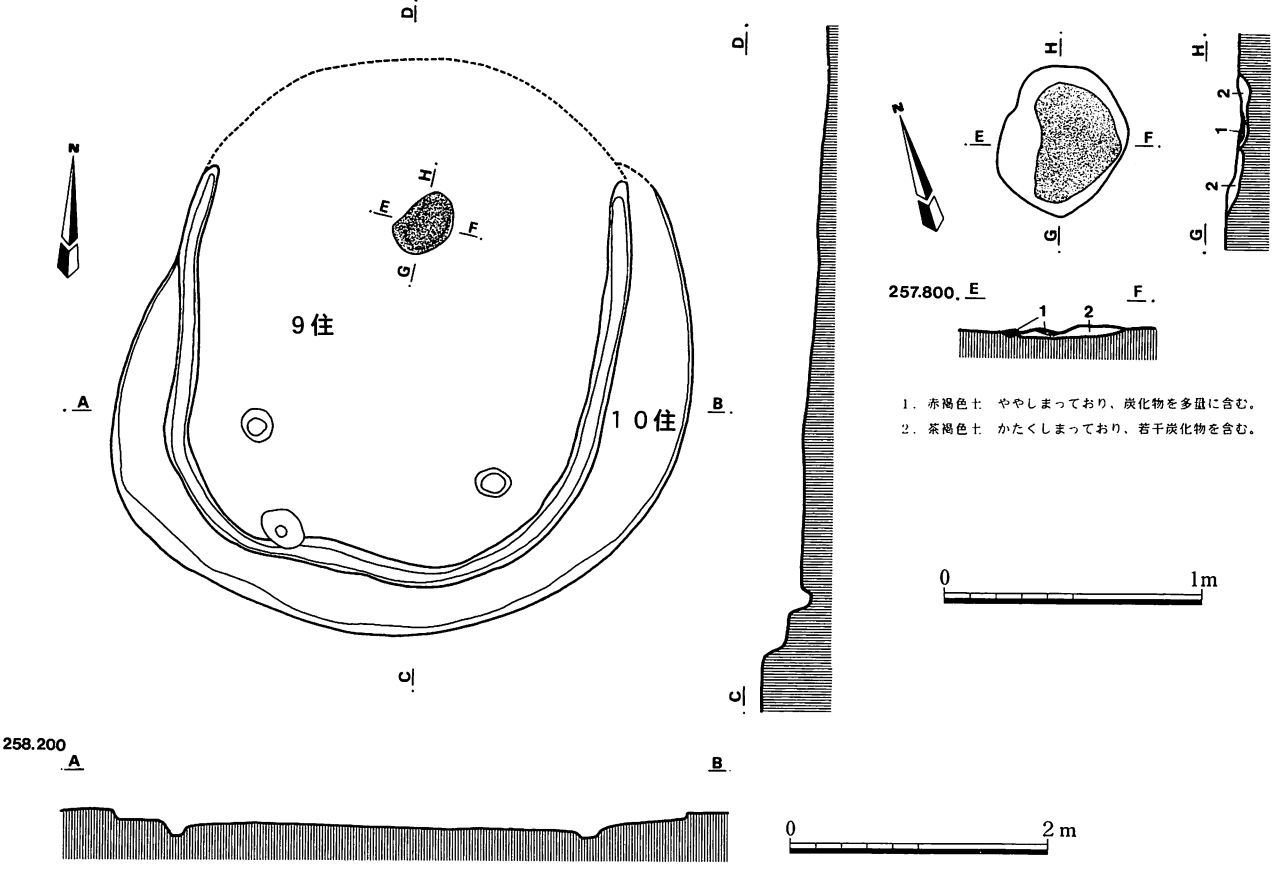
10号住居跡

Ｅ５・６、Ｆ５・６グリッドで、９号住居跡と重複して確認された。また、１号円形低墳墓の台上部にある。新旧関係は１号円形低墳墓よりも古いが、９号住居跡との関係は明確でない。

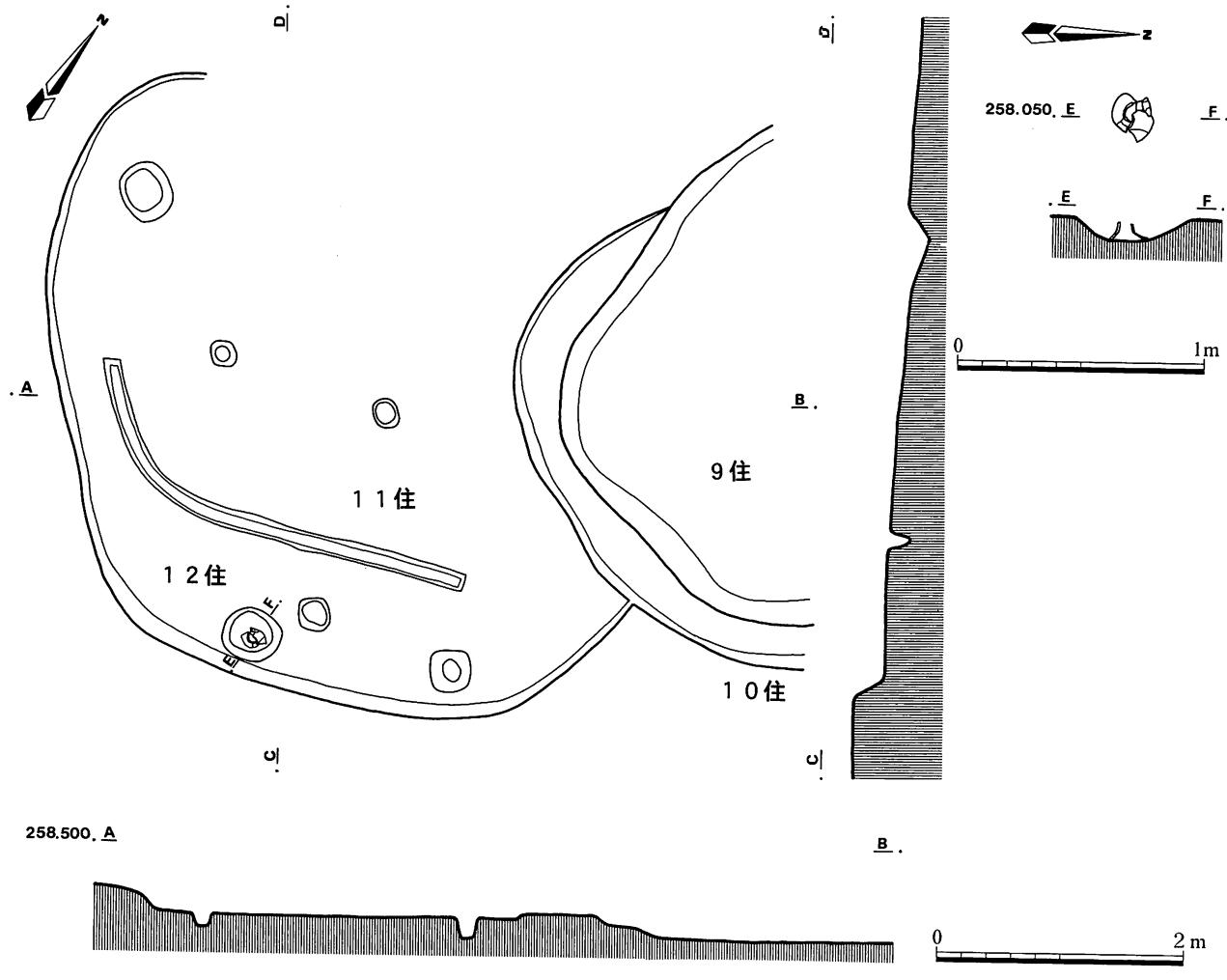
住居跡の南側の壁と床のごく一部が確認されたに過ぎない。また検出状況が難航したものであり、明確に住居跡としてよいものかやや疑問も残る。平面形態は円形を呈するもので、直径4.6m程の大きさである。



第13図　8号住居跡



第14図　9・10号住居跡



第15図　11・12号住居跡

遺物は土器の細片が多少確認された程度で、図化できたものはない。住居跡形態から弥生時代末ころの時期のものであろう。

11号住居跡

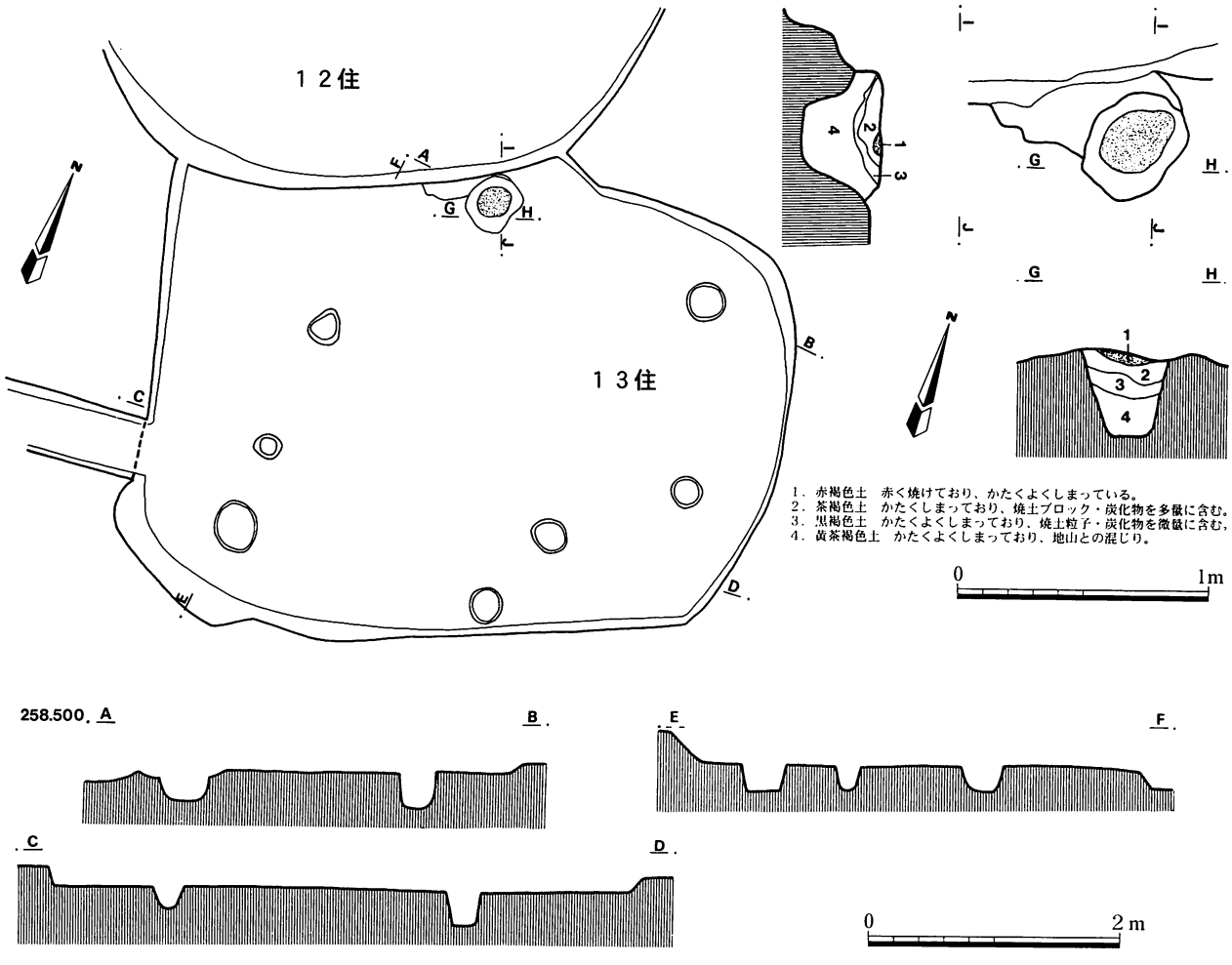
Ｅ５・６、Ｆ５・６グリッドで、９・10・12・13号住居跡と重複して確認された。また、１号円形低墳墓の台上部にある。11号住居跡を初めとするいずれの住居跡も、１号円形低墳墓より古いが、住居跡間の新旧関係については、明確に把握できなかった。特に12号住居跡との関係は、12号住居跡の南西から南におけるあたりで確認された溝を周溝と考えたことから、複数の住居跡の存在を想定したものである。しかし、溝はその先の確認ができず、従って厳密には独立した住居跡と考えるのか否か疑問の残るものであり、あるいは12号住居跡に含まれるものとみるのが妥当かと考えられる。

床は比較的堅く叩き締められ、ほぼ平らな造りである。炉、柱穴などについては、明確にできなかった。

遺物は頸部の長い単純口縁壺（第17図１・４・５）と短い単純口縁壺（同２）、口縁部に刻目、その下に櫛の廉条文をもつ破片（同３）、さらに楕円形の容器型土器（同７）などがある。遺物からは弥生時代末ころの時期が考えられる。

12号住居跡

Ｅ５・６、Ｆ５・６グリッドに９・10・12・13号住居跡と重複して確認された。また１号円形低墳墓の台上部にある。新旧関係は、11号住居跡で述べたとおりである。



第16図　13号住居跡

平面形態は、不正円形を呈するもので、直径5.9m程の大きさである。10cm前後の壁と、性格不明な小穴が幾つか確認されたに過ぎない。なお、南壁際の土器の口縁を伴う小穴が確認された。

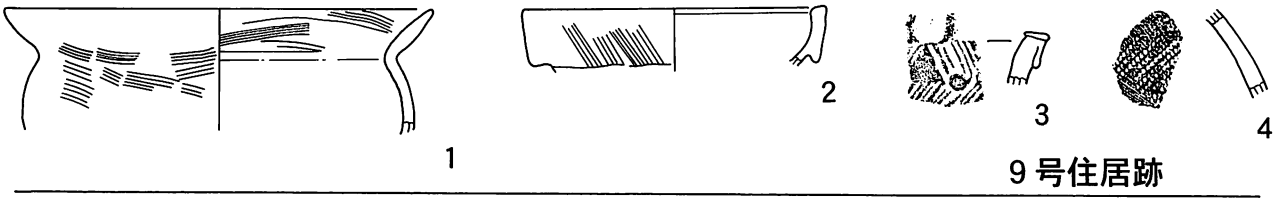
遺物は小片が多く、図化できるものは、ほとんど存在しなかった。遺物からは弥生時代末の時期が考えられる。

13号住居跡

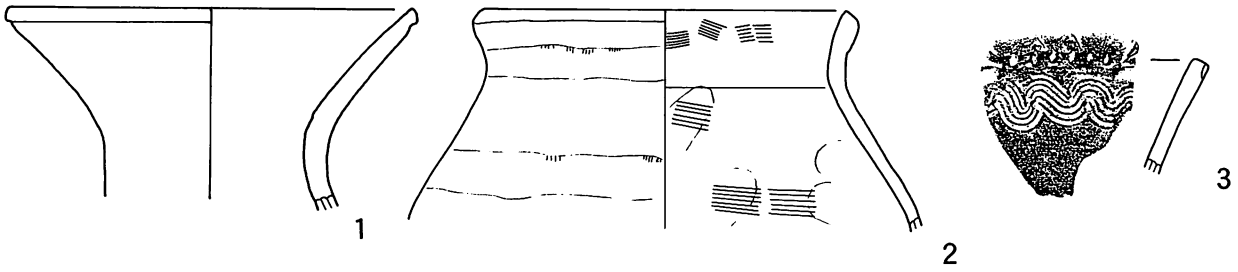
Ｆ５・６、Ｇ５・６グリッドで、10～12号住居跡と重複して確認された。また、１号円形低墳墓の台上部にある。１号円形低墳墓との関係は12号住居跡で述べた通りであるが、他の住居跡との新旧関係は明確に把握できなかった。ただし住居跡の存在については、他の住居跡に比べ信憑性の高いものと考えている。

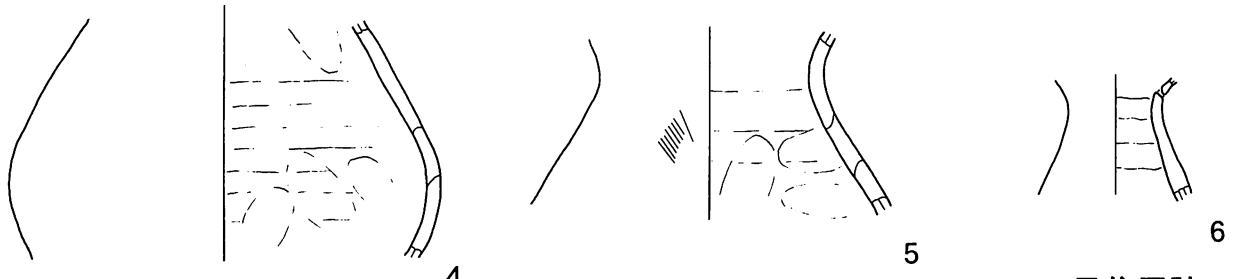
平面形態は、ほぼ東西に主軸をもつおおよそ楕円形を呈するもので、長軸5.3m、短軸3.8mほどの大きさである。壁は10cm前後の残りが確認されている。床は比較的堅く叩き締められ、ほぼ平らに造られている。周溝はみられない。北壁の壁際に厚さ５cm前後の焼土を確認できるが、炉の位置としては壁際に寄り過ぎている嫌いがあり断定はできない。住居跡内から幾つかの小穴を幾つか確認できたが、このうちの幾つかが柱穴と考えられるものである。

遺物はそれほど多くなく、図化できたものは口縁部の内面により糸文、口縁部に刻目、口縁部外面にボタン状浮文とより糸文をもった壺、甕類（第17図１～３）、壺の底部（同４）、土製紡錘車（同５）などにすぎない。これらから弥生時代末ころの時期が考えられる。

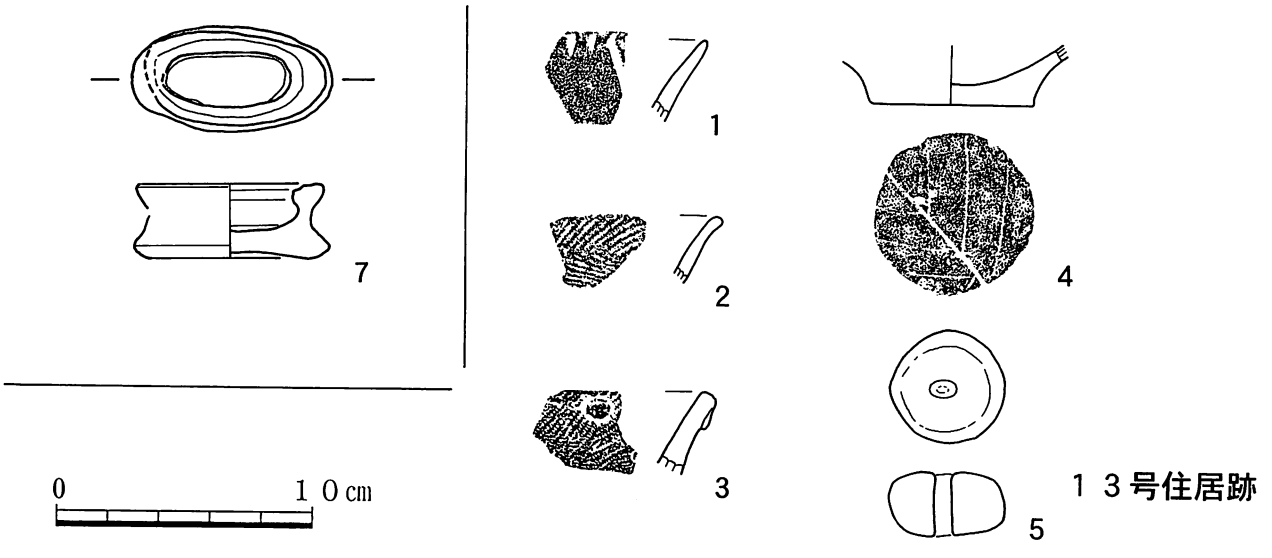


9号住居跡



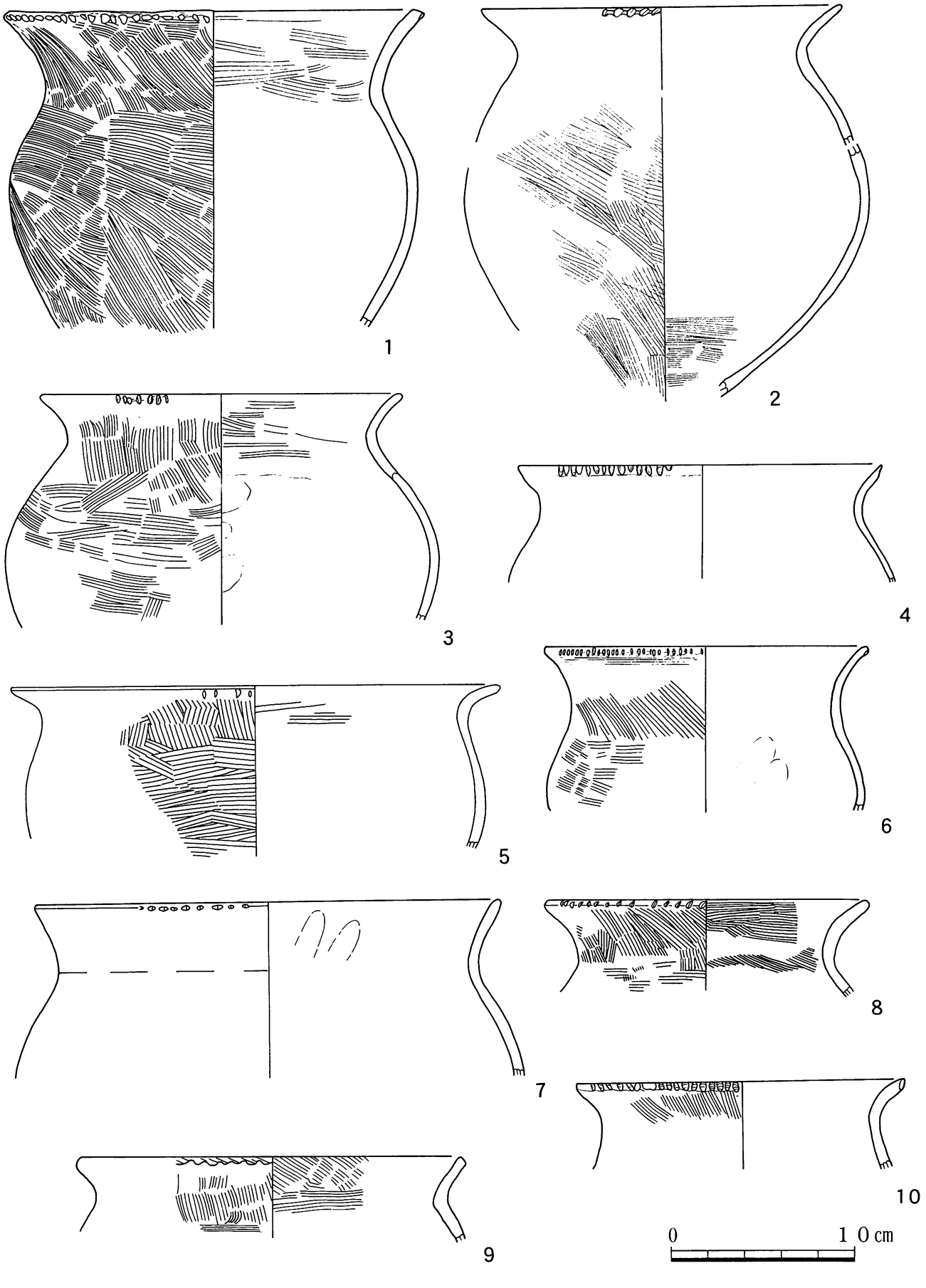


11号住居跡

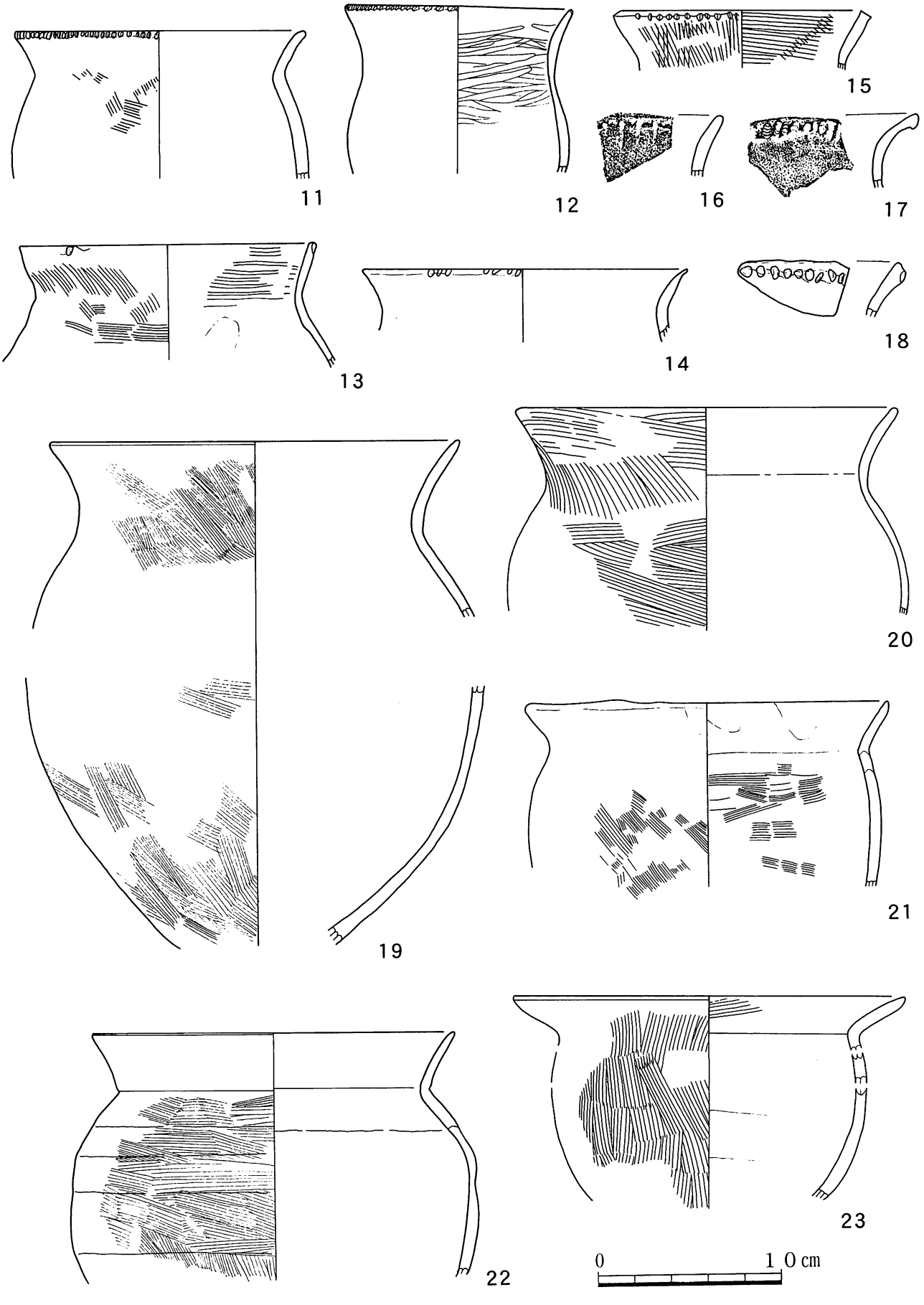


13号住居跡

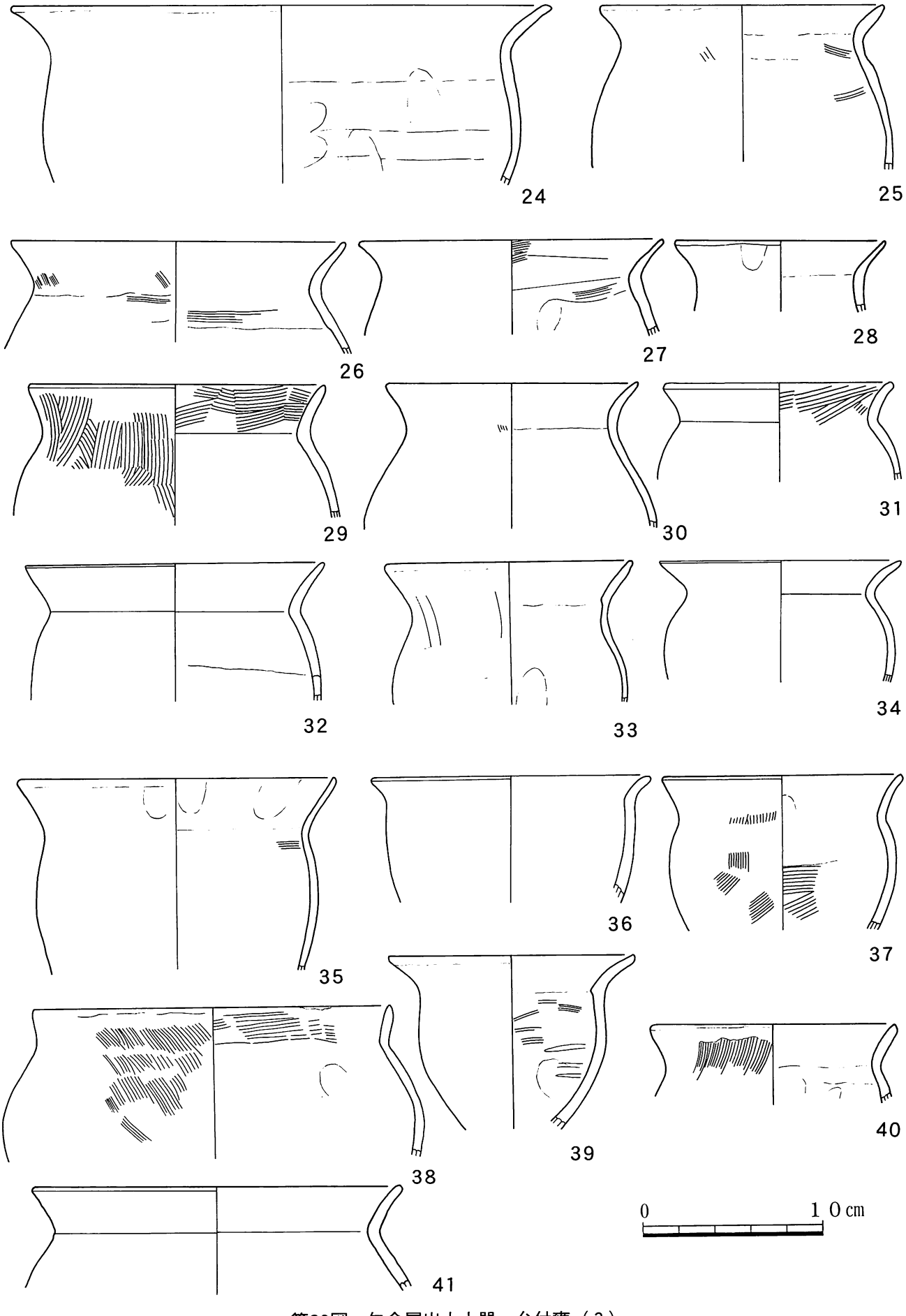
第17図　9・11・13号住居跡出土遺物



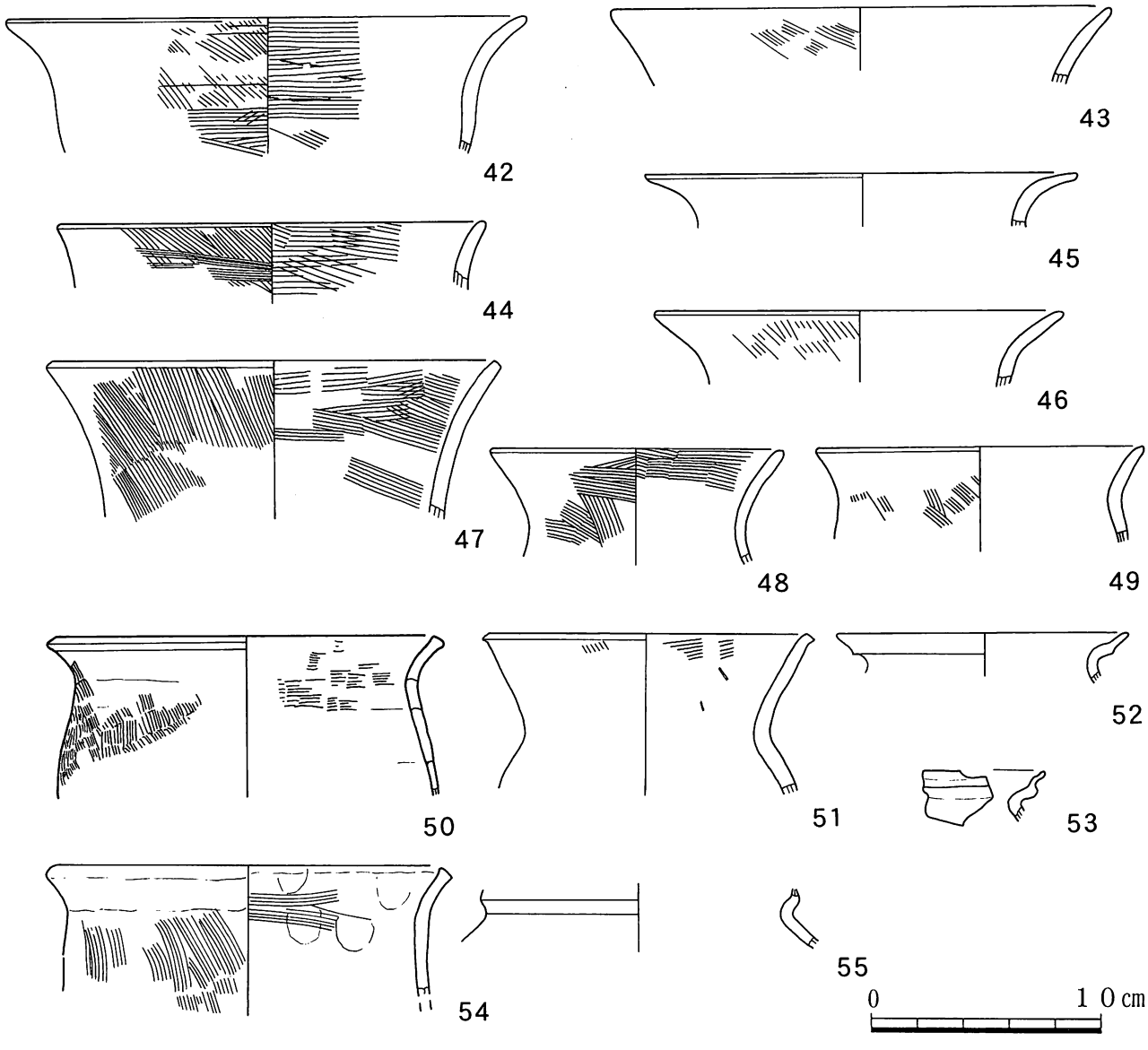
第18図　包含層出土土器　台付甕（1）



第19図　包含層出土土器　台付甕（2）



第20図　包含層出土土器　台付甕（3）



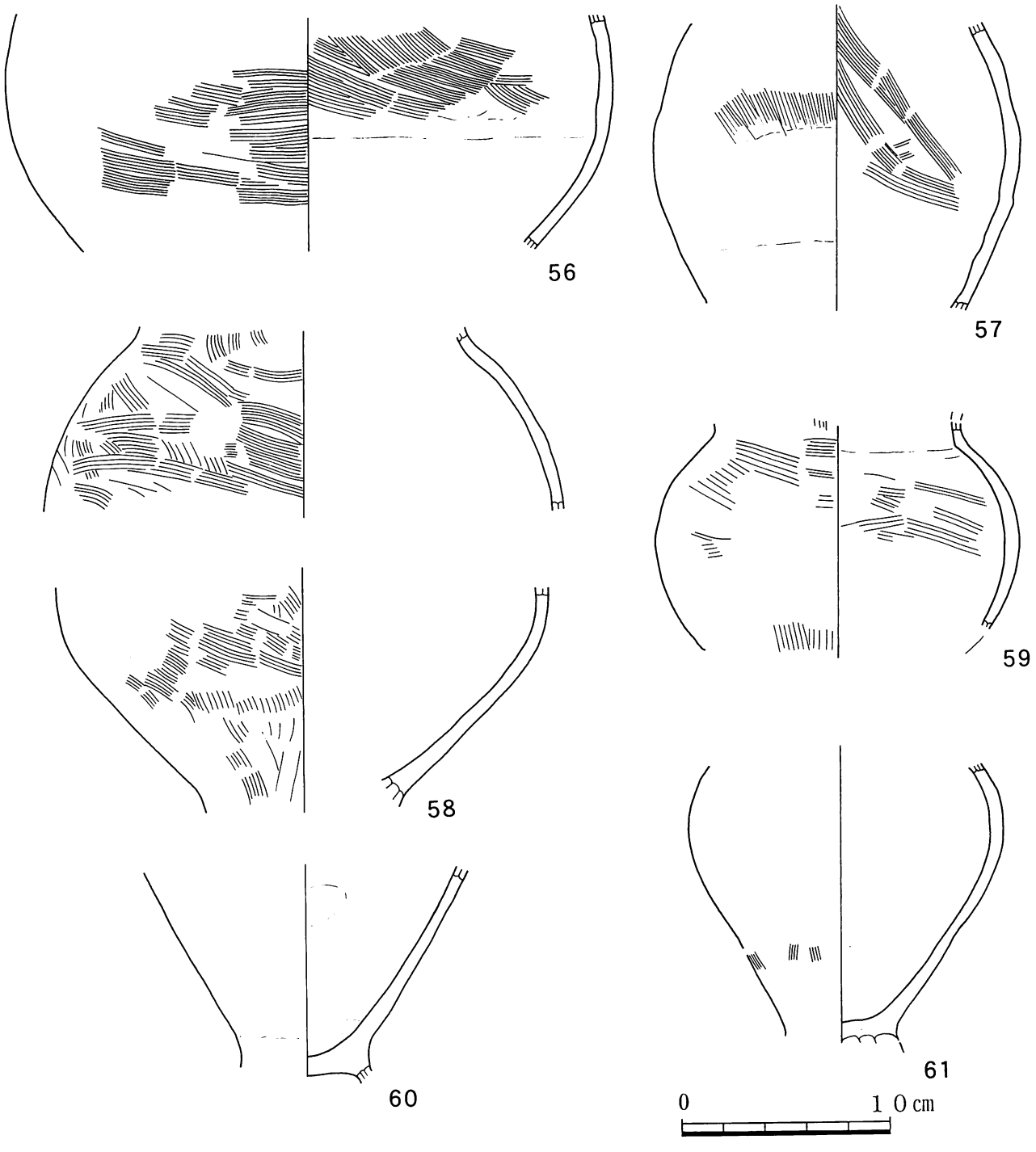
第21図　包含層出土土器　台付甕（4）

包含層出土遺物

今回調査を行った地域は、先にも述べたように弥生時代後期から終末期にかけての集落跡に、古墳時代中期になって円形低墳墓が造られたものであり、円形低墳墓と住居跡の周辺に至る広い範囲が遺物包含層になっている。しかし遺構の造られている基盤層は、遺構の確認が難しい状況の箇所が多く見受けられた。これは住居跡を含めた遺物包含層が比較的浅い位置にあったものが多かったことや、円形低墳墓造営時に弥生時代の遺構を多く削平したこと、後世の開墾によって本来東山側から笛吹川側へ傾斜していた地形を平らにしようとしたことなどもその一因と考えられる。

これら多数の包含層出土遺物は、そのほとんどが弥生時代後期及び一部は古墳時代前期に位置付けられるものである。この時期、東日本においては活発に土器が移動する。甲府盆地においては、まだまだ他地域から流入した土器は数少ないものの、近年確実にその資料数は増加している。今回包含層から出土した遺物は、遺構からの出土ではないため、その性格はいまひとつ不明瞭であるものの、このような甲府盆地以外の地域に出自を持つものが少なからず見られ、大変興味深いものである。以下に詳細を記述することとする。

甕　第18図1～第23図86は台付甕もしくは平底甕である。このうち1～18は口縁部に刻目をもつもの、19～51は単純口縁部をもつもの、52は有段のもの、そして53・55はS字状口縁台付甕の口縁部である。いずれも粗くハケにより調整されているが、表面が著しく摩耗しハケを観察できないものも多々見られる。単純口縁部を



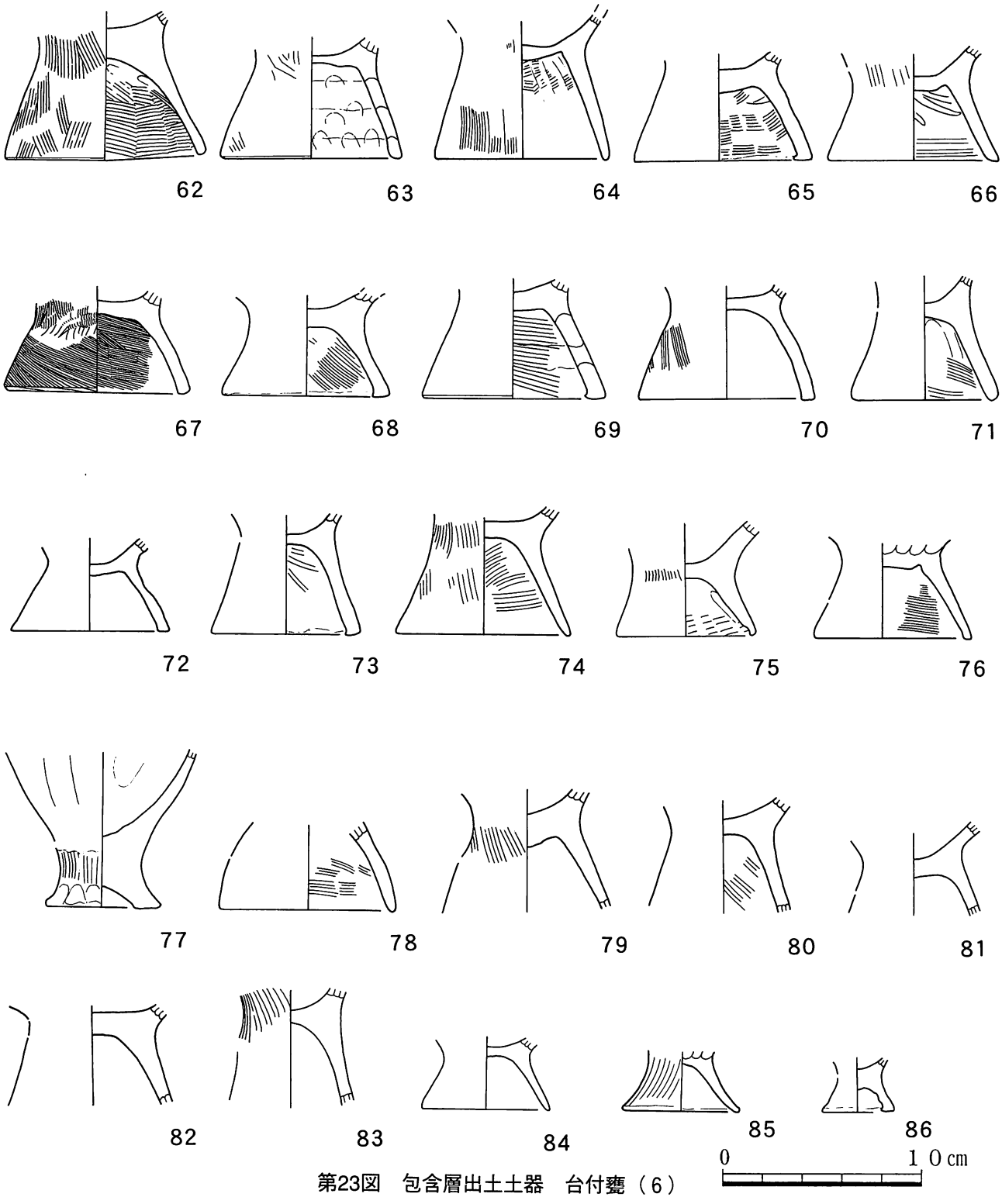
第22図　包含層出土土器　台付甕（5）

もつものは数の上では最も比率が高く、大きく開くものや小さいもの、最大径が口縁部にあるものから、胴部にあるものなどバリエーションに富んでおり、さらに細分できるものであると思われる。S字状口縁を呈するものは、小片であるが、これら弥生時代終末期の資料に後続するものではなく、形態からS字状口縁台付甕の中でもやや新しいものであると思われる。

第22図56～61は胴部破片である。最大径が胴中央部にあるものや上部にあるものなど、さまざまであるが、いずれも粗いハケにより調整されていて、器壁も厚い。在地色の色濃いものである。

第23図62～86は台付甕台部である。胴部同様器壁が厚く、形態も様々である。おそらく在地で製作されたものであると思われる。

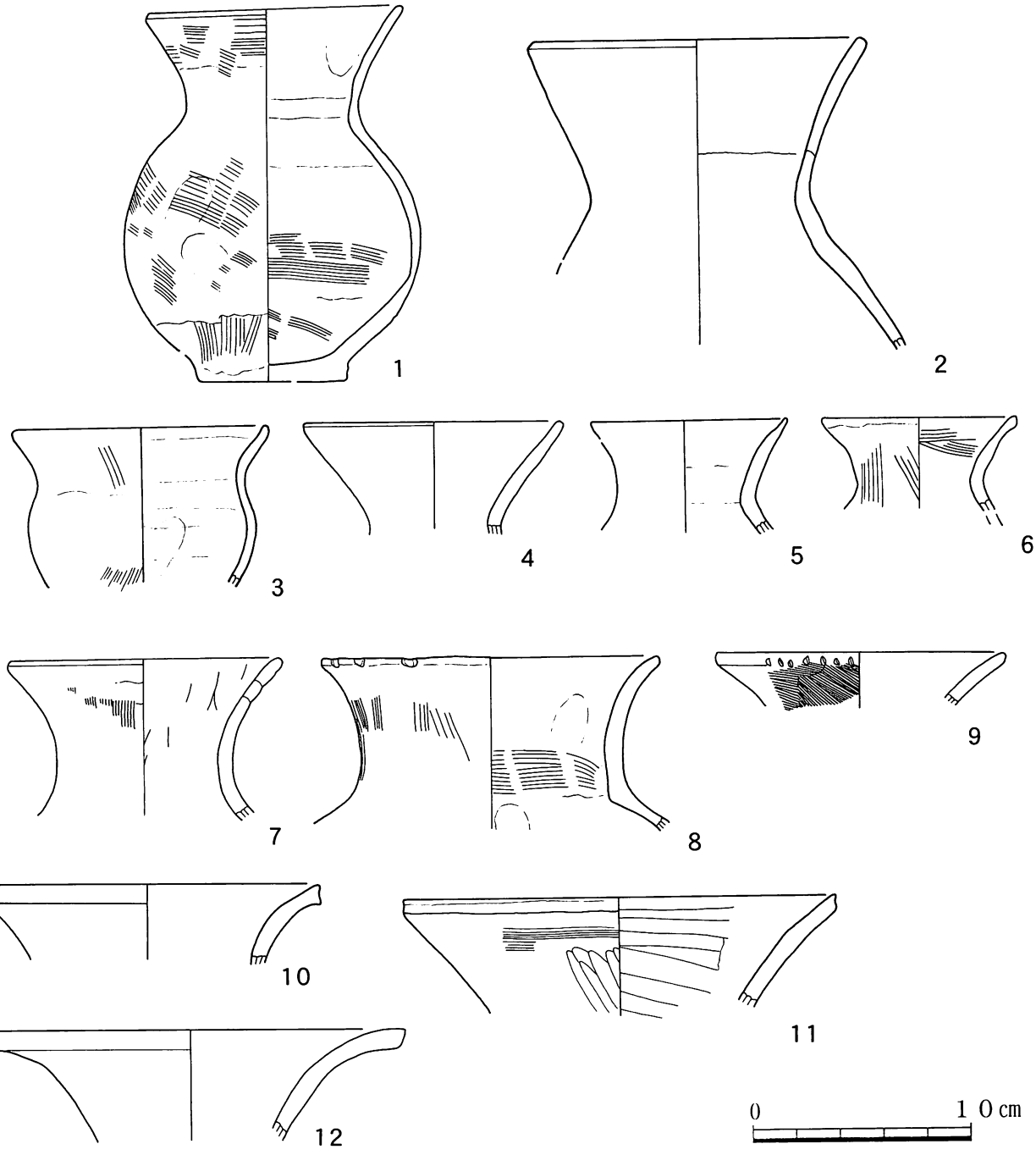
壺　壺は包含層出土遺物のなかでは、もっともバリエーションをもった土器である。これらはその特徴から



第23図　包含層出土土器　台付甕（6）

若干の細分が可能であり、存在時期も若干広い幅であることを知ることができる。

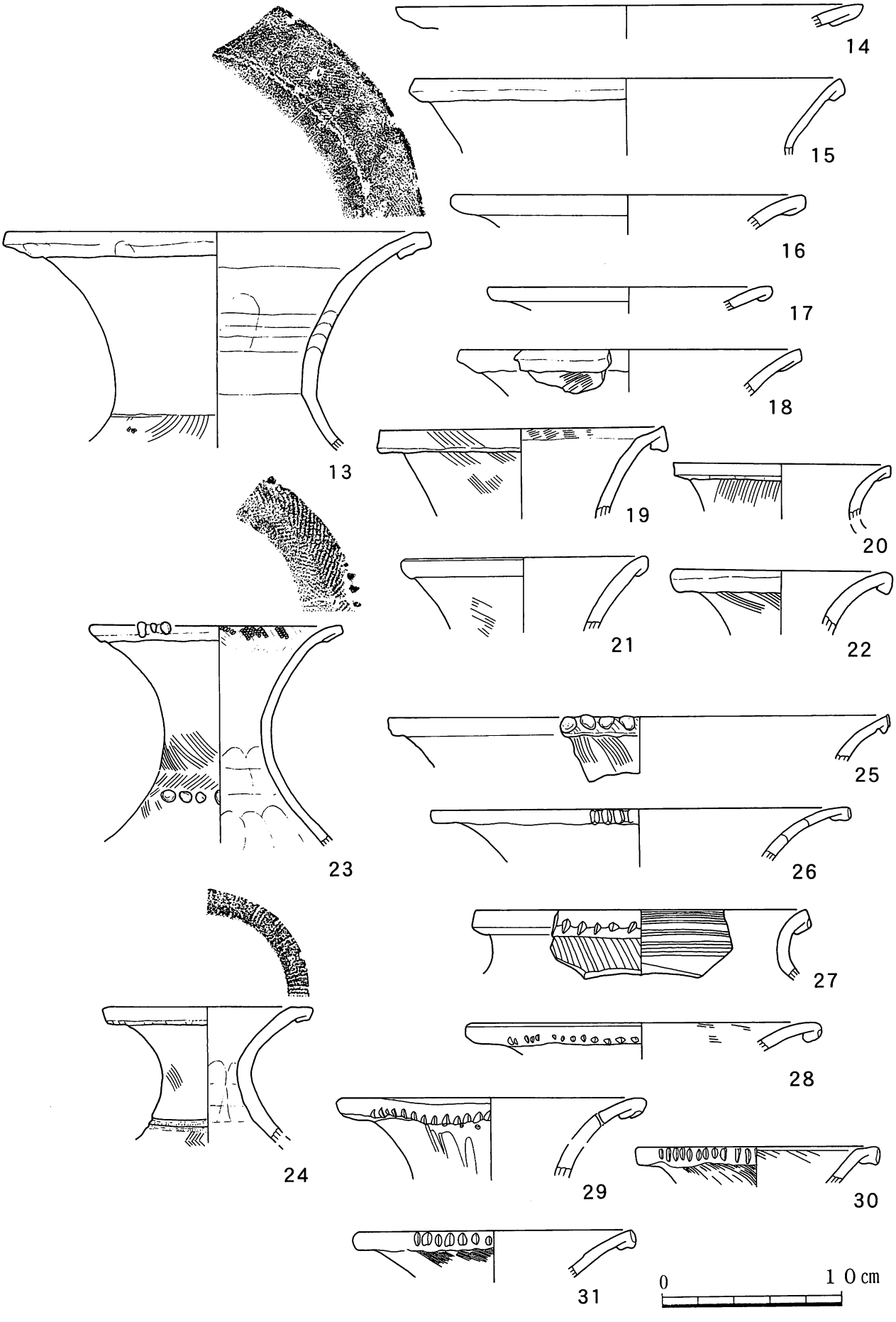
第24図1～12は単純口縁部をもつものである。このうち1はG10グリッドから出土したものであり、第2号住居跡に帰属する遺物である可能性を否定できない。3は鉢にも近いものである。9及び10は口縁部に刻目を観察できる。台付甕にはポピュラーであるが、壺に関してはそれほど資料数は多いものではない。13～50は口縁部を折り返すものである。このうち13～22は折り返しのみの口縁部、23～44は折り返しにさらに刻目を施すものである。13は大型で口縁部内面に細かい縄文が、最も内面に結節縄文が施されることで文様帯を区画する。23・24は首が細く長いタイプで、23は口縁部内側に縄文が、また頸部には羽状に沈線が施され4点で1単位のボタン状貼付文が見られる。24はやはり頸部が細く長く伸びるもので肩部を押し引き竹管文が巡る。その下方



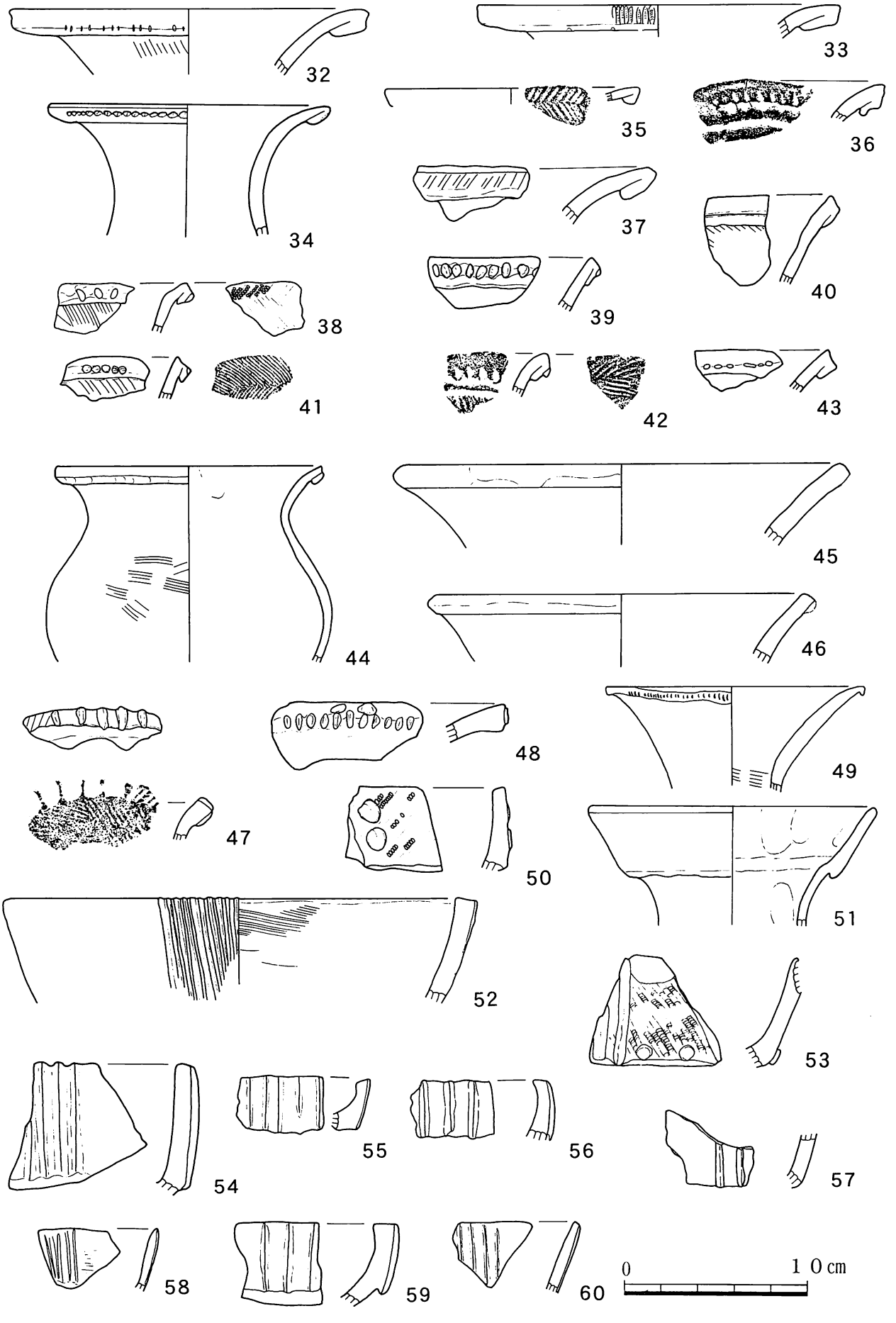
第24図　包含層出土土器　壺（1）

を羽状の摩耗した細かい縄文が巡るものである。両者は第27図と同類に分類できるものであると思われ、甲府盆地外からもたらされたものである。52～60は広い口縁帯に縦列沈線文もしくは棒状浮文を貼付するものである。また地文に縄文を施した上に、ボタン状貼付文を施すもの（53）なども見られる。これらは駿河に出自を求めることのできるものであると考えられる。

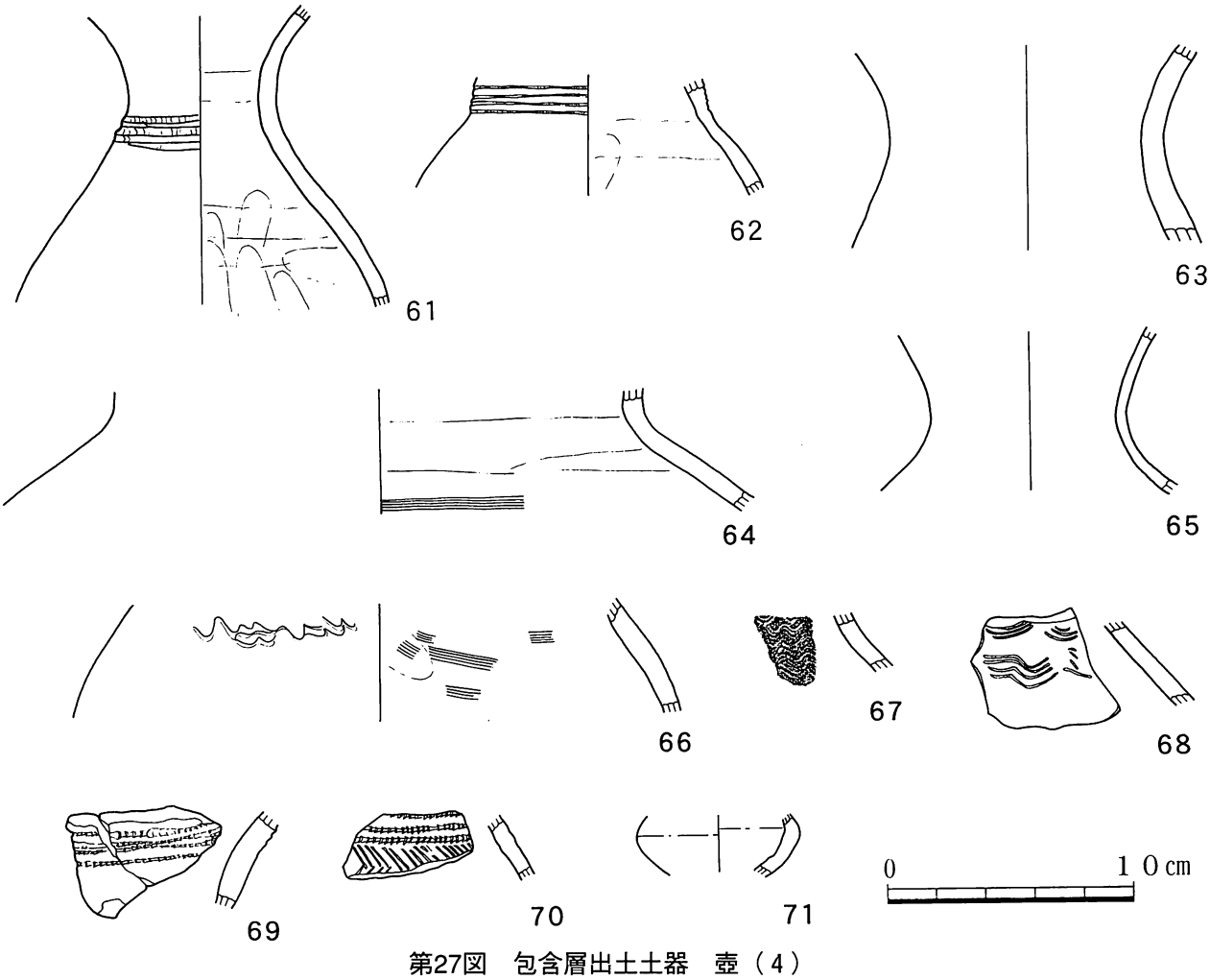
第27図61～第28図101は胴部破片である。このうち第27図61・62・69・70は頸部に細い竹管状の施文具で1周から3周程度押し引きが施されるものである。これらはやや古手に位置付けられるもの出ると思われ、東部東海系に出自をもつものと推測される。また第28図72～101は肩部に縄文をもつものである。縄文の上にボタン状貼付文をもつものも見られる。縄文はいずれも羽状に施されるもので、菊川式に出自を求めることができるものであると考えられる。第29図102～109は底部破片のうち、底部に木葉痕のみられるものである。また第30図110～121は胴部から底部にかけてのものである。いずれも表面は摩耗が著しく調整等の観察できるものはほ



第25図　包含層出土土器　壺（2）



第26図　包含層出土土器　壺（3）



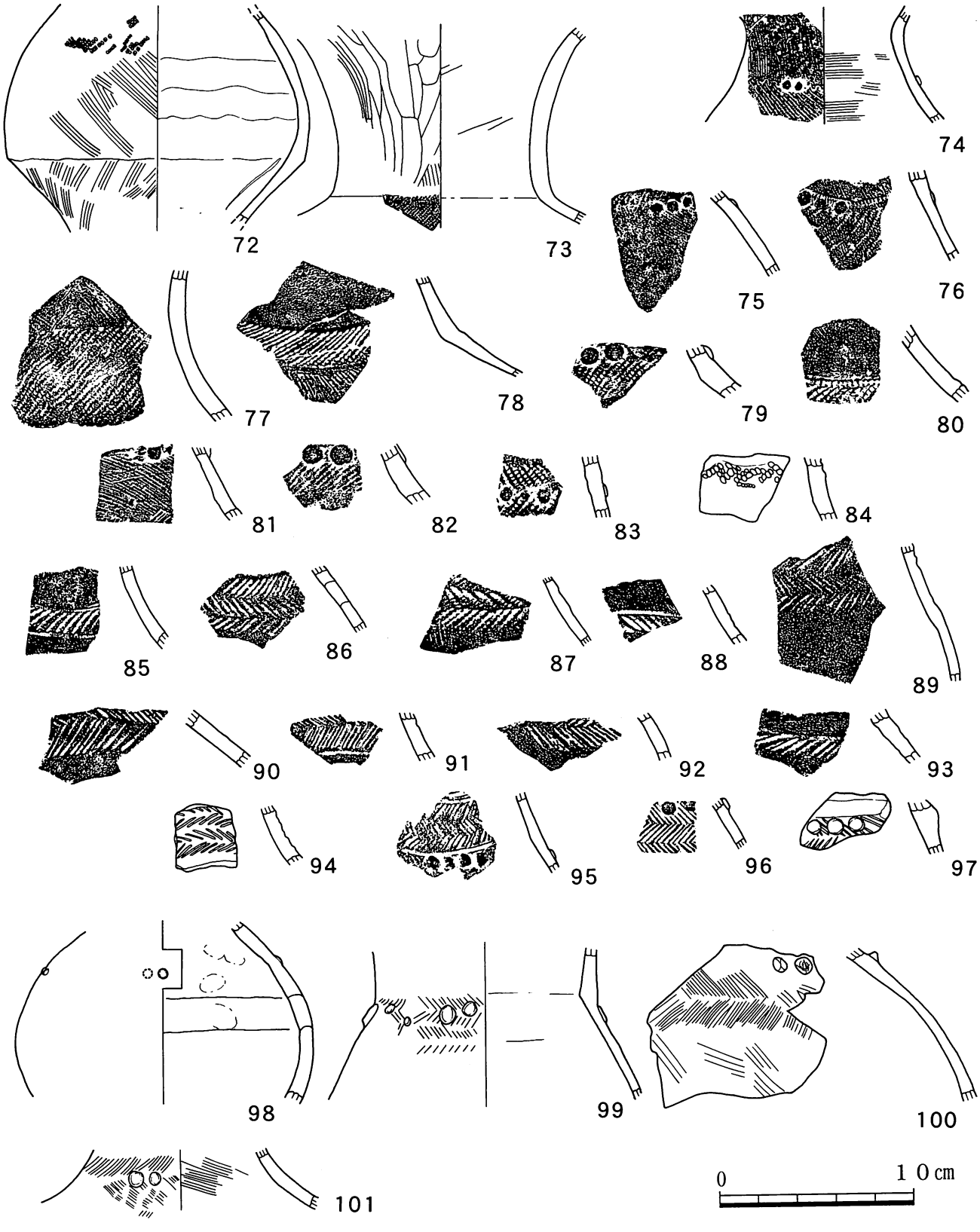
第27図　包含層出土土器　壺（4）

とんどないに等しい。器壁は厚く、そのほとんどは在地で製作されたものであると考えられる。

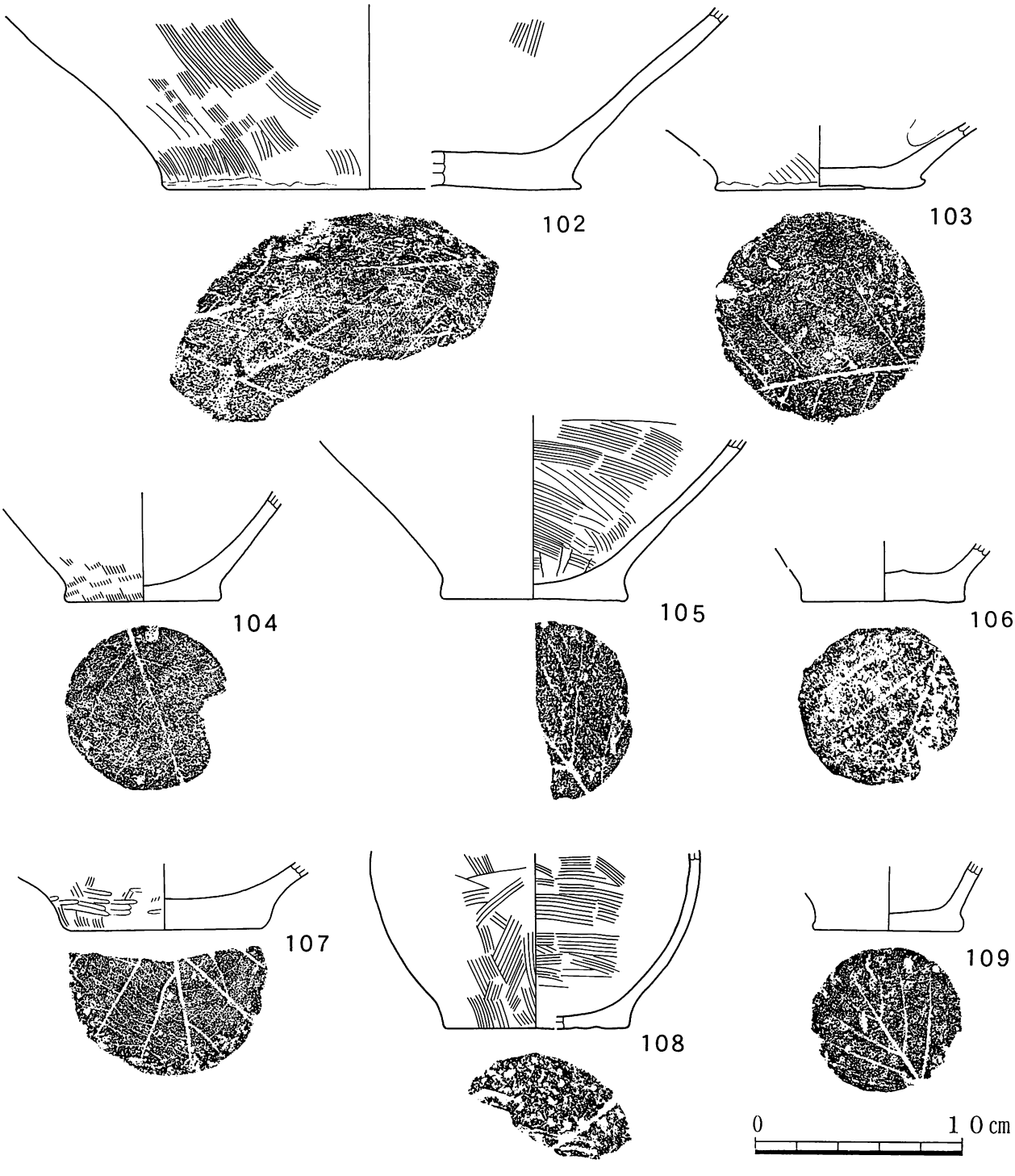
第31図1～9は高杯である。高杯は全体的に非常に数が少なく、全体の様相を知ることができるものは皆無に等しい。また小片のため、その出自についてもはっきりと知ることができるものはない。1は杯部が深く、口縁部が外反するものである。摩耗が著しく、調整を観察することはできないが口縁部付近に指頭痕を見ることができる。2は杯部中央部に稜線をもつものである。口唇内部には摩耗が著しいが縄文が巡る。また4及び5は竹管のような施文具を巡らして、施文するものである。具体的にどのような器形のものなのかは不明である。8は脚部に透孔をもつものである。他のものに比べて、後出のものであると思われる。9は高杯杯部である。小型で、杯下半部に不明瞭であるが稜線をもつ。

10～15は鉢である。身の深いもの・浅いものがみられる。10は頸部に稜線をもつ。わずかにハケが見られる。11～13は身の浅いもので、内・外面をハケにより調整されている。14・15は有孔鉢の底部であると思われる。全体的に数は少ない。底部の大きさから、いずれもそれほど大きいものではないと思われる。16から19はミニチュア土器である。16・17は台付甕である。20・21は紡錘車である。22は側面部に刻みをもつ。

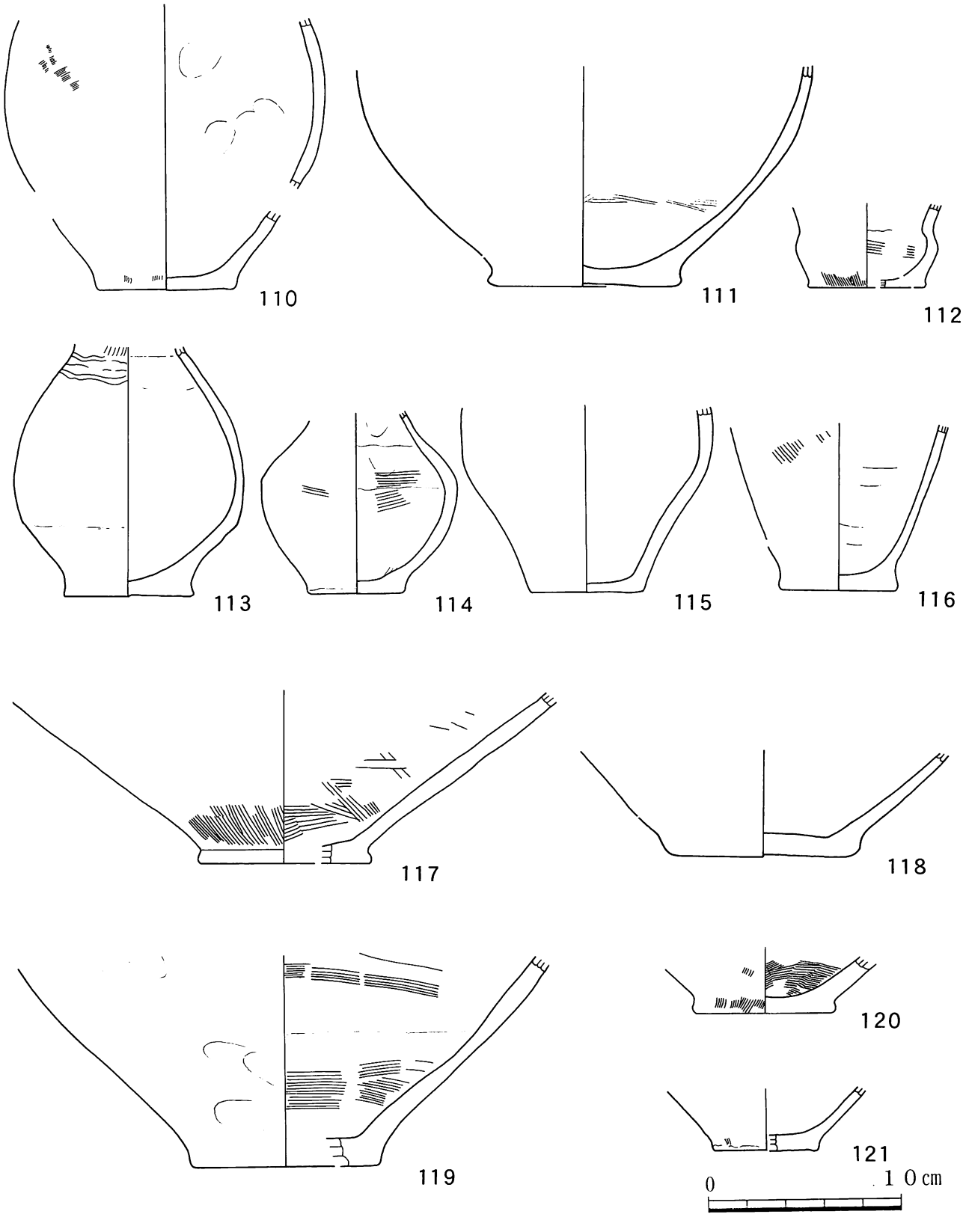
第32図は石器および玉類である。1は磨製石斧である。2号円形低墳墓南側溝内の弥生時代後期の遺物を多量に含む層から出土した。このため、当該時期のものであると考えている。2は第4号住居跡より出土した土製の管玉である。平にのばした粘土を丸めて孔を作成している。全長3.5cm、幅0.9cmを計る。3は土製の勾玉である。3号円形低墳墓台状部より出土した。遺物の性格から、3号円形低墳墓に伴う可能性を全く否定することはできないと考えられる。全長4.1cm、幅1.3cmをはかり、正面に向かって左側の孔付近を破損している。このため、穿孔方法を断定することは困難である。



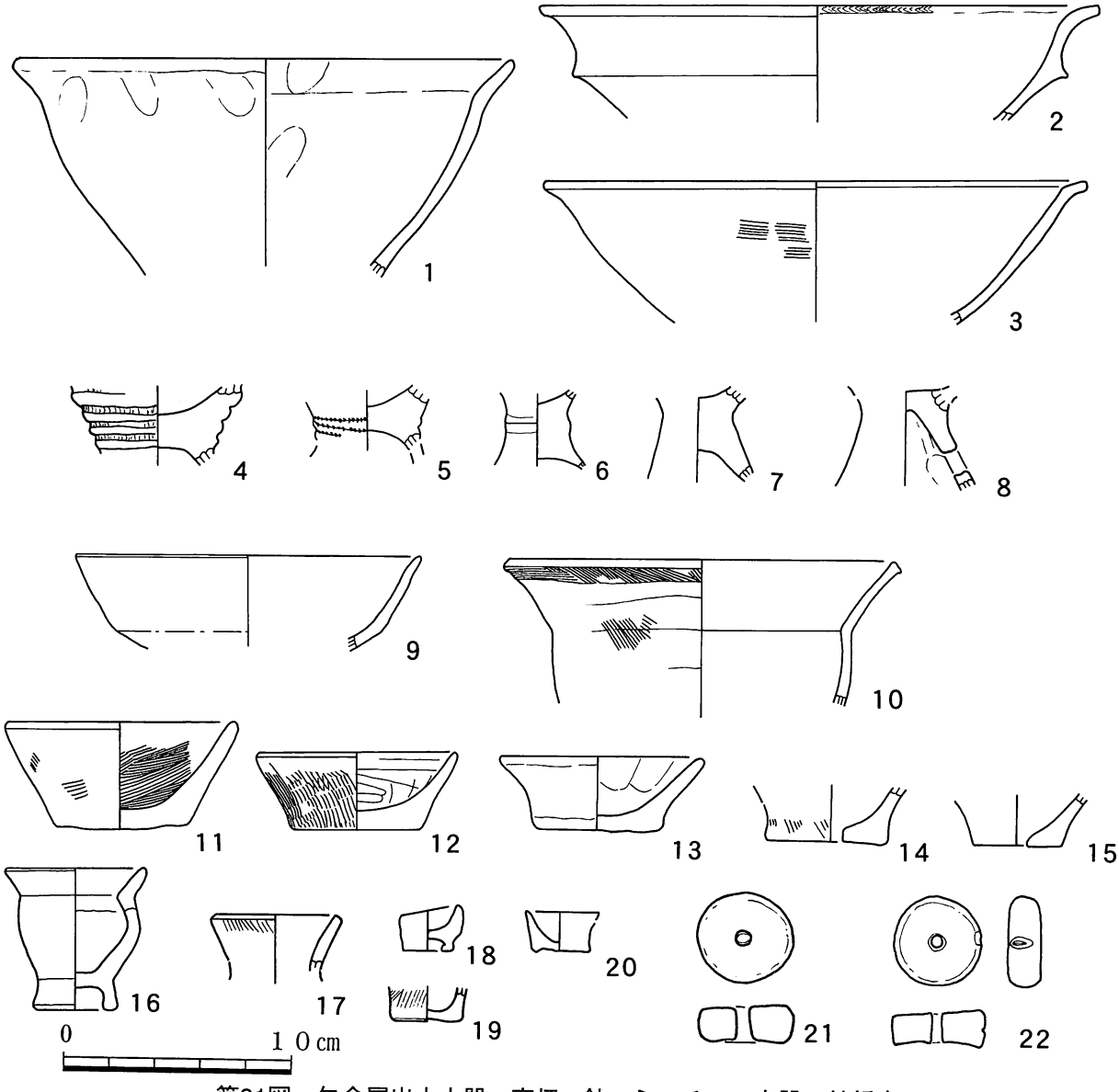
第28図　包含層出土土器　壺（5）



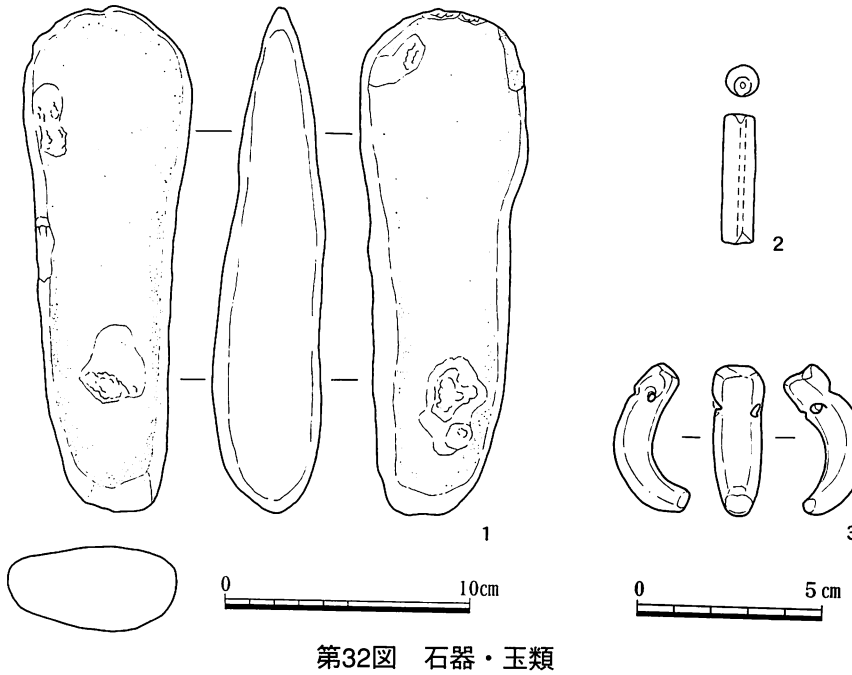
第29図　包含層出土土器　壺（6）



第30図　包含層出土土器　壺（7）



第31図　包含層出土土器　高杯・鉢・ミニチュア土器・紡錘車



第32図　石器・玉類

第２節　円形低墳墓

本遺跡からは３基の円形低墳墓が確認された。これらの円形低墳墓は、曽根丘陵の山裾と沖積地とが交差する傾斜変換線上の標高255m付近の、南から北に向かって低くなる傾斜地に造られているものである。これらのうち一番北側に存在するものを１号、最も南側に存在するものを３号、これらの間に存在するものを２号とした。そしてこれら確認された３基の円形低墳墓のそれぞれの距離関係は、１・２号は周溝が一部で重複して造られており全く空白地はみられないが、２号と３号とは約20mほどの距離を空けて造られている。

円形低墳墓の距離関係は今述べたとおりであるが、これらと周囲に存在する古墳との位置関係をみてみると次のようになる。まず、１・２号付近では北側の道路を隔てた10m程の指呼の距離に、５世紀後半代に造られたかんかん塚（茶塚）古墳がみられる。また３号付近では西側の周溝から７m西側に、５世紀初頭に造られた本県で最大の円墳である丸山塚古墳の周溝が近接している。さらに１号から東方100mほどの丘陵上には４世紀中頃に造られた大丸山古墳（前方後円墳）、また３号から200mほど南方には４世紀後半頃に造られた本県最大の古墳である銚子塚古墳（前方後円墳）が近距離に存在する地域である。確認された３基の低墳墓はこのように言わば本県の古墳時代における中枢地といった環境の中に造られており、しかもかんかん塚（茶塚）古墳と丸山塚古墳との背後に挟まれたごく狭い空閑地に造られたものである。

１号円形低墳墓

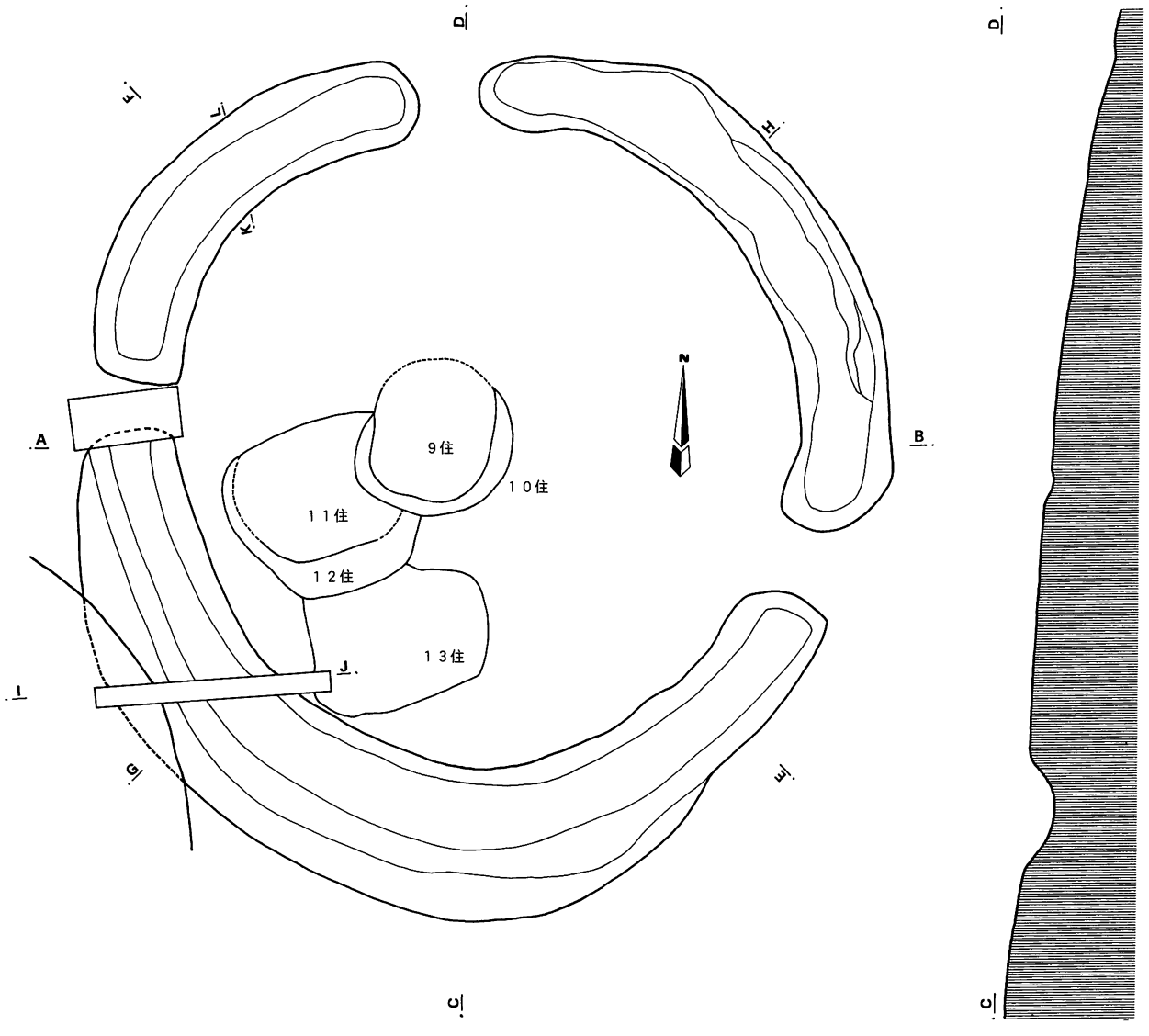
Ｃ７・Ｃ３・Ｈ３・Ｈ７グリッドで、２号低墳墓の周溝と本低墳墓の南西側の周溝の一部とが僅かに重複して確認された。そして重複部分に設定したトレンチの土層観察から、２号低墳墓が本低墳墓を切って造っていることが確認でき、本低墳墓が２号円形低墳墓に先行する時期のものであることが明らかとなった。

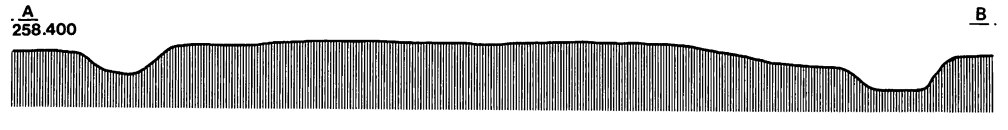
本低墳墓は先に述べたように傾斜変換線上に造られたものであるが、その傾斜状況は周溝の南から北の両端において、比高差にして2.9mほどの差となる傾きをもった斜面ということになる。

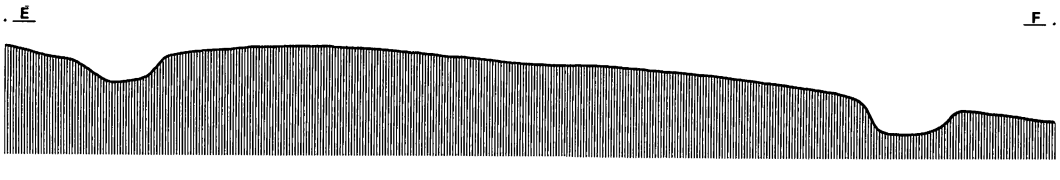
本低墳墓の大きさは、台状部上縁で東西18.1m、南北18.3m、周溝の外側上縁で東西24.8m、南北23.6mほどとなり、ほぼ正円形に近い形態を見せている。ちなみに台状部縁辺部の標高は、東257.3m、西257.8m、南257.6m、北255.7mとなり、南北の傾斜が東西のそれに比べて大きいことが確認できる。

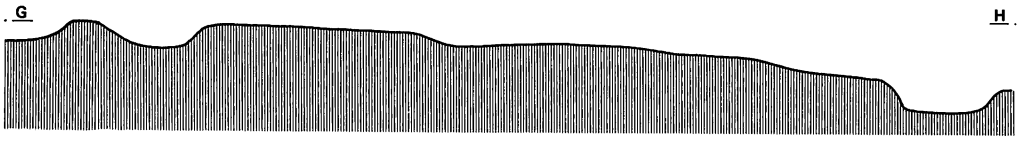
本低墳墓の周溝には等間隔でないが、ブリッジ（土橋）がみられる。東西で２分割し、さらに２分割した北側部分をさらに２分割した位置、すわち南側を除いた東、西、北側の３箇所にブリッジが造られている。東側のブリッジは幅1.9m、長さ2.5m前後、西側のブリッジは幅1.5m、長さ2.2m前後、北側のブリッジが幅1.8m長さ2.2m前後と、３箇所ともほぼ同規模の大きさで造られている。このような位置での３ブリッジをもつものとしては、本遺跡の台上の丘陵上にあって、大丸山古墳より東100mほどの位置にある東山南１号墳が上げられる。形態的には極めて近似性の強いことが指摘できるものであり、所在地域との関係からも本低墳墓との強いかかわりをもつことを指摘できる。この東山南１号墳は本低墳墓より幾分規模の小さいものであるが、周溝の中より初期須恵器の把手付椀、土師器壺、甕、杯、高杯などの出土が確認されており、これらから５世紀第２四半世紀ころの時期が考えられているものである。

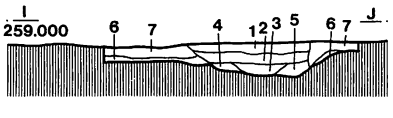
周溝は南側の半月形のものが、斜面上部に位置することから最も幅の広いものであり、かつ中央あたりで突出する形態をみせるもので、最大4.2m、最小2.7mほどとなっている。周溝はほぼ中央あたりを分水嶺として東側と西側とに徐々に低くなっている。周溝の立ち上がり状況は台状側でも周溝外側でも、南側の周溝の中央あたりを除きおおよそ同じような角度で立ち上がっており、断面形態もおおよそ逆台形を呈する。しかし周溝の中央あたりは、特に周溝外側の傾斜が他のところと違い、比較的緩やかな造りとなっている。ちなみに深さは中央で80cm、東端あたりで60cm、西端あたりで85cmほどである。北東側の周溝は４分の１強ほどの弧状で、幅2.5m前後、深さ60cm前後、北西側の周溝は４分の１弱ほどの弧状で、幅2.5m前後、深さ80cmほどで、周溝の断面形態はおおよそ逆台形である。これら周溝の底部標高は、南側の周溝の中央あたりで256.6m、北東側の周溝





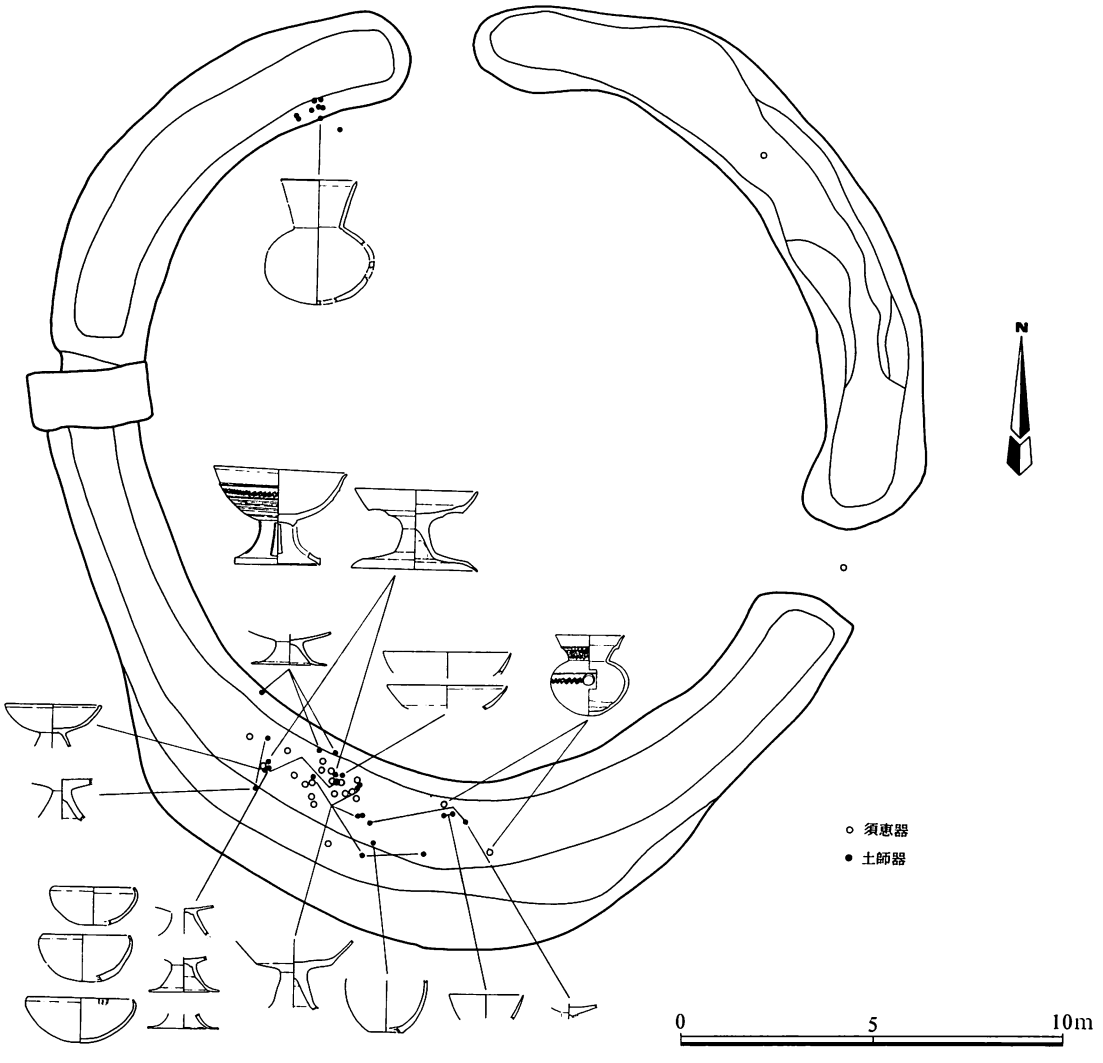






1．褐色土　黒色である
2．褐色土　黒色である。人頭大の礫を含む。
3．黒褐色土　頭大の礫および小礫を含む。
4．褐色土　小礫を含む。
5．褐色土　小礫を含む。
6．黄茶褐色土　地山との混じりで礫を含む。
7．黒褐色土　礫を含む。

第33図　第１号円形低墳墓



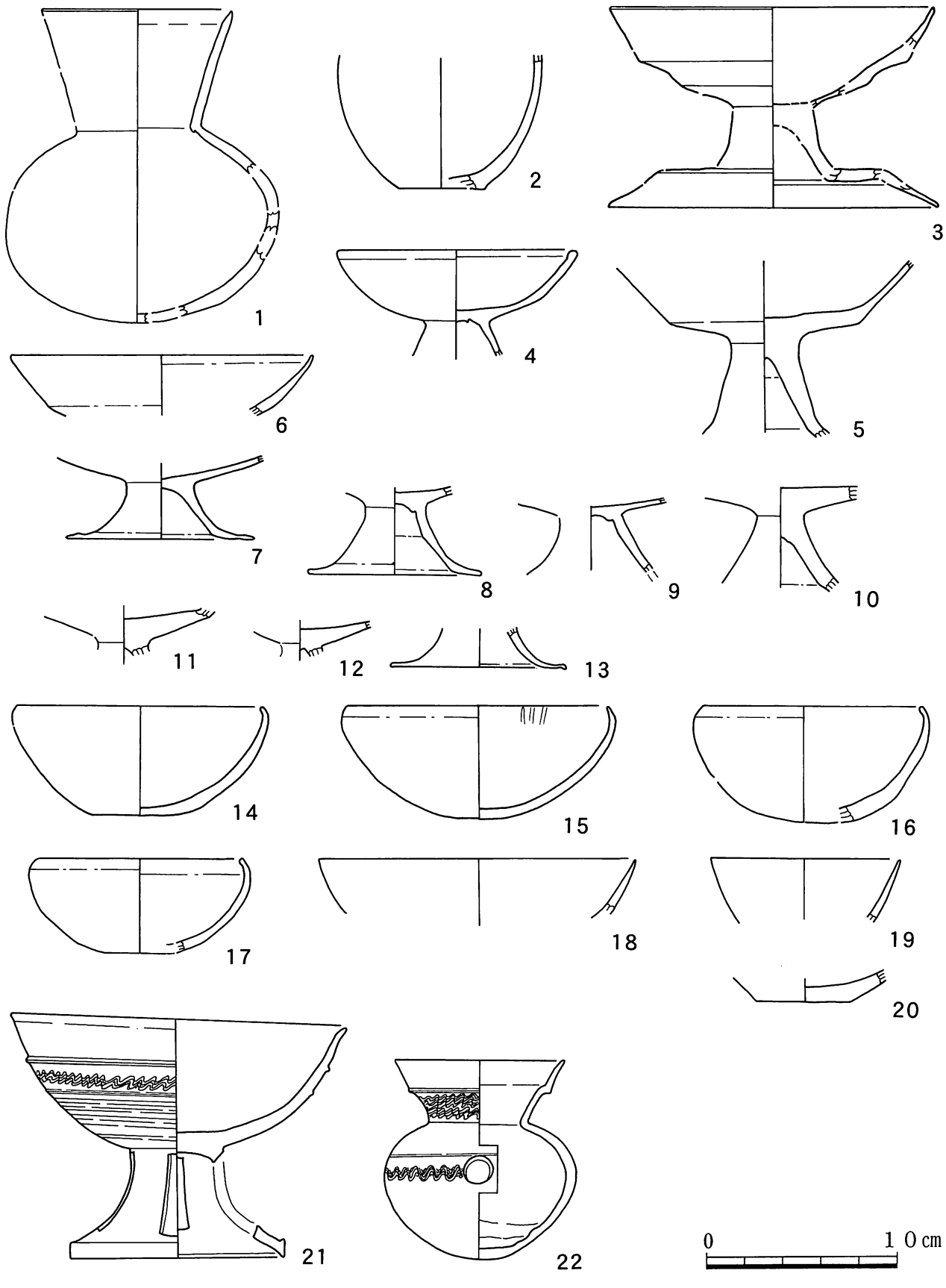
第34図　第１号円形低墳墓遺物分布図

の中央あたりで255.9m、北西側の周溝の中央あたりで255.5mほどとなり、相対的には南側に比べ北側が１m前後低い位置に造られていることが確認できた。

台状部については、版築をほとんど確認することができないほど削平が進んでおり、台状部がどれだけの高さをもっていたものなのか明らかにすることができなかった。このため同様に埋葬の主体部を確認することもできなかった。

遺物の出土状況は第34図に示したとおりであり、分布状況は南側の周溝のしかも中央あたりで周溝が突出した地域に広範囲にわたり遺物の集中が窺え、この他では北西側の周溝の東端近くのごく狭い範囲と、北東側の周溝に点としての分布が認められる程度である。従って南側の周溝の中央部が、特別な意味をもっていた場所と考えることもできる。遺物の出土状況をみてみると北西側の周溝からは、土師器の長頸壺が台状部の縁から周溝の底にかけて確認されており、縁に立っていたものが壊れて周溝に落ちたか、壊したものを投げ捨てたかのいずれかと考えられる。南側の周溝でも幾つかのものが台状部の法面などから確認されていることから、それらについては同様なことが考えられる。このほか量的に多いことから溝の中に意識的に配置したことの可能性も考えなければならないが、現状では明確な断を下すことができない。遺物の接合状況からは、投げ捨てられたと考えるのが妥当かと考えている。

出土遺物には土師器と須恵器とがある。土師器は長頸壺（第35図１）、甕（同２）、高杯（同３～13）、杯（同14～18）でる。須恵器は高杯（同21）、碗（同22）である。このうち須恵器については初期須恵器の範疇でとら



第35図　第１号円形低墳墓出土遺物

えられるもので、大阪府陶邑窯跡ＴＫ208形式に近いものである。しかし土師器の杯などの形態的にはやや新しい要素がみられることから、本低墳墓が５世紀第２四半世紀の終わりころより第３四半世紀中頃の時期に造られたものと考えておきたい。

２号円形低墳墓

Ｅ13・Ｅ７・Ｋ７・Ｋ13グリッドで、１号円形低墳墓の周溝と本低墳墓の北東側の周溝の一部が僅かに重複して確認された。新旧関係は１号低墳墓で述べたとおり、本低墳墓が１号低墳墓を切って造られていることが確認され、本低墳墓の新しいことが明らかとなった。本低墳墓の周溝の西側部分においては、南側の山裾から北側の盆地側へ小河川が周溝の一部を切って流れ出でている。さらにこの小河川は護岸工事が終わっており、周溝端の当たりまで工事の及んでいる可能性が極めて高い状況であった。このため周溝の南部分については、調査をせず図上復元した。また、周溝から台状部に幅30㎝、深さ50㎝前後の溝が切り込まれている。おそらく後世の農作業などによるものと考えられるものである。

本低墳墓は１号低墳墓同様に傾斜変換線に造られているが、１号低墳墓より多少高い位置にある。その傾斜状況は周溝の南から北の両端において、比高差にして3.2m程の差をもつ斜面といえる。

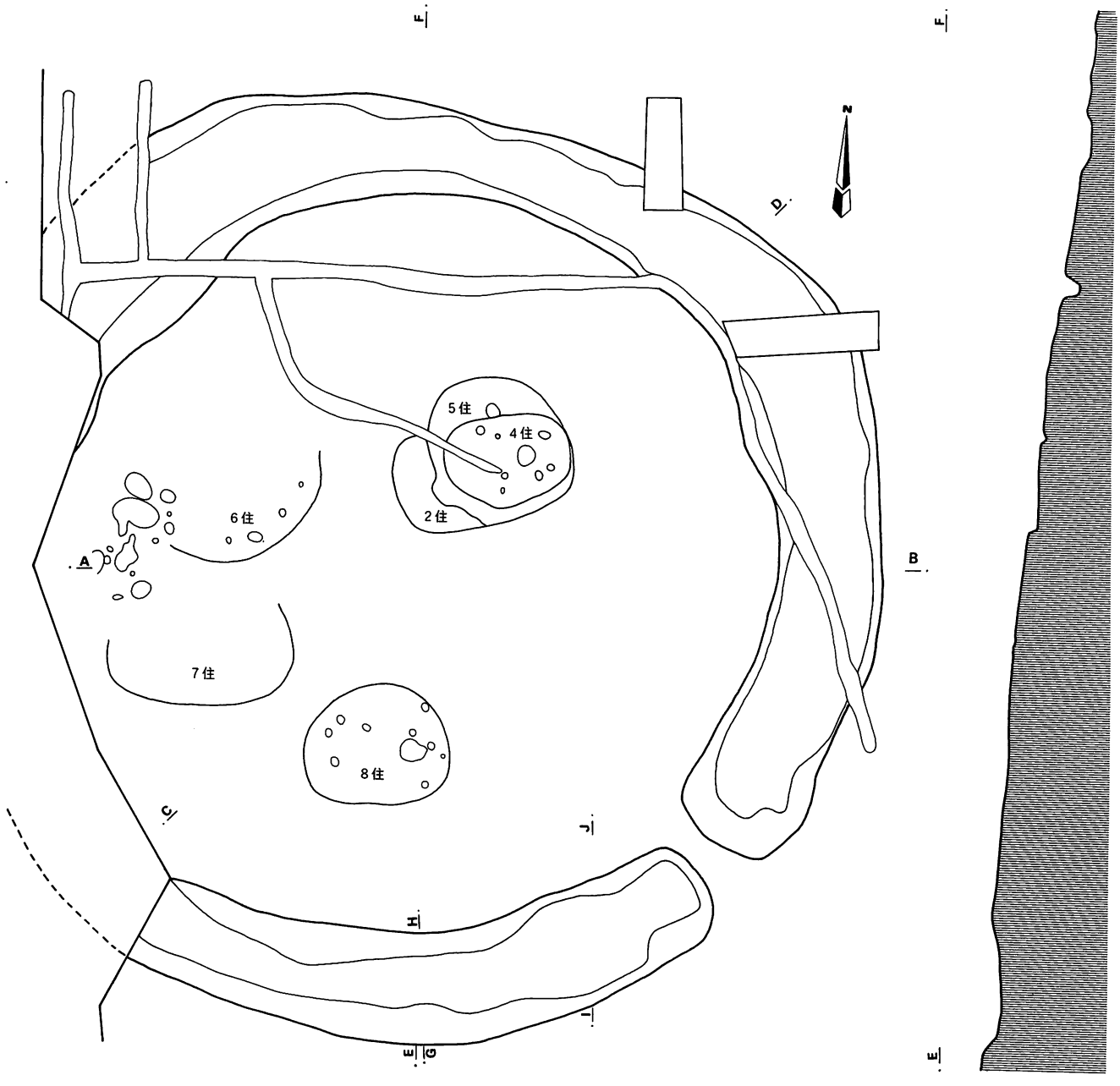
本低墳墓の大きさは、台状部上縁で南北23.5m、東西は推定で23.75m、周溝の外側上縁で東西31m（推定）、南北30.4mとなり、１号低墳墓と同様にほぼ正円形を呈するものである。この台状部の標高は、東258.850m、西259.50m、南257.90m、北255.20mとなり、やはり南北の傾斜が東西に比べて大きい。

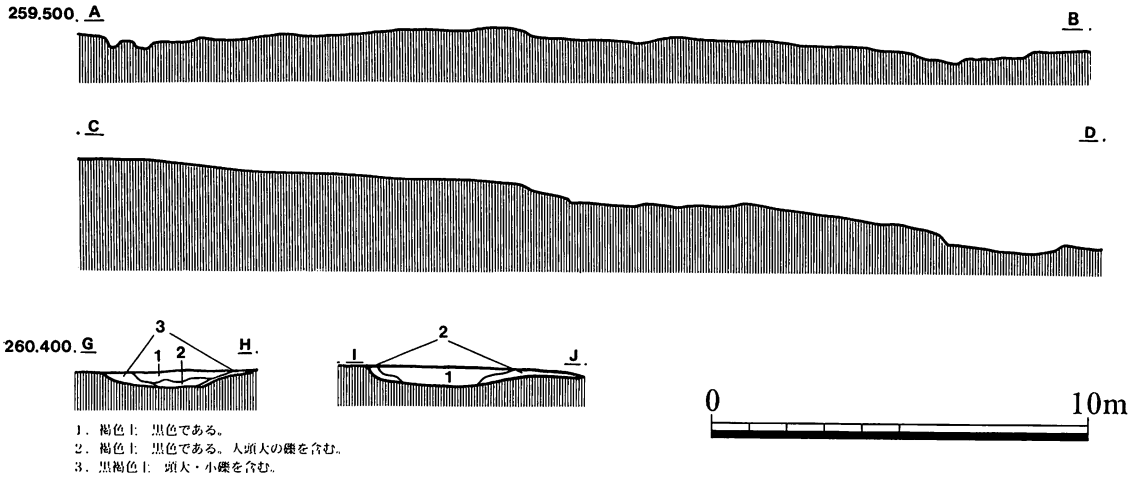
本低墳墓の周溝は西側が推定となっているため、正確なブリッジの数は分からないが、南東側で一ケ所だけの形態ではないかと考えられる。これは幅１m、長さ３m前後で、１号低墳墓のそれに比べやや狭いものである。周溝の幅は北側で狭くなっているが、これは開墾による削平のためと考えられるもので、現状より１m前後広くなるものと考えている。最も広い所が北西側の幅4.5m、最も狭い所が東側の3.5mほどであり、１号低墳墓にみられた意識的に造られたような突出部はみられない。周溝は南東部あたりを分水嶺としており、そこから東側と西側とに向かって徐々に低くなっている。周溝の立ち上がり状況は台状側でも周溝外側でも緩やかな角度で立ち上がっている。周溝の深さも東側で30㎝、南側で50㎝、北側で30㎝と浅く、立ち上がりの角度を合わせ考えると、激しい削平が相対的に行われた可能性を窺うことができる。周溝の底部標高は東側で258.65m、南側で257.60m、北側で254.85mで、やや南東から北西に傾斜しているようだが、南側に比べて北側が2.7mほど低い位置に造られている。

台状部については、版築を全く確認することができなかった。これは削平の進んでいることを物語っており、台状部の高さも確認できず、また埋葬主体部も確認できなかった。

遺物の出土状況は第37図に示したとおりであり、特にブリッジの左右付近に集中していることが分かる。中でも１号周溝墓の周溝と重複する北側あたりに、その分布が集中しているようである。また、台状部の肩あたりの破片と周溝の中の破片と接合するものがみられることから、１号周溝墓と同様に台上部に置かれていたものが落ちたか、あるいは壊したものを投げ捨てたかのいずれかであろうが、状況からすると後者の可能性が強いものと考えられる。なお、須恵器がブリッジを挟んだ北側と南側との周溝から出土しているが、土師器についてはブリッジ北側に集中している傾向がみうけられる。

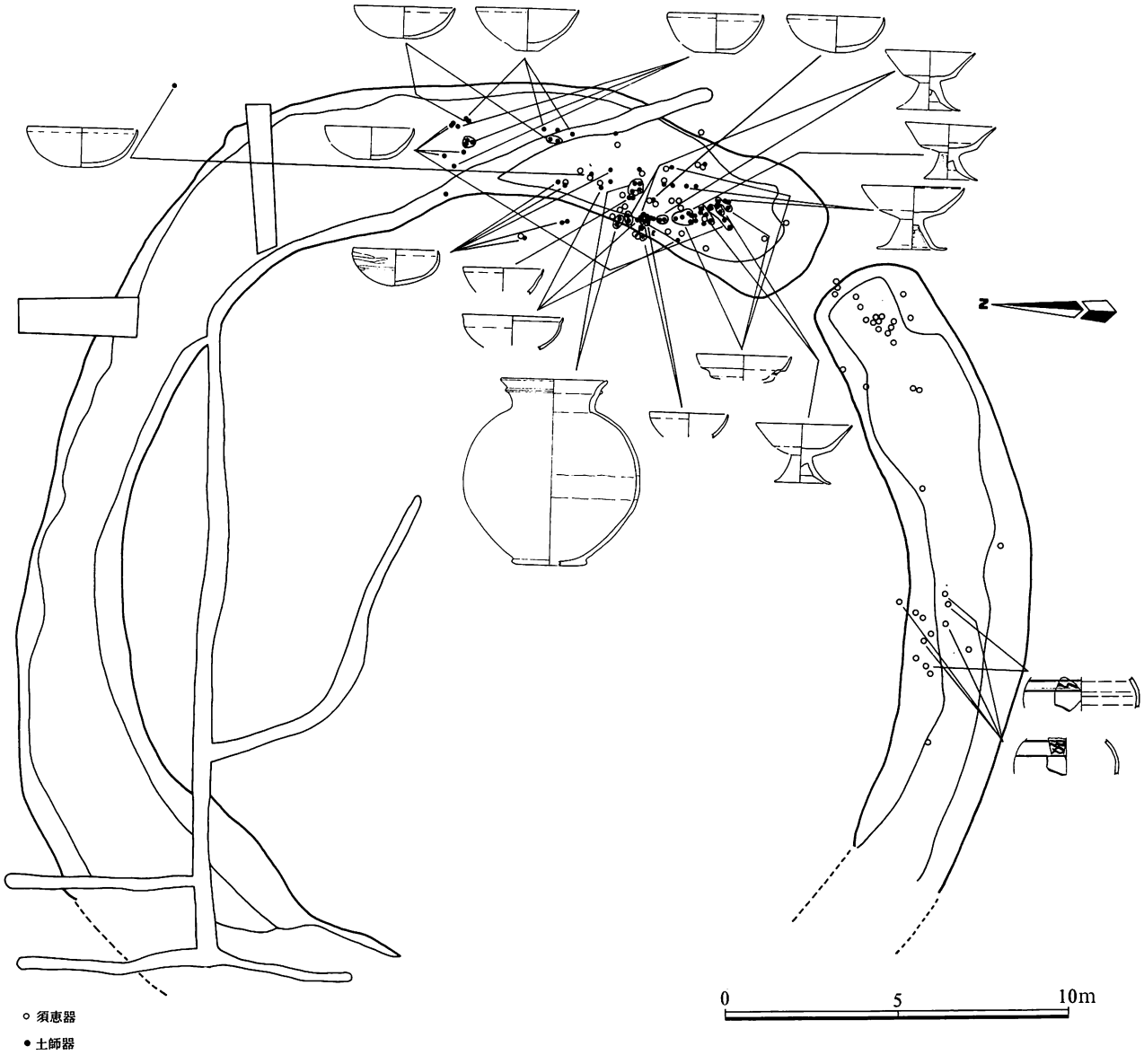
出土遺物には既に述べたが、土師器と須恵器がある。土師器には甕（第38図１）、高杯（同２～６）、杯（同７～20）、須恵器には甕（第39図21～35）、高杯（同36）などがある。このうち須恵器については、初期須恵器の範疇でとらえられるもので、大阪府陶邑ＴＫ216形式に近いものである。しかし、１号低墳墓同様に土師器の杯などが形態にはやや新しい要素をもっていることから、本低墳墓が５世紀第３四半世紀頃の時期に造られたものと考えておきたい。





1．褐色土　黒色である。
2．褐色土　黒色である。大頃大の礫を含む。
3．黒褐色土　頃大・小礫を含む。

第36図　第２号円形低墳墓



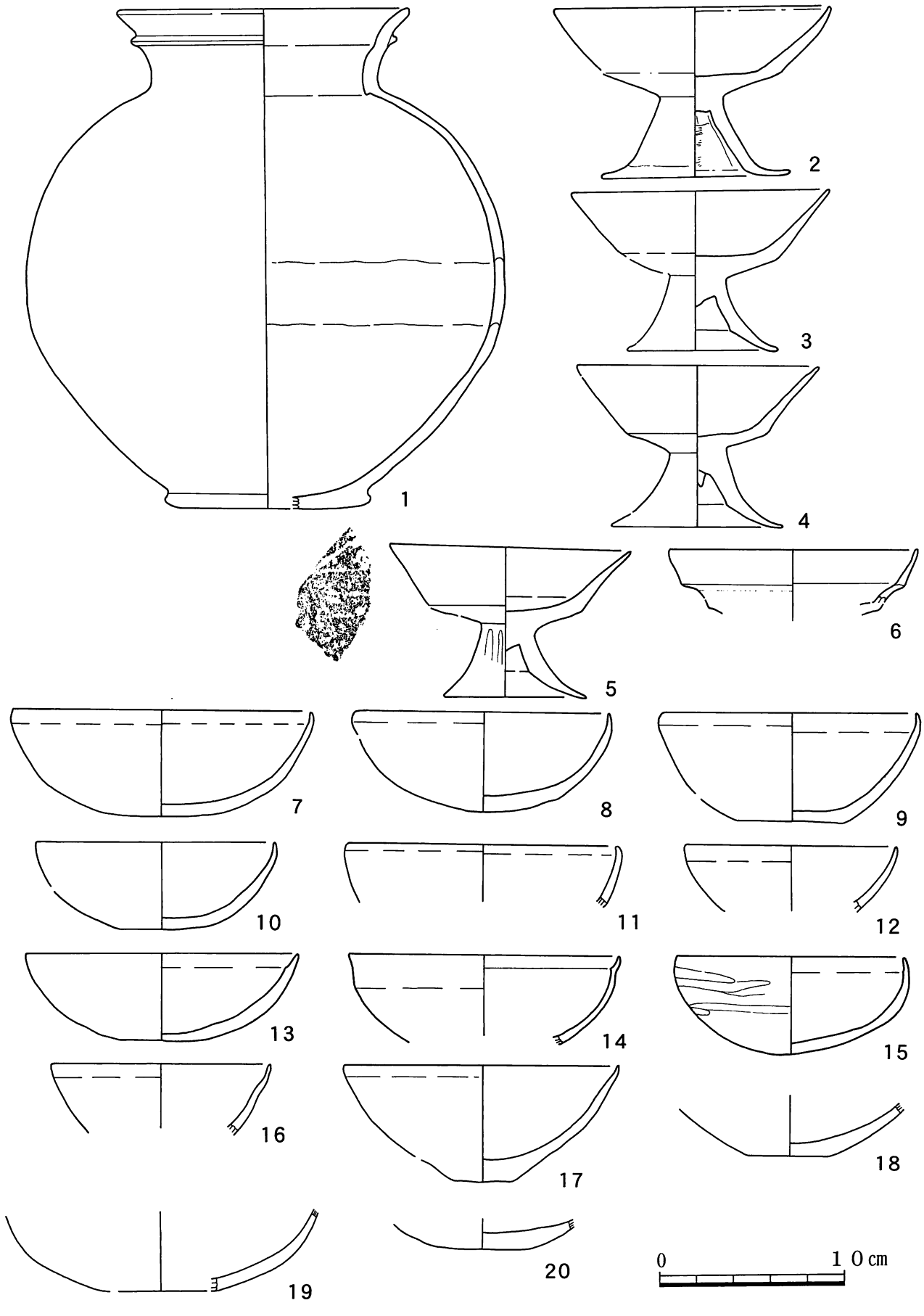
第37図　第２号円形低墳墓遺物分布図

３号円形低墳墓

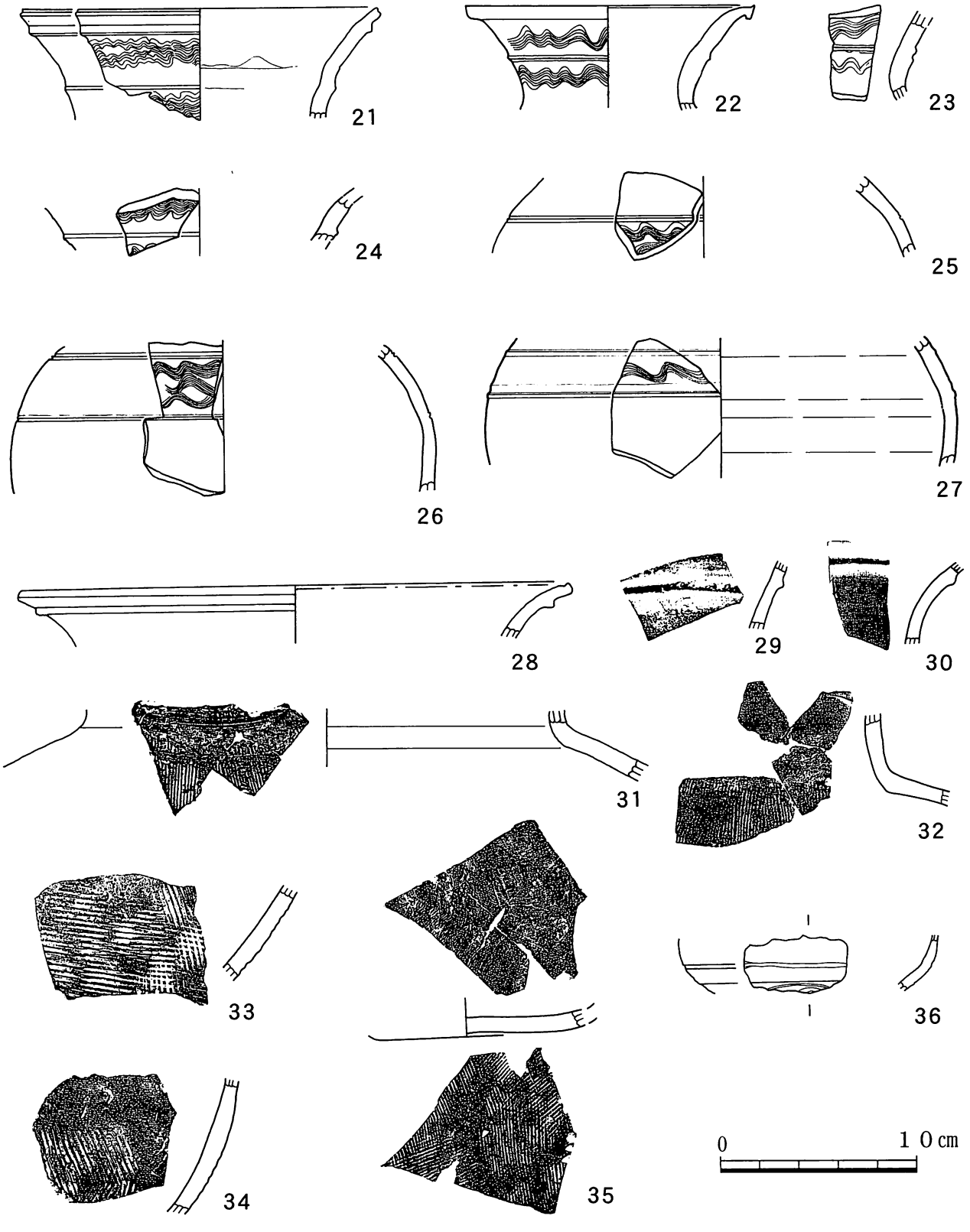
Ｆ19・17、Ｉ17・19グリッドで単独で確認された。なお、台状部のやや南寄りにおいて、土壙が確認されている。しかし、出土した土器が弥生時代後期のものと考えられることから、また、周囲から同時代の土器片がかなり出土していることから、本低墳墓に伴う埋葬の主体部ではなく、本低墳墓に先行する時期の土壙と考えられる。本低墳墓は１・２号低墳墓同様に、傾斜変換線上に造られているものであるが、１・２号低墳墓と違い傾斜が南東から北西方向をとる傾斜面上にある。

本低墳墓の大きさは１・２号低墳墓に比べ、かなり規模の小さいものである。台状部上縁で東西9.2m、南北11.2m、周溝の外側上縁で東西12.5m、南北14.2mほどのもので、やや南北に長い円形の形態をみせている。ちなみに台状部縁辺部の標高は、東258.45m、西258.1m、南258.6m、北258.2mである。

本低墳墓の周溝には東側に、一ケ所のブリッジがみられる。しかし、１・２号低墳墓と違い、平面を若干掘り込まれた形態でブリッジのみられる形態をとるものである。この周溝は幅１～２m、深さ30～60cm前後の規模であり、南東側が浅く北西側で深い状況である。周溝は、ほぼ逆台形の形態をみせている。周溝の底部標高は東側で258.45m、西側で257.45m、南側で258.4m、北側で257.5mほどとなり、北側が南側に比べ0.9mほど低い位置に造られていることが確認できる。



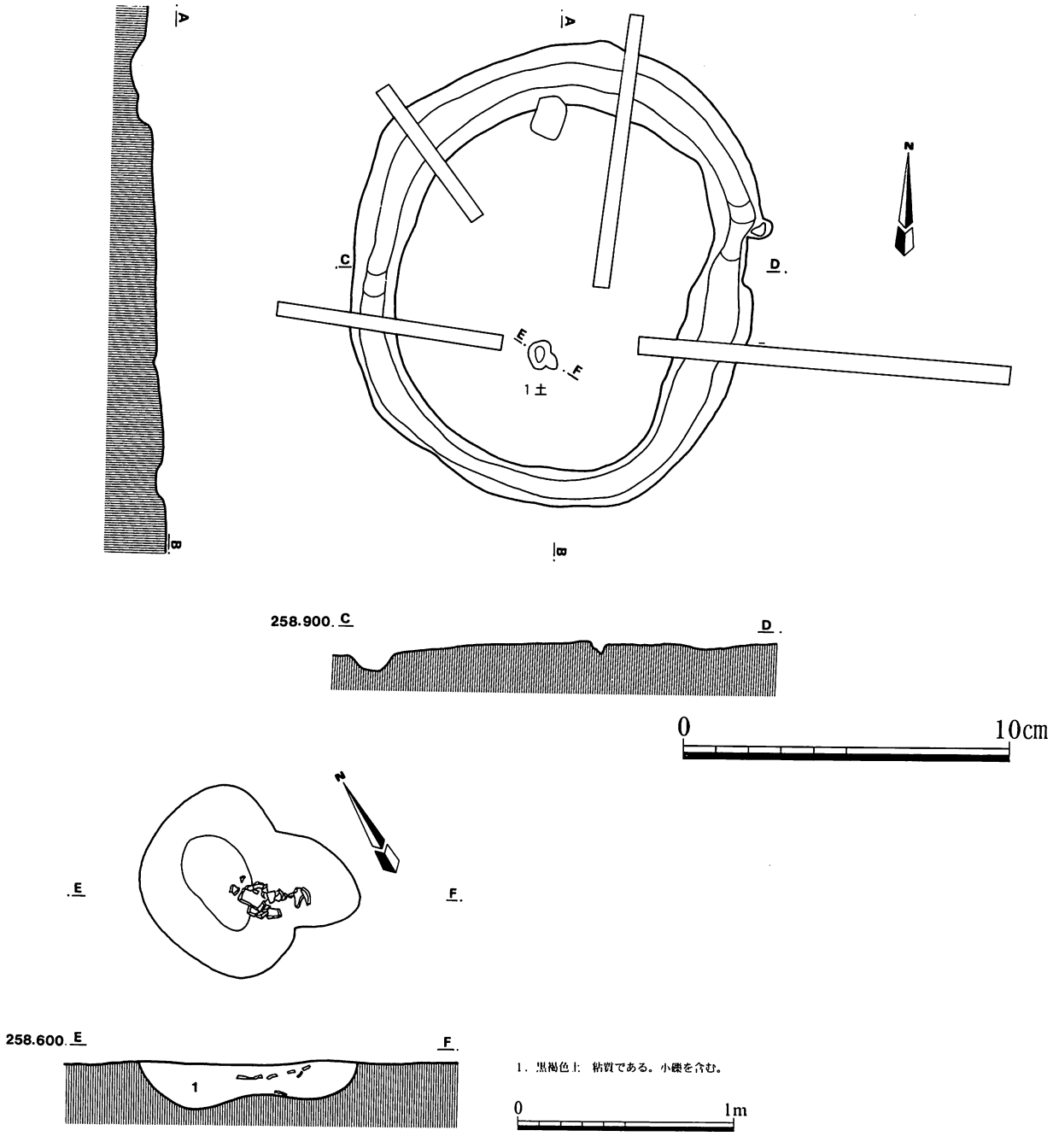
第38図　第２号円形低墳墓出土遺物（１）



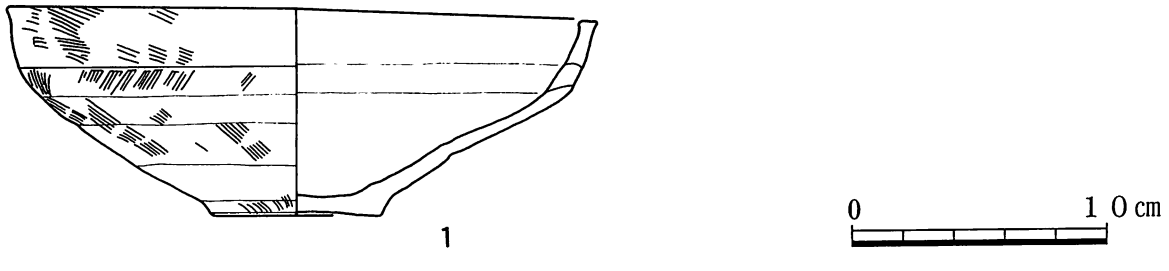
第39図　第２号円形低墳墓出土遺物（２）

台状部については、版築をほとんど確認することができなかった。このため埋葬の主体部を確認することはできなかった。

遺物は、周溝から確認されたものがほとんど弥生時代後期の土器片であった。また、土製勾玉が台状部から出土したが、やはり土器と同様な弥生時代後期の時期が考えられるものである。しかし、低墳墓の形態から１・２号低墳墓と同様に古墳時代前期の５世紀代第３四半世紀頃の時期を考えている。



第40図　第３号円形低墳墓・１号土坑



第41図　１号土坑出土遺物

第３節　土壙

１号土壙

H18グリッドで、３号円形低墳墓の台状部において確認された。出土土器の年代から、本低墳墓にかかわる遺構ではなく、以前の集落跡にかかわる遺構といえるものである。形状は長軸1.02m、短軸0.88m、深さ10cm前後の不整形をみせる。中からやや大きめな土器片が確認されたのみである。

出土遺物は鉢型土器（第41図１）で、時期としては弥生時代後期を考えることができる。従って本土壙も、この時期のものとなる。

第４節　丸山塚古墳周溝外縁の調査

丸山塚古墳南側及び東側の周溝の外縁については、昭和59年度の整備事業に伴う発掘調査の時点において、土地が未買収のため未調査となっていた。このためこの地区の外縁の位置については、調査された前後のトレンチの状況から推測したものであった。このほどこの地区の土地の買収が終了したことから、岩清水遺跡の調査の一環として合わせて調査を実施した。調査のために設定したトレンチは、丸山塚古墳の東側に墳頂上より移設・設置した「丸山の碑」を起点に、南側へ１～10号トレンチとした。またトレンチの杭は墳丘側をＡ点、斜面側をＢ点とする。

１号トレンチ

東側の周溝外縁を確認するために設定したトレンチである。地山は少量の小礫を含む暗茶褐色土で、よく締まりかつ粘性が高いものである。そしてこの地山は１～10号トレンチでほぼ共通するものである。

本トレンチのＡ点より2.3mほど外側の地点において、地山に変換点がみられる。しかし、この位置は昭和59年の調査で確認された周溝の立ち上がりの法面から復元した肩部の位置から、はるか外側に位置するものである。隣接する銚子塚古墳の山側では、周溝の法面の立ち上がりが階段状になっているのが確認されている。これは南側の肩部が地勢から必然的に高くなることから、これを解消するための手段として考えられた結果と理解されるものである。これに対して本トレンチを設定している斜面は、斜面の低い側（下位）に近い位置にある。このことから考えれば、階段状の掘削による掘削を必要としない位置にあることから、畑などの開墾による削平によって地山が後退したものととらえられるのである。従って、肩部はＡ点より内側（墳丘側）に求められるのである。なお、このことは本トレンチの外に５号トレンチまで共通する状況といえるのであり、肩部と考えられる位置の地形が現在波打っているのはそのためであろう。また、埴輪などの遺物は、いずれのトレンチからも全く確認できなかった。

３号トレンチ

Ａ点より2.3mほど外側に地山の変換点がみられるが、これは１号トレンチ同様に開墾による削平のため地山が後退したものであろう。肩部は、Ａ点より内側に求められる。

４号トレンチ

Ａ点より3.1mほど外側に地山の変換点がみられるが、３号トレンチと同様に考えられるものである。

５号トレンチ

地山を少し深く掘り込んだところ、３層にわたる地山の堆積状況が確認された。この中でＡ点より2.7mほど外側に地山の変換点が見られたが、３号トレンチと同様に考えられるものである。

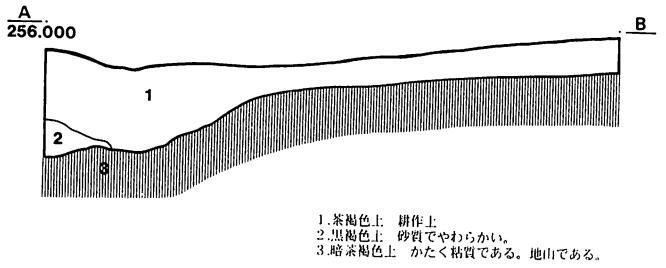
６号トレンチ

本トレンチでは、これといった地山の変換点を確認できたところはない。肩部はＡ点より内側に求められよう。

７号トレンチ

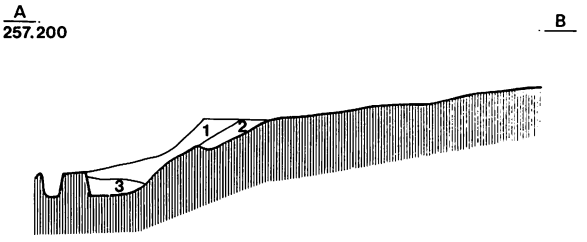
Ａ点より4.2mほど外側に地山の変換点がみられる。この地点はかつて肩部の推定された位置付近にあり、肩部ととらえて問題はないであろう。なお、トレンチの墳丘寄りの一部に、地山まで掘り切れてないところがある。

1トレンチ



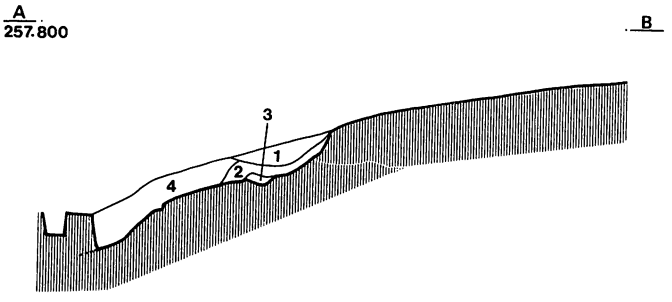
1.茶褐色土　耕作土
2.黒褐色土　砂質でやわらかい。
3.暗茶褐色土　かたく粘質である。地山である。

3トレンチ



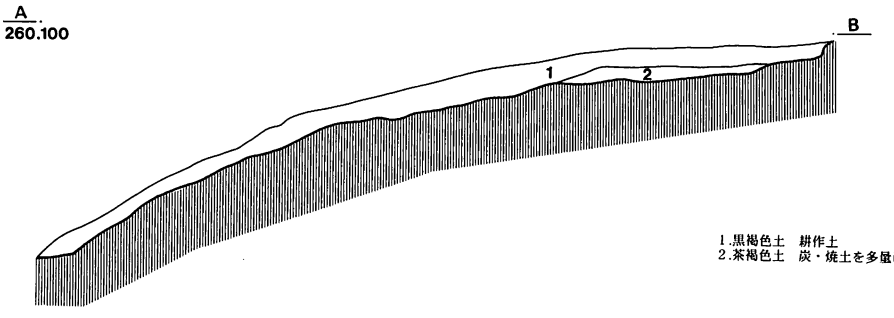
1.明茶褐色土　堅くしまる。1cm程度の茶色礫を含む。
2.黒褐色土　堅くしまり、強い粘性あり。1cm程度の白色礫を含む。
3.茶褐色土　地山である。堅くしまる。3cm程度の白色礫を含む。

4トレンチ



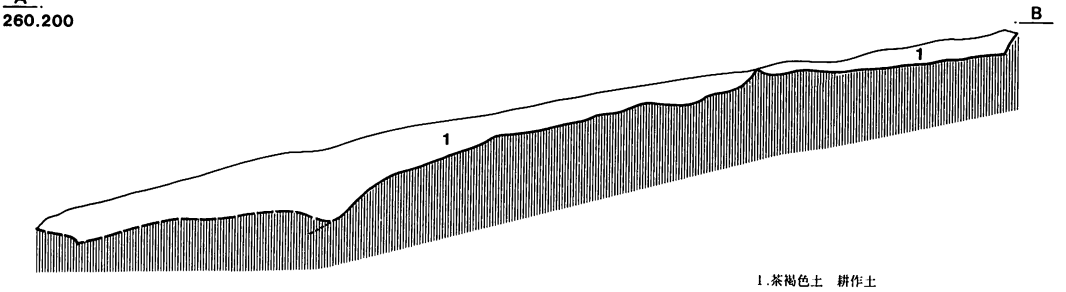
1.黒褐色土　やわらかい。5cm程の礫を多量に含む。
2.茶褐色土　地山であり、堅くしまる。3cm程度の礫を多量に含む。
3.黒褐色土　堅くしまる。1cm程度の白色礫を多量に含む。
4.暗黒褐色土　堅くしまる。1cm程の白・茶色の礫を含む。

5トレンチ



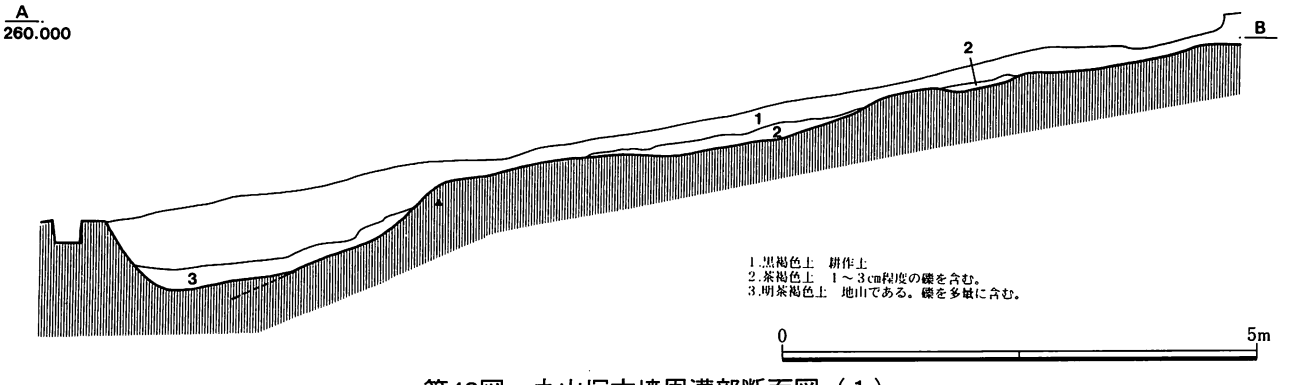
1.黒褐色土　耕作土
2.茶褐色土　炭・焼土を多量に含む。

6トレンチ



1.茶褐色土　耕作土

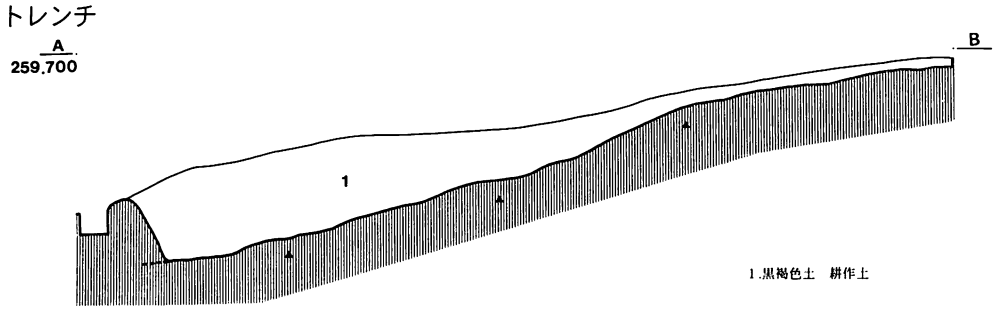
7トレンチ



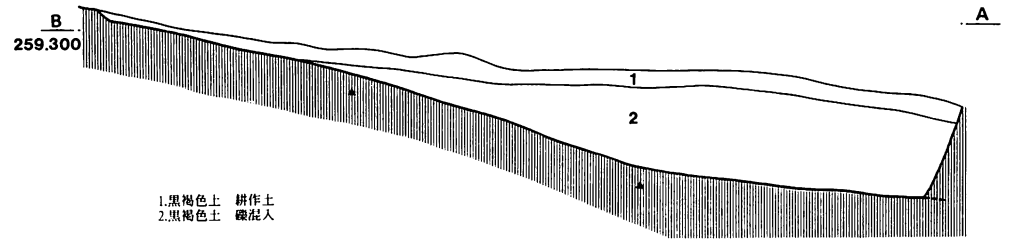
1.黒褐色土　耕作土
2.茶褐色土　1～3cm程度の礫を含む。
3.明茶褐色土　地山である。礫を多量に含む。

第42図　丸山塚古墳周溝部断面図（1）

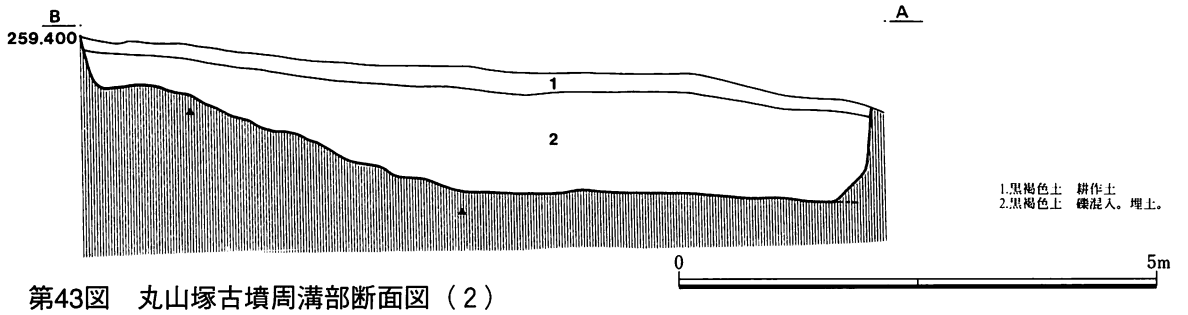
8トレンチ



9トレンチ



10トレンチ



第43図　丸山塚古墳周溝部断面図（2）

8号トレンチ

A点より6.2mほど外側に明確な地山の変換点がある。しかし、この点は前後のトレンチでとらえられた肩部の変換点の位置からすると、少し外側のきらいがある。2mほど内側が前後のトレンチからの所見から合理的と考えられるが、この地点は逆に窪んでいる状況である。

9号トレンチ

A点より3.4mほど外側に基部、やや明瞭さを欠くが6.4mほど外側に肩部とみられる変換点が確認できる。いずれもこれまで推定されていた位置付近であり、基部、肩部ととらえて問題ないであろう。

10号トレンチ

A点より4.6mほど外側に基部、7.4mほど外側に肩部とみられる変換点が確認できる。いずれもこれまで推定されていた位置付近であり、基部、肩部ととらえて問題ないであろう。

以上、トレンチの概況について述べてきたが、この調査によって丸山塚古墳の南側の周溝外縁が、これまでの調査で推定されていた位置にあることが確定できたのである。

銚子塚古墳及び丸山塚古墳南側斜面の試掘調査

本調査では岩清水遺跡の調査、丸山塚古墳周溝の調査のほかに、銚子塚古墳及び丸山塚古墳南側斜面の事業地おいて試掘調査（トレンチ等）を実施したが、遺構、遺物などは全く確認されなかった。試掘調査によってトレンチを設定した畑は、小字山本871～873・868番地、小字東山1382・1386・1395・1396・1398・1451・1455・1457番地である。なお、銚子塚古墳の山裾の林地付近については、検杖器探査によって地山の山土が表面より厚く堆積していることが確認されたのでトレンチによる試掘は行わなかった。

第4章　考　察

第1節　円形低墳墓出土の古式須恵器について
—とくに甕・壺（もしくは大型碗）を中心に—

かつて筆者は岩清水遺跡の本報告前に何度となく、本遺跡の円形低墳墓から出土した土器群について考察する機会を得た[1・2]。そこでは1号円形低墳墓から出土した須恵器である碗及び高杯をおおむねＴＫ23型式に相当するものであることを述べ、それらに共伴する土師器群もその年代に矛盾がないとした[3]。

本遺跡の1号・2号墓周溝部からは、小型碗・高杯のほかにも甕・壺（もしくは大型碗）等の破片が出土し、この時期の須恵器群の組み合わせを知る上で一つの貴重な資料になり得ると思われる。既に報告した考察においては、出土状況や器形の明確であった1号円形低墳墓出土の碗・高杯に焦点を当てて論を進め、遺構の年代決定に至った。今回の本報告においては、これ以外の破片資料である甕・壺についても資料化することができた。甲府盆地出土の古式須恵器を概観すると、この時期の甕・壺（もしくは大型碗）の資料は数が少なく、またそれぞれの段階を見てもその変遷を追うことは困難である。ここでは甲府盆地出土の甕・壺に、今回出土した新資料を加えることでこれらの資料の集成を行ってみたいと考える。

本報告で述べたように、1号円形低墳墓周溝部では周溝全体に碗・高杯の破片が散在するように出土した。本遺跡に先行する東山南（A）（B）遺跡[4・5]でも、これらと同様の須恵器の出土状況が確認できるため、葬送儀礼の一形態ととらえることができる。2号円形低墳墓では、甕・壺（もしくは大型碗）が出土したが、全体像を知ることができるものはほとんど皆無であり、1号円形低墳墓と同様の出土状況を呈するのかどうかは残念ながら不明である。

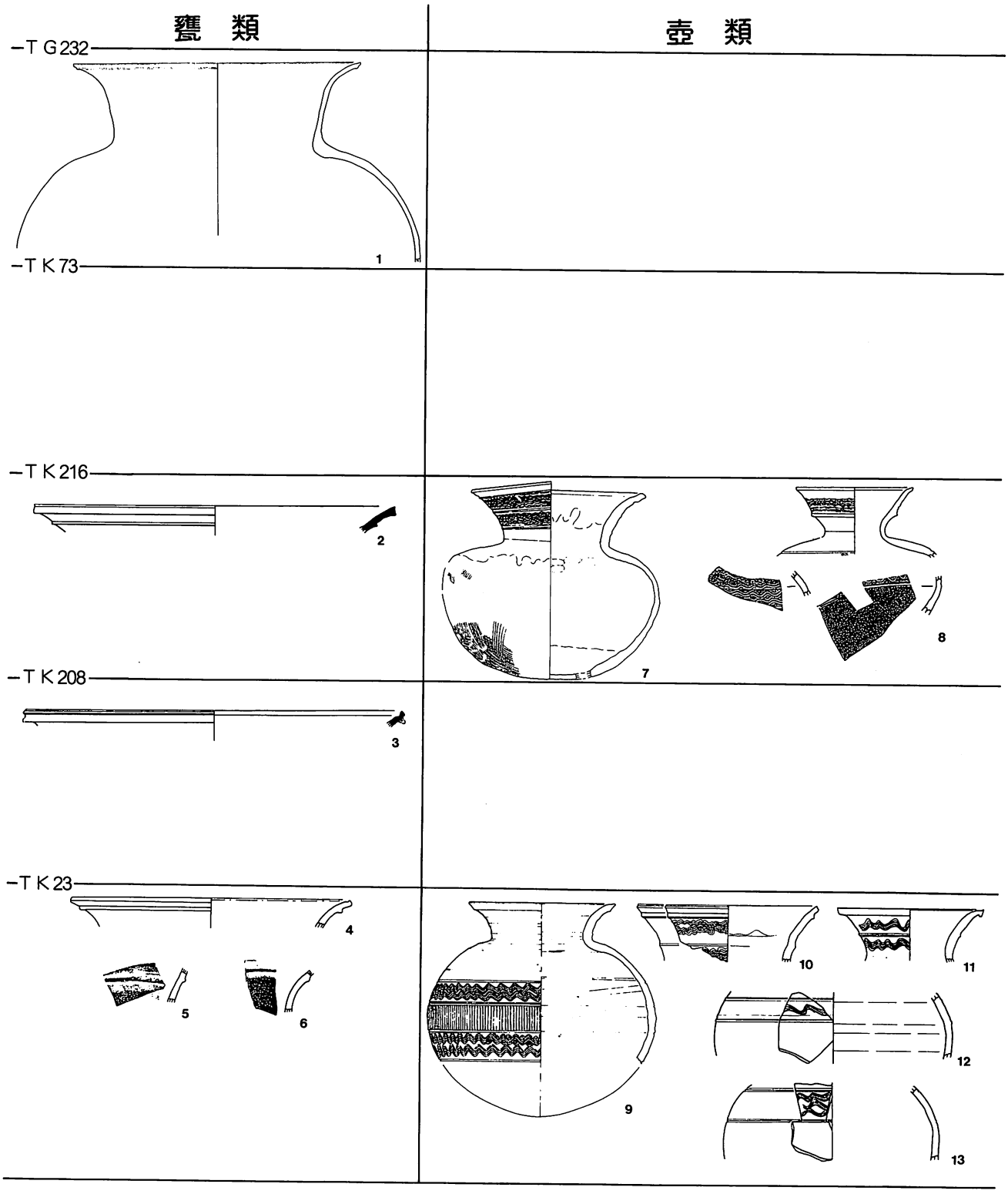
次に2号円形低墳墓出土の資料について、もう少し詳細に観察したい。現在のところ2号円形低墳墓周溝部からは、甕約7点、壺（もしくは大型碗）約7点が確認できる。また固体数を明確にできない甕の胴部破片が多量に存在する。このうち、第39図28～35の甕は、口縁部から底部までが観られ、それぞれ特徴をよくあらわしている。28・29・30は口縁部及び頸部である。外面には口唇部のすぐ下部に、一条のまるい凸線が巡る。31・32から頸部は若干直に立ち上がり、その後上部へ向かってラッパ状に開くものと思われる。口縁部から頸部までは、ロクロによるヨコナデで調整し、胴部から底部にかけては内面はタタキで、外面はナデにより調整されている。色調の異なるそれぞれの個体においても、調整は統一されていることから、これが一つの甕の形態であることを知ることができる。一方第39図21～27は甕（大型碗）である。口唇部内面はつまみ上げられ、溝状に若干くぼんでいるものも見られる（22）。口縁部外面のすぐ下部には、凸線が巡るものもある（21）。また頸部中央には、やはり凸線が巡り、それが上段と下段を区画する凸線になっている。この凸線を境に上段と下段にはそれぞれ櫛描波状文が施される。胴部は内外面ともにナデにより調整される。26は内面がハケ状の工具でヨコナデを施している。胴上部は上下2本の沈線で区画され、区画内には櫛描波状文が胴部を一周する文様帯が見られる。

次に以上のような特徴を考慮した上で、甲府盆地内の資料を概観してみたい。これまで当該地域では、小型碗等と比較して、甕及び壺類の出土例は非常に少かった。とくに前者はわずかに口縁部が見られる程度で、その全体像を把握することは難しく、また形態の変遷を追うこともできなかったといってよい。第44図はこのように稀薄であった甕・壺類に今回の発掘調査で得られた資料を加えたものである。甕類のうち、現在のところ最も古相を呈するのは東八代郡中道町の米倉山Ｂ遺跡第10号土坑出土のもので、TG232型式に位置付けられる。単独の出土であり、後続段階の出土例が今のところ見られないことなどから、この段階が土師器変遷のどの段階に符合するものなのかが一つの課題になっている[6]。御坂町二之宮遺跡[7]の259号住居跡から出土した須恵器甕口縁部は、土師器の様相から、中期中葉に位置付けられるものである。須恵器甕は小片であるが、口縁端部は面取りされ、内側はつまみあげられ、外側はシャープに張り出している。口縁下部には一条の凸線が巡る。

断面は三角形を呈し、非常にシャープな印象を受ける。TK216型式に位置付けられるものと思われ、共伴する土師器の年代とも矛盾ないものである。また二之宮遺跡西46号住居跡の須恵器甕口縁部は、やはり小片であるが端部を内側につまみあげる点では、前段階の形態を色濃く受継いでおり、口縁部のシャープさを若干欠くことを考え、二之宮遺跡259号住居跡のものに後続する段階のものと見てよいと考える。本資料をこれらと比較すると、全体的に形骸化の様相が色濃いが、各要所の特徴を忠実に模倣しようとしている様を看取できる。口唇部内側はやや丸みを帯びているものの、若干つまみ上げている様子を窺うことができる。一方口縁部外側は丸く処理されている。口縁部下段の凸線はやはり断面が丸く、凸線・頸部ともにヨコナデにより調整されている。確認した3点全てにこれらの特徴が見られることから、これらがこの段階の諸様相であると認識することができる。壺（大型甕）はその初現が甕よりかなり遅れて登場するが、全体像を窺うことができる資料が存在する。東山南（B）遺跡2号墓の周溝部からは、甕2点（7は大型甕の可能性がある。）が出土しており、現在のところ盆地内で最も古い例になっている。7は口縁部及び胴部に施されるハケがまるで1本1本引かれたかのような様相を呈し、極めて初期的な印象を受ける。7・8ともに口縁端部や頸部を巡る凸線等、甕と同様非常にシャープな印象を受けるものである。9は中巨摩郡櫛形町六科丘古墳墳頂部より出土したものである。胴部を巡る文様帯はあまり例を見ないものであるが、櫛描波状文を観察すると形骸化した様相が色濃い印象を受ける。本資料（10～13）は口縁部及び胴部の資料のみで、全体像を知ることのできるものは存在しない。口唇内部にツマミアゲを意識しているものの、やや丸みを帯びる。11は口縁部外面が反り返り、より古式のものの模倣であるような観を受ける。いずれも頸部に調整を兼ねたヨコナデを施すことで、上段と下段に区画する凸線を浮上がらせ、表現している。しかし10・11ともに細く、貧弱である。頸部上段と下段にはそれぞれ櫛描波状文が描かれるが、櫛描の密なものや閑散としたもの、幅の細いものや太いものなど、形骸化した印象が強い。胴部はロクロを用いたナデにより調整され、一部ケズリのような痕跡も見られる。8の底部には一部タタキも見られるが、本段階の資料にはタタキによる調整は一般的ではないようである。胴上半部を巡る櫛描波状文は頸部と同様、形骸化している。これらの特徴は田辺編年[8]のTK23型式段階に相当するものであると思われ、共伴遺物との矛盾もほとんど感じられない。

以上のように甲府盆地内の須恵器甕・壺類に本遺跡の新出の資料を加えて集成を試みた。依然として資料は少なく盆地内の当該期の土器様相は混沌としている状況は変わらない。しかし古式須恵器が徐々に増加することで、時期が下降するのに伴って須恵器も形骸化する様相がさらに明かになった。そして中期中葉から後葉にかけて、これらが波のように何度にも亘ってもたらされる状況がより顕著になった。ただ、盆地外からもたらされるものであり、当時においてはまだまだ貴重な文物の一つであっただけにそれを手にできる人物は限られた存在だったに違いない。そして曽根丘陵の円形低墳墓に葬られている人物は、それらを手にできる力をもっていた人物であったと思われる。それらの人物が甲府盆地の中でどのような役割を担っていたのか、当時の社会の仕組みがどのようなものだったのかを知る手がかりを須恵器を通して考えていくことが次の課題といえるのではないであろうか。

1）石神孝子　1998　「甲斐における古墳時代中期の墓制について」『研究紀要』14　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
2）石神孝子　1999　「甲斐における初期須恵器の展開」『山梨考古学論集Ⅳ』　山梨県考古学協会
3）1）の文章中では、1号円形低墳墓から出土した甕・高杯についてTK208型式段階のものと位置付けているが、脱稿後陶邑出土の当該期の資料を実見する機会を得、比較・検討の結果からTK23型式段階に位置付けるほうがより適切であるとの結論を得た。そのため、2）ではこれらの資料の年代をTK23型式に改めた。
4）小林広和ほか　1993　『東山南（A）遺跡』　山梨県教育委員会
5）末木健ほか　1991　『東山（B）遺跡』　山梨県教育委員会
6）石神孝子　2000　「10号土坑出土の須恵器甕について」『米倉山B遺跡』　山梨県教育委員会ほか
7）坂本美夫ほか　1987　『二之宮遺跡』　山梨県教育委員会
8）田辺昭三　1979　『須恵器大成』　角川書店



1．米倉山B遺跡10号土坑　2．二之宮遺跡259号住居跡　3．二之宮遺跡46号住居跡　4～6．岩清水遺跡２号墓
7・8．東山南（B）遺跡２号墳　9．六科丘古墳　10～13．岩清水遺跡２号墓

第44図　甲府盆地出土須恵器（甕・壺類）編年案

第2節　おわりに

岩清水遺跡の発掘調査では、弥生時代後期の住居跡13軒、古墳時代中期の円形低墳墓２基及び時期不明の円形の低墳墓１基、丸山塚古墳の周溝立ち上がり部等を確認することができた。本遺跡の所在する曽根丘陵の東山周辺は、旧石器時代から古墳時代まで幅広く遺跡の分布する地域であるが、とくに弥生時代後期から古墳時代にかけては、甲府盆地の当該時期の様相を明らかにする上で避けて通ることは決してできないほど重要な地域である。このような環境を背景に、今回弥生時代後期の集落跡および古墳時代中期の低墳墓群を確認したことは、甲府盆地の様相をさらに明確にする貴重な資料を追加したことにほかならないであろう。

弥生時代後期の集落跡は、掘り込みも浅く必ずしも良好な成果を得られたとは思わないが、それでも後期前葉から後期末にかけて、ある程度時間的な幅をもって集落が営まれたことを知ることができた。集落は現在の考古博物館南側から丸山塚古墳東側まで広く展開されていたと思われ、もともとは今回検出したよりも多くの住居跡が存在していたものと推測できる。1979年の岩清水遺跡第１次調査（考古博物館駐車場部分）[1]においても、本集落跡と同時期の遺物が出土していることから、この地点にも当該期の集落跡が所在していたことを知ることができ、東山の麓には弥生時代後期になって大規模な集落が存在していたことを理解することができる。東山の一支丘には同時期の方形周溝墓群である上の平遺跡[2]や、古墳時代前期の方形周溝墓群である宮ノ上遺跡[3]、溝が全周するタイプの方形周溝墓１基を出土した東山北遺跡[4]などが立地し、この地域が長く墓域として理解されていた土地である可能性がある。これらの墓に葬られた人々がいったいどこで生活していたのかという疑問がすでに問われており、周辺の複数の集落の共同墓地的な性格が色濃いものと考えられていた[5]。このように考えると、本集落が上の平方形周溝墓群に対応する集落の一つである可能性は決して否定できないものであると考えられる。

次に出土遺物について触れておきたい。本集落跡からは住居跡出土の土器のほかにも包含層から多数の遺物が出土した。これらは遺構に属するものではなく、また全体の様相を知ることができるものは極めて数少なかったこともあって、不明瞭な部分が多い。しかしその中には明らかに甲府盆地外からもたらされたもの、もしくは製作は盆地内で行われていたにしろ、モチーフは盆地外のものが比較的数多く存在した。このような状況は、活発な人の動きが存在したことをあらわすものであり、当時曽根丘陵の東山周辺にも東部東海地方をはじめとする各地域の人々が出入していたことを知ることができるのである。

古墳時代中期に帰属する２基の円形低墳墓は、主体部を確認することはできなかったものの比較的良好な状態で出土した[6]。造営時期については前節でも述べた通り、出土遺物から中期第３四半期後葉から第４四半期前葉頃に位置付けられるものである。東山の一支丘に占地する東山南（Ａ・Ｂ）遺跡には、これらと同様の墳墓が築かれており、このうちの２基からはTK216型式に位置付けられる須恵器が出土していることから、本墳墓群より先行するもので、しかも古墳の形態から本墳墓群はこれらの系譜を引くものであることが理解できる。そして第１号円形低墳墓のすぐ北側に立地するかんかん塚（茶塚）古墳は[7]、副葬された馬具などから、おおよそ中期第３四半期に位置付けられるものである。これは東山南遺跡の円形低墳墓群より後出であるものの、本円形低墳墓群より若干先行するかもしくは同時期のものであり[8]、形態の異なる墳墓がほぼ同時に接するように立地する状況は、この時期の複雑な社会の様相を写し出しているものと思われる。

東山南遺跡の円形低墳墓群も、本円形低墳墓群も周溝より古式須恵器の出土が認められた。当該期において須恵器はまだまだ数は少なく、限られた階層しか手にすることのできなかった高級品であったに違いない。またかんかん塚（茶塚）古墳から出土した副葬品の中には、木芯鉄板張輪鐙を初めとする馬具や、甲冑の部品であると思われる小札など、再新鋭の技術を駆使した品々が含まれる。これはかんかん塚（茶塚）古墳の被葬者が畿内から遠く離れた甲斐にあって、いち早くこのような文物を入手できるルートを保持していたことを物語っている。このかんかん塚（茶塚）古墳と本墳墓群の関係については、規模こそわずかに第２号円形低墳墓のほうが凌いでいるものの、かんかん塚（茶塚）古墳は石室をもつ点や類いまれな副葬品をもつ点を考慮して、

かんかん塚（茶塚）古墳被葬者の下に岩清水低墳墓群の被葬者が位置する関係にあるものと推測される。このような関係を想定した上で、このようなかんかん塚（茶塚）古墳の被葬者と畿内のパイプを通して、本墳墓群の被葬者に須恵器がもたらされたと推測されるのである。それでは、かんかん塚（茶塚）古墳に先行する東山南遺跡の低墳墓群に須恵器をもたらしたのはいったい誰なのか、また曽根丘陵に広く位置する同様の須恵器をもつ低墳墓群にやはり須恵器をもたらしたのもこれらの勢力なのか、様々な疑問が沸き上がってくる。これらについてはまた後に、稿を改めて検討したい。いずれにしてもかんかん塚（茶塚）古墳以降、この地に、これに後続する高塚古墳が見られないのと同時に、本円形低墳墓に後続するものも見られない。この後甲府盆地には、甲府西部に万寿森古墳や加那名塚古墳などの大型横穴式石室墳や赤坂台に群集墳が、また東部に姥塚古墳や金川周辺に四ツ塚古墳等の群集墳がそれぞれ築造されるなど、曽根丘陵を離れて展開する傾向を看取できる。かんかん塚（茶塚）古墳や岩清水低墳墓群築造の後に、甲府盆地を取り巻く社会が著しく変化していった結果であることを否むことはできない。

ところで近年、本墳墓群のような形態の低墳墓が群集して検出される例が各地で増加している。そしてこれらを「初期群集墳」として、主に後期群集墳の初期形態であるものとしている場合がある。しかし甲府盆地の状況を概観してみた場合、いまだにいつ横穴式石室が導入されるのか不明瞭であり、また本墳墓群に後続する古墳の存在を知ることはできない。このような状況の中で、主に後期後半から終末に数多く認められる群集墳に本墳墓群が先行するとは考えにくく、また後期前半に登場するであろう古墳とのつながりを考えるのも、現在においては推測の域を出ないものと思われる。そのため、本地域においては、現在の段階でこれらを初期群集墳というには、さらなる検討が必要であると考える。

以上雑駁ではあるが、本遺跡について気が付くことを書き留めた。本遺跡の遺構確認は困難を極め、遺構・遺物ともにその出土状況は良好とはいえない。しかし発掘調査によって明かになったことは数多く、有意義であったと考える。その一方で、これらの調査結果から新たに解明すべき問題点も数多く提示されたように思う。このような調査結果を踏まえて、今後さらにこれらの解明に力を入れていきたい。

註

1）森和敏　1979　『岩清水遺跡試掘調査報告書－弥生時代末葉の遺構－』　山梨県教育委員会

2）小林広和ほか　1991　『上の平遺跡（第１・２・３次調査）』　山梨県教育委員会

3）林部光　1995　「宮ノ上遺跡」『1994年度下半期遺跡調査発表会要旨』　山梨県埋蔵文化財センター・山梨県考古学協会

4）末木健ほか　1993　『東山北遺跡（第１次～第３次調査）』　山梨県教育委員会

5）中山誠二　1987　「弥生時代終末における上の平遺跡の集落構造」『研究紀要』４　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

6）第３号円形低墳墓は、これら２基と同様の形態でありながら、小型でほとんど古墳時代中期の遺物を確認することができなかった。このためここでは当墳墓と第１・２号円形低墳墓を同等には扱わないこととする。

7）小林広和ほか　1979　『甲斐茶塚古墳』　山梨県教育委員会

8）かつて筆者はかんかん塚（茶塚）古墳と本低墳墓郡についてほぼ併行関係にあるものと考えていたが、その後の遺物群の検討から、現在は若干時期差のある可能性があると考えている。

石神孝子　1998　「甲斐における古墳時代中期の墓制について－曽根丘陵の円形低墳墓－」『研究紀要』14　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

図　　版

1．調査前風景

2．1号住居跡

3．遺物出土状況（平底甕）

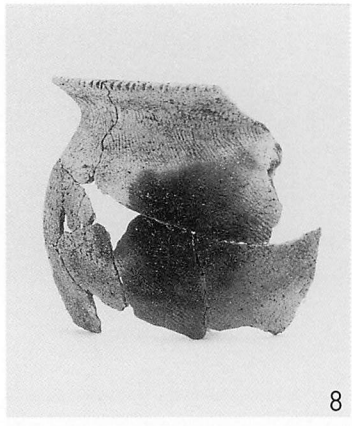
4．遺物出土状況

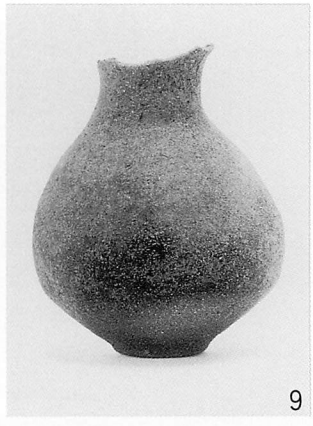
5．作業風景

6．1号住居跡出土遺物

図版 2

7


8

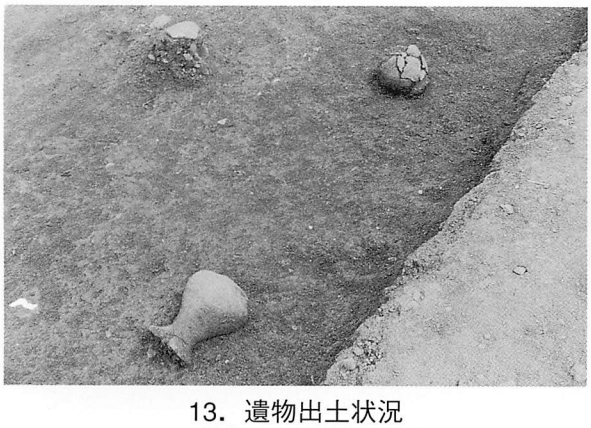

9

10

11

7～11．1号住居跡出土遺物

12．3号住居跡


13．遺物出土状況

14・15．3号住居跡出土遺物　壺

16. 2 号住居跡

17. 2・4・5 号住居跡

18. 6 号住居跡

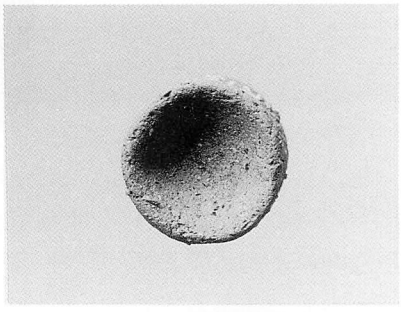
19. 6 号住居跡遺物出土状況

20. 6 号住居跡出土遺物

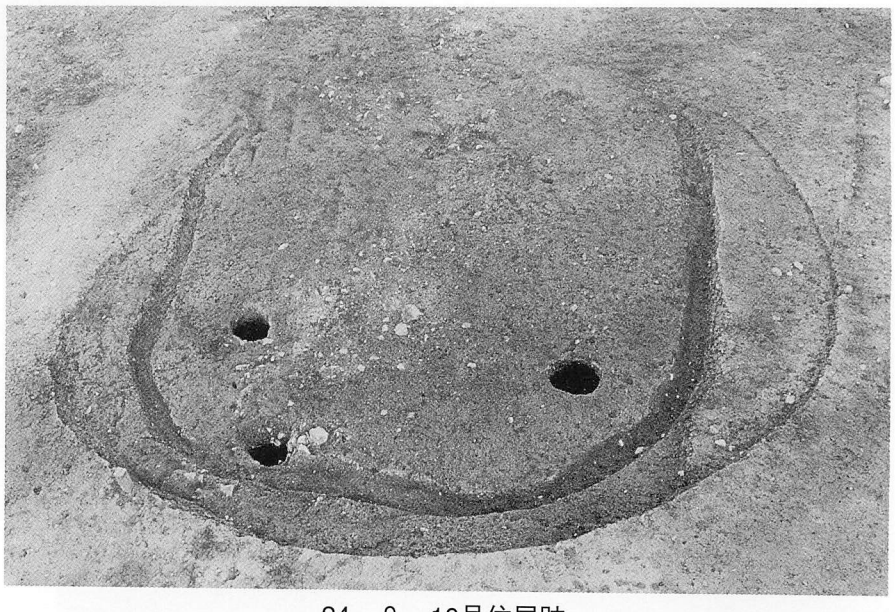
図版 4

21. 8 号住居跡

22. 8 号住居跡耳栓出土状況

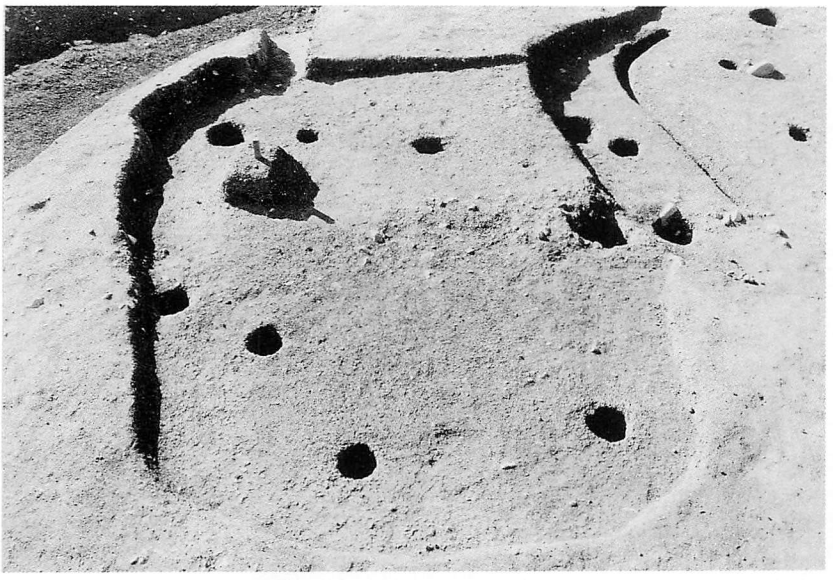


23. 8 号住居跡耳栓

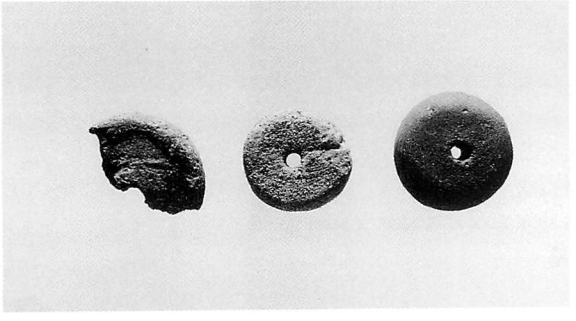


24. 9・10号住居跡

25. 11・12号住居跡



26．13号住居跡



27．紡錘車

28．11号住居跡出土土製品

29．包含層出土磨製石斧

30．土製管玉

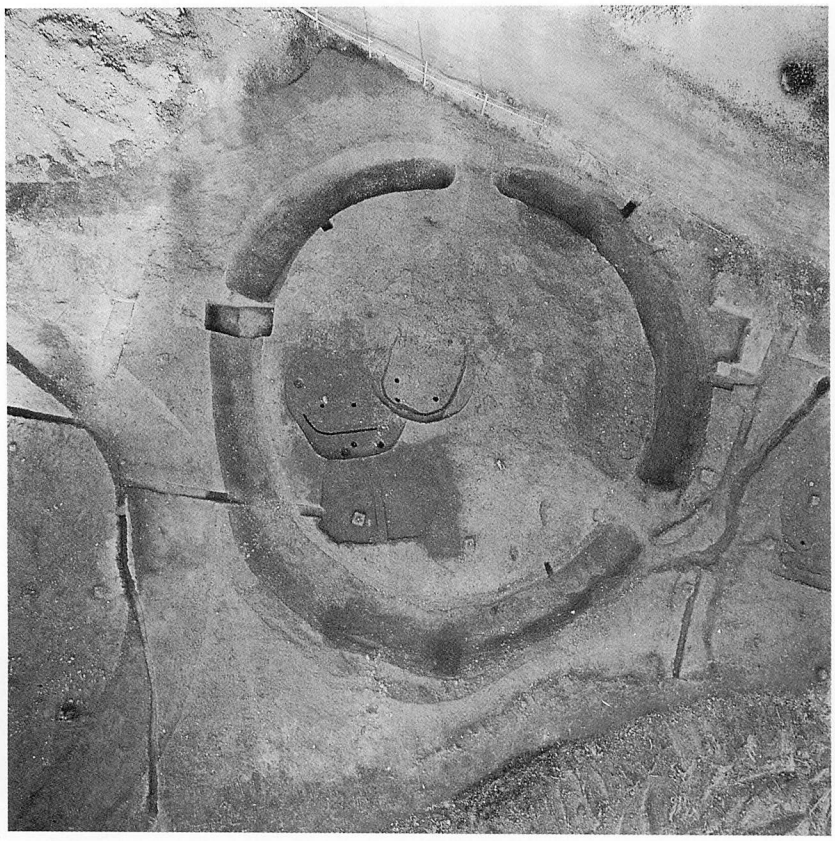
31．土製勾玉

32．ミニチュア土器

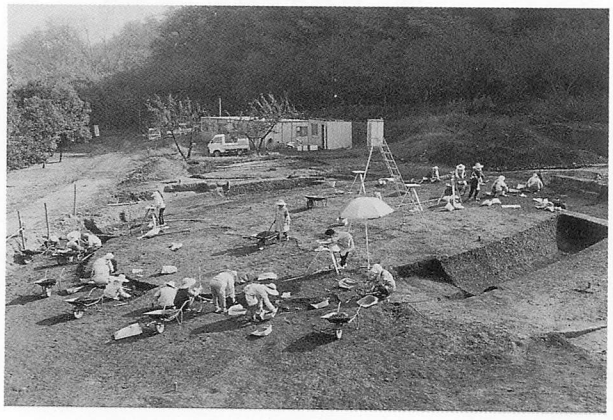
33．包含層出土遺物

34．包含層出土遺物

図版 6



35．1 号円形低墳墓



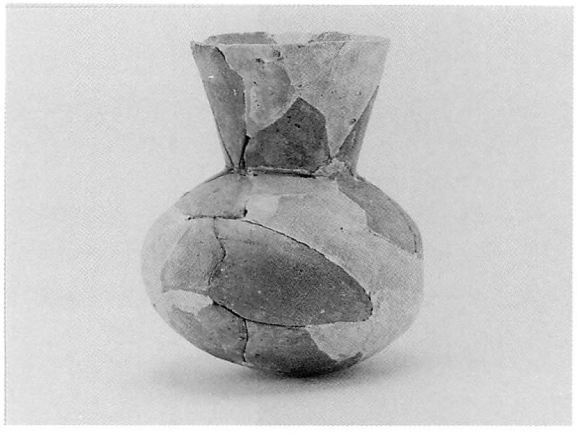
36．作業風景

37．1 号墓周溝部出土遺物

38．瑞出土状況

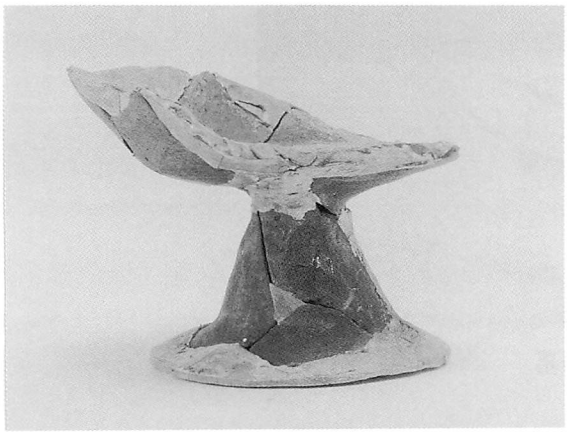
39．瑞

40．高杯



41．壺

42．高杯

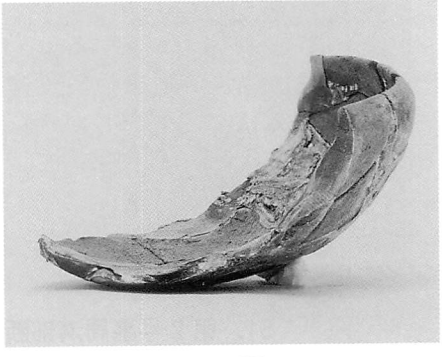


43．高杯

44．高杯

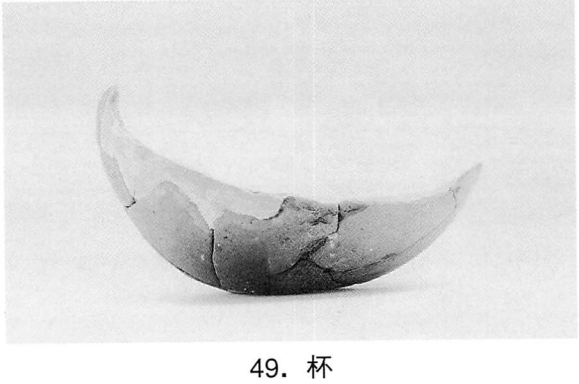
45．高杯

46．高杯



47．杯

48．杯



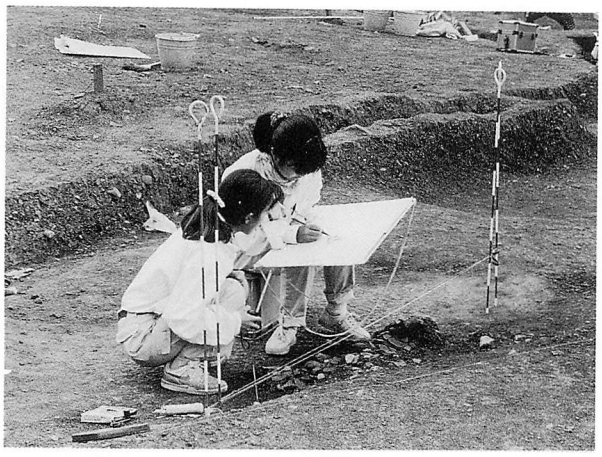
49．杯

図版 8

50．第 2 号円形低墳墓

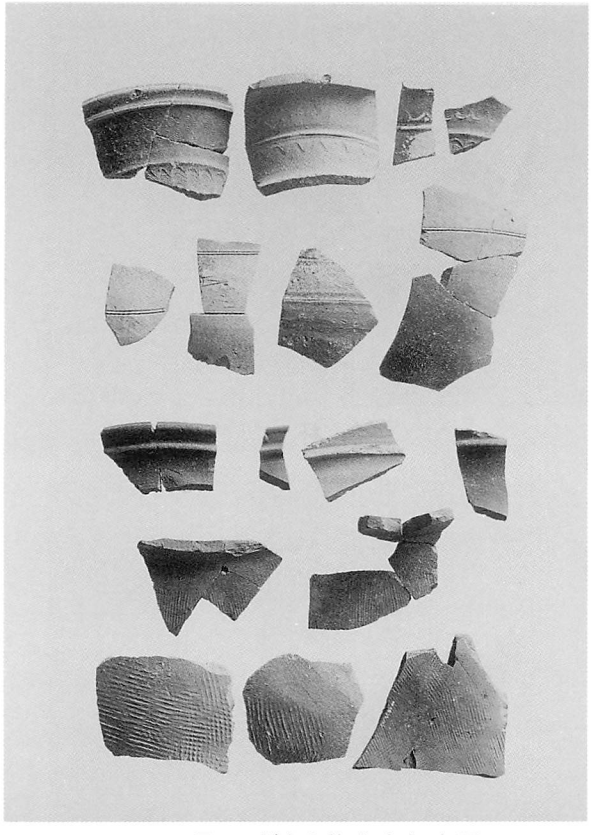
51．第 2 号墓周溝部断面

52．遺物出土状況

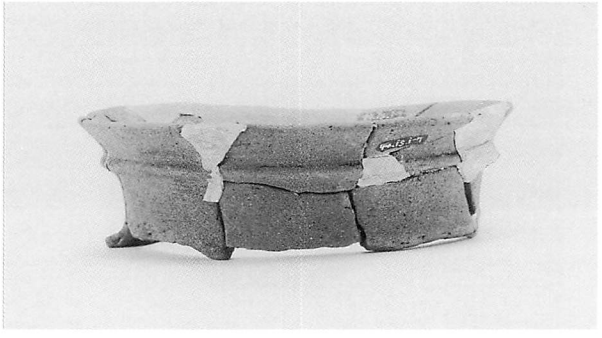


53．作業風景

54．2 号墓出土遺物



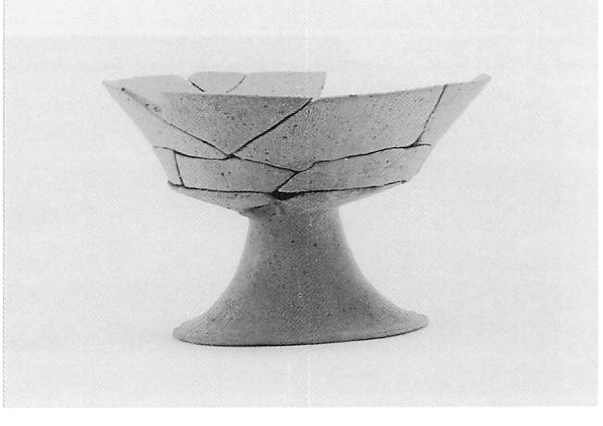
55. 2 号円形低墳墓出土須恵器



56. 壺

57. 高杯（須恵器）

58. 高杯



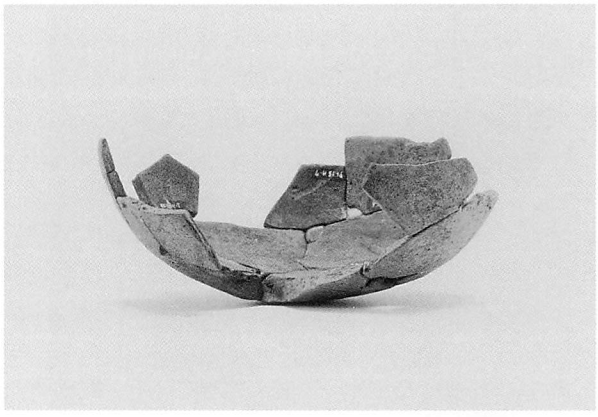
59. 高杯

60. 高杯

61. 高杯

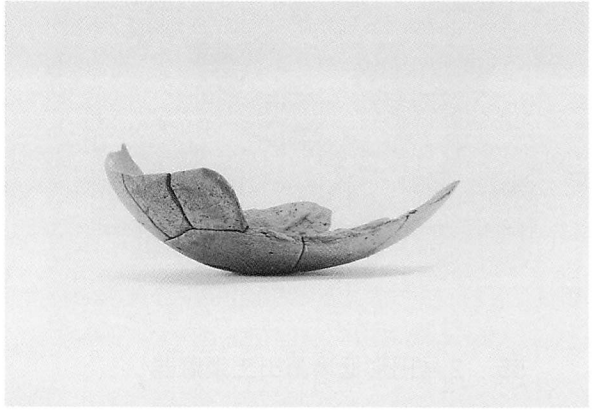
図版10

62．杯



63．杯

64．杯



65．杯

66．丸山塚古墳周溝部調査風景遠景

67．第 8 号トレンチ

68．第 7 号トレンチ

69．調査風景

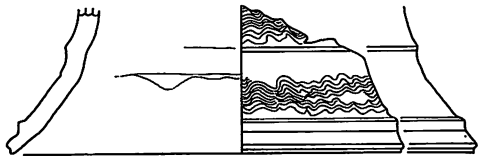
報 告 書 抄 録

ふりがな	いわしみずいせき
書名	岩清水遺跡
副題	甲斐風土記の丘「曽根丘陵公園」造成にともなう発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第182集
著者名	坂本美夫・石神孝子
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400－1508　山梨県東八代郡中道町下曽根923　055－266－3016
印刷所	㈱少國民社
発行日	2000．3
所在地	山梨県東八代郡中道町下曽根字山本
	25,000分の1地形図　甲府
	位置　北緯　35°35′30″　東経　138°35′05″　標高　約260m
	市町村コード　19326
調査原因	公園整備
調査面積	9,400㎡
調査期間	1994年6月7日～1995年2月3日
弥生時代後期	
主な遺構	住居跡13軒
主な遺物	弥生土器・土製勾玉・磨製石斧
古墳時代中期	
主な遺構	円形低墳墓（円形周溝墓）3基
主な遺物	土師器（壺・高杯・椀杯類）・須恵器（蹴・高杯）

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第182集

2000年3月24日　印刷
2000年3月31日　発行

岩清水遺跡

— 甲斐風土記の丘「曽根丘陵公園」造成にともなう発掘調査報告書 —

編　集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曽根923
TEL　055－266－3016
発　行　山梨県教育委員会
印　刷　株式会社　少国民社